

# 齋宮跡発掘調査報告Ⅳ

西加座南区画の調査

遺構編

2024

齋宮歴史博物館



## はじめに

昭和45年度に始まった史跡斎宮跡の発掘調査も今年で54年目を迎えます。

現在、発掘調査は平成28年度に策定した「史跡斎宮跡発掘調査基本方針」に基づき、史跡西部の中垣内地区において、飛鳥・奈良時代という斎宮のはじまりの時代の実態解明に重点を置き、飛鳥時代の方形区画と内部の「口」の字形の建物配置、奈良時代の東西二箇所の方形区画と大型の正殿の発見など、わが国の古代国家形成期のすがたにも迫る大きな成果を上げつつあります。

しかしながら、奈良時代の終わりから平安時代にかけて史跡東部に造営された方格街区の斎宮の歴史的価値の高さは何ら変わることはありません。昭和から平成にかけて数多くの発掘調査が行われた近鉄山田線以北の方格街区の各区画では、資料の再整理とともに調査成果を総括する正報告書の刊行を逐次進めています。こうした基礎的な作業もまた、斎宮跡の価値をさらに高めていくことにつながるものと考えています。

今回、上梓しますのは、従来から通称「神殿」地区とも呼ばれてきた、方格街区中央部の西加座南区画の遺構編です。これまで各調査区でまとめられていた成果を大きく捉えなおすことによって、区画の新たなすがたも浮かび上がると思います。こうした最新の成果が公開され、多くのみなさまにご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本報告書の刊行にあたりましては、斎宮跡の調査研究に平素からご指導をいただきました斎宮跡調査研究指導委員の諸先生方をはじめ、文化庁、明和町などの関係機関や、長年にわたり斎宮跡の発掘調査にご理解とご協力をいただいております地元関係者のみなさまに厚く御礼を申し上げます。

令和6年3月

斎宮歴史博物館

館長 大西 宏明

## 凡 例

- 1 本書は、三重県教育委員会が昭和43年度から平成19年度まで、三重県が平成20年度から令和5年度まで、文化庁の国庫補助等を受けて実施した史跡斎宮跡の発掘調査の中で、史跡東部に位置する方格街区（方格地割）内の西加座南区画での発掘成果のうち、遺構に関する事項を総括したものである。
- 2 斎宮跡の方格街区における各区画の名称については、現在の小字名に基づく名称を採用している。
- 3 遺構・遺物の時期区分の指標となる段階設定は、「斎宮跡の土器編年の再検討」（『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ 柳原区画の調査 出土遺物編』2019）での段階区分に基づき、その表記は「第1段階第2期」などを便宜的に「Ⅰ-2期」と記述している。
- 4 本書に関連する遺構表示記号は次のとおりである。過年度の概報等での表記はこれに替えて表記した。  
SA：塀・柱列 SB：掘立柱建物 SD：溝 SE：井戸 SF：道路 SK：土坑  
SI：堅穴建物 SZ：落ち込み・その他
- 5 遺物が出土した遺構番号の表記は「斎宮跡発掘調査報告Ⅲ 下園東区画の調査 遺構編」に則り、従来、遺構番号の桁数を合わせるために行ってきたSK0555のような表記はせず、SK 555のように番号の頭に0をつけない表記に切り替えている。
- 6 遺物の漢字表記については、材質の違いによる漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「椀」、「つき」は「杯」を用いている。ただし参考文献からの引用はこの限りではない。
- 7 個別の遺構実測図は1/40を基本とし、一部については1/80を用いた。
- 8 本書の執筆は斎宮歴史博物館調査研究課の大川勝宏が行った。なお、刊行に向けての編集作業や、出土遺物の整理作業・図版作成には、下記の協力を受けた。  
斎宮歴史博物館調査研究課  
山中由紀子 川部浩司 小原雄也 八木光代 大和谷周子 中西安美
- 9 本書の執筆にあたっては、「斎宮跡調査研究指導委員」の各委員の指導・助言を受けた。本書刊行時点の委員は下記のとおりである。（五十音順 敬称略）  
浅野 聡（國學院大學教授） 稲葉信子（筑波大学名誉教授） 小澤 毅（三重大学教授）  
金田幸裕（京都大学名誉教授） 京樂真帆子（滋賀県立大学教授） 黒田龍二（神戸大学名誉教授）  
仁藤智子（国士館大学教授） 増岡 徹（京都橋大学非常勤講師） 本中 眞（奈良文化財研究所所長）  
本橋裕美（愛知県立大学教授） 渡邊 寛（皇學館大學名誉教授） 綿貫友子（神戸大学大学院教授）



# 目 次

第1章 序言	
第1節 西加座南区画の概要	1
第2節 調査と刊行の体制	6
第2章 西加座南区画周辺の地形と環境	7
第3章 区画道路・区画内道路	
第1節 西加座南区画の区画道路・区画内道路	9
第2節 西加座南区画の設計プラン	11
第4章 西加座南区画の遺構	
第1節 西加座南区画の遺構変遷の画期	13
第2節 西加座南A期の遺構	15
第3節 斎宮の度会郡移転期の遺構	26
第4節 西加座南B期の遺構	26
第5節 西加座南C期の遺構	32
第6節 西加座南D期の遺構	39
第7節 西加座南E期の遺構	44
第8節 西加座南F期の遺構	48
第5章 西加座南区画の遺構の変遷	
第1節 西加座南A期(第18図)	70
第2節 斎宮の度会郡移転期(第20図)	74
第3節 西加座南B期(第21図)	76
第4節 西加座南C期(第22図)	76
第5節 西加座南D期(第24図)	80
第6節 西加座南E期(第25図)	82
第7節 西加座南F期(第26図)	84
第6章 遺構編小結	86

# 表 目 次

第1表 西加座南区画の発掘調査一覧	4
第2表 西加座南区画発掘調査の組織及び担当者	5
第3表 斎宮跡調査研究指導委員(現行)	5
第4表 斎宮跡出土土器編年と方格街区各区画画期の対応関係	14
第5表 西加座南区画遺構一覧(掘立柱建物1)	52
第6表 西加座南区画遺構一覧(掘立柱建物2)	53
第7表 西加座南区画遺構一覧(掘立柱建物3)	54
第8表 西加座南区画遺構一覧(掘立柱建物4)	55
第9表 西加座南区画遺構一覧(掘立柱建物5)	56
第10表 西加座南区画遺構一覧(竪穴建物)	56

第11表	西加座南区画遺構一覧（土坑・溝・井戸1）	57
第12表	西加座南区画遺構一覧（土坑・溝・井戸2）	58
第13表	西加座南区画遺構一覧（土坑・溝・井戸3）	59
第14表	西加座南区画遺構一覧（土坑・溝・井戸4）	60
第15表	西加座南区画遺構一覧（土坑・溝・井戸5）	61
第16表	西加座南区画遺構一覧（土坑・溝・井戸6）	62
第17表	西加座南区画遺構一覧（土坑・溝・井戸7）	63
第18表	西加座南区画主要遺構の相関関係	71

## 挿 図 目 次

第1図	史跡斎宮跡の位置図	2
第2図	方格街区全体図	3
第3図	西加座南区画の発掘調査区位置図	3
第4図	西加座南区画周辺の微地形と基本層序	8
第5図	西加座南区画外周の区画道路と区画内道路	10
第6図	西加座南区画の設計プラン	12
第7図	西加座南A期の主要建物（S B 5810・5780・5820・5800）	16
第8図	西加座南A・C期の主要建物（S B 6000・6015・6030）	22
第9図	西加座南C期の建物（S B 1435）	35
第10図	西加座南D期の建物（S B 6038）	39
第11図	西加座南F期の主要遺構（S B 8457・S E 8391 遺物出土状況）	47
第12図	西加座南区画主要遺構配置図①	64
第13図	西加座南区画主要遺構配置図②	65
第14図	西加座南区画主要遺構配置図③	66
第15図	西加座南区画主要遺構配置図④	67
第16図	西加座南区画主要遺構配置図⑤	68
第17図	西加座南区画主要遺構配置図⑥	69
第18図	西加座南A期の主要遺構配置	72
第19図	S A 5840 と主要建物（S B 5810・5780・5820・5800）	73
第20図	斎宮度会郡移転期の主要遺構配置	75
第21図	西加座南B期の主要遺構配置	77
第22図	西加座南C期の主要遺構配置	78
第23図	西加座南C期の西加座南区画と柳原区画	79
第24図	西加座南D期の主要遺構配置	81
第25図	西加座南E期の主要遺構配置	83
第26図	西加座南F期の主要遺構配置	85

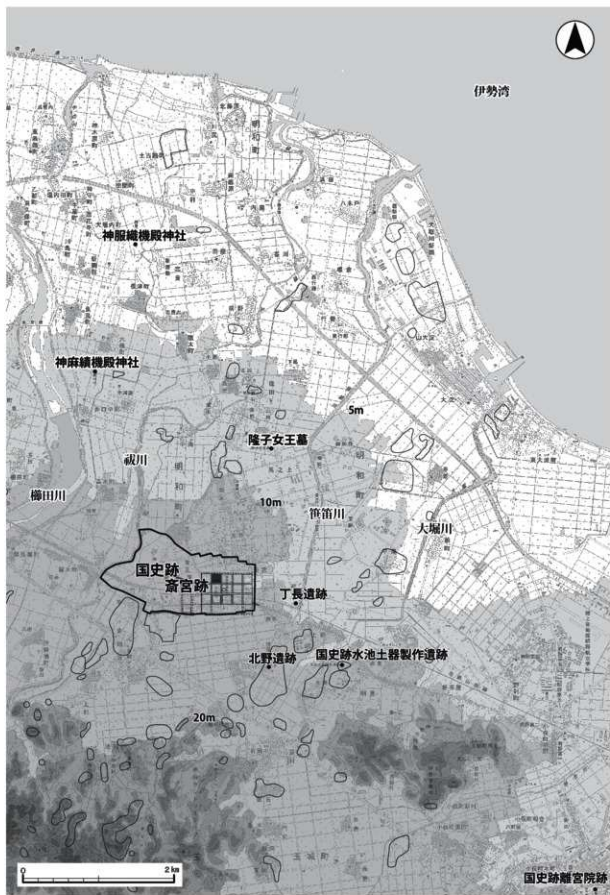
# 第 1 章 序 言

## 第 1 節 西加座南区画の概要

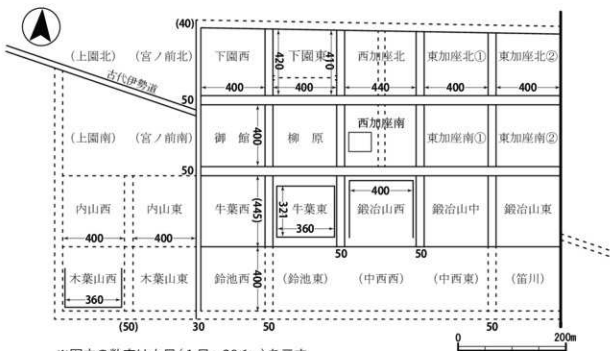
齋宮跡の発掘調査は、国史跡指定に先立つ昭和 45 年度から開始され、今年（令和 6 年）で 54 年目を迎える。これまでの発掘調査は極めて多くの成果を上げており、その成果を公表するために毎年度に各次調査区について概要報告書を、また平成 12 年度以降は、一定の調査がまとまった地区からその地区を総合的に評価する正報告書を刊行してきたところである。これまで刊行した報告書は、報告書Ⅰ（内院地区）、報告書Ⅱ（柳原地区）、報告書Ⅲ（下園東地区）、報告書Ⅳ（飛鳥時代推定中核部）と、報告書Ⅴ（西加座南区画）の遺構写真編である。本書が取り扱う西加座南区画は、奈良時代後期から平安時代にかけて、史跡東半の広い範囲に敷行された方格街区のほぼ中央部に位置し、齋王の居所である「内院」の一画と推定される「鍛冶山西区画」に北接する。方格街区は光仁朝にこの「鍛冶山西区画」を中心とした範囲に宮城と官衙城が展開したのを皮切りに、桓武朝に至ってこの「鍛冶山西区画」を中心に、計画幅 50 尺の区画道路で限る、一辺約 400 尺（1 尺≒29.6cm）四方を基本とする方形区画を東西 4 区画、南北 4 区画分を集積した格子状の都市的構造が成立したものと考えている（第 2 図）。方格街区の敷行が確認されている、南西部の「木葉山西区画」などの 4 区画は、9 世紀前葉の齋宮の度会部移転前に、齋宮の機構整備に伴って増設されたものと考えられている。これまでの発掘調査で、この方格街区の範囲（約 50ha）のうち、旧伊勢街道が通り、人家が密集する近鉄山田線より以北については、すでに約 40% の面積の発掘調査が行われている。その成果としては齋王の居所である「内院」のうち「鍛冶山西区画」は、最初期の光仁朝期には掘立柱塼が二重に囲む構造となり、その後も築地ないしは土塁による細分された区画内に、齋宮跡の中でも極めて大型の建物や井戸が確認されているほか、多彩な緑釉陶器・灰釉陶器を含む、儀礼や宴会に伴うとみられる大型の土器廃棄土坑が多数見つかった。また西接する「牛葉東区画」でも区画全体を囲む掘立柱塼が見つっており、大部分が現在の竹神社の境内地に含まれるため、発掘調査率は高くないが、11～12 世紀の「かな墨書土器」も大量に含む、平安時代前期から末期に至る多数の土器廃棄土坑や大型の建物が確認されている<sup>3)</sup>。「牛葉東区画」北側の「柳原区画」では、四面廂付建物が区画の中央に 9～11 世紀にかけて建て替え続けられ、9 世紀にはその南面に東西の脇殿と広大な前庭部を有する建物配置が明らかとなり、平安時代を通して齋宮寮の儀礼や宴会を執り行った「寮庁」と推定されている<sup>3)</sup>。「柳原区画」西側の「御館区画」は齋宮跡の発掘調査の早期から大型の廂付建物がみつかり、現在残されている小字名からも齋宮寮頭との関連が想定されている。「柳原区画」北側の「下園東区画」およびその東側の「西加座北区画」では、若干の時期差を持ちながらもそれぞれの区画内に 5 間×2 間の欄柱建物を基本とする東西棟が規則的に並列する構造が 9 世紀代に成立する。この建物群については、齋宮の宮城（＝「内院」）の北側に方格街区に取り込まれた位置関係にあることから、蔵部司に付属する「寮庫」と評価されている<sup>3)</sup>。近鉄線以北の他の区画は、具体的な構造や齋宮における機能は未解明のままだが、方格街区北東部では「水部」「鴨」「水司鴨口」や「酒」、「炊」の墨書土器が出土していることから、方格街区北東部の現在の地名で「東加座」と呼ばれる地域を中心に「水部司」「酒部司」「炊部司」などの曹司が展開する、12 世紀の「新任弁官抄」で言われるところの「外院」に相当するものと考えられる。

400 尺四方の方形区画を基本的な構成単位とする方格街区の中にあつて、「鍛冶山西区画」とその北側に連なる「西加座北区画」「西加座南区画」と、南側に想定される「中西西區画」は、これまでの発掘調査により、南北幅は 400 尺だが、東西幅はやや広く、およそ 450 尺と推定されてきている。そして少なくとも「西加座北区画」と「西加座南区画」の東西中軸線には道路幅 10 m 程度の南北の区画内の「小路」ともいえる道路の存在が指摘され、この道路によって区画内が東西に二分されると推定されている<sup>3)</sup>。

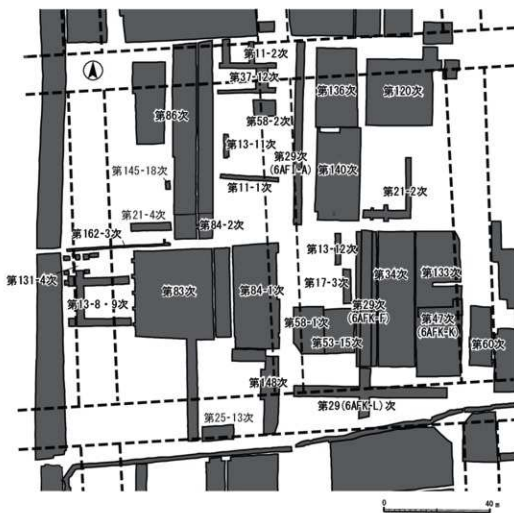
西加座南区画ではこれまでに調査面積の大小合わせて 31 次に及ぶ発掘調査が行われている。第 3 図および第 1 表にその一覧を示した。総調査面積は 9,729.6m<sup>2</sup>に及ぶ。これには、第 29・27 次のような初期のトレンチ調査のように、



第1図 史跡齋宮跡の位置図(1:50,000)



第 2 図 方格街区全体図



第 3 図 西加座南区画の発掘調査区位置図

調査次数	調査面積 (m <sup>2</sup> )	区画内 の位置	調査期間	調査原因	備考
11-1	86	北西	S50.7/2 ~ 7/8	埋蔵文化財調査	個人住宅
11-2	33	北西	S50.7/22 ~ 7/25	埋蔵文化財調査	個人住宅
13-8・9	186	南西	S52.1/10 ~ 2/1	埋蔵文化財調査	個人住宅
13-11	18	北西	S52.1/22 ~ 1/25	埋蔵文化財調査	個人住宅
13-12	24	南東	S52.1/24 ~ 1/25	埋蔵文化財調査	個人住宅
17-3	39	南東	S52 (月日不明)	埋蔵文化財調査	個人住宅
21-2	90	北東	S53.12/11 ~ 12/27	埋蔵文化財調査	個人住宅
21-4	45	北西	S54.1/25 ~ 2/6	史跡現状変更	個人住宅
25-13	60	南西	S55.2/28 ~ 3/5	史跡現状変更	個人住宅
29 (6AFI-A)	276	北東	S54.12/7 ~ S55.3/10	計画調査	試掘トレンチ
29 (6AFK-F)	263	北東	S54.12/7 ~ S55.3/10	計画調査	試掘トレンチ
29 (6AFK-L)	230	南東		計画調査	試掘トレンチ
34	1080	南東	S55.12/10 ~ S56.2/17	計画調査	
37-12	53	北西	S57.1/26 ~ 2/6	史跡現状変更	個人住宅
47 (6AFK-K)	82	南東	S57.12/13 ~ S58.2/26	計画調査	試掘トレンチ
53-15	204	南東	S60.2/27 ~ 3/20	史跡現状変更	盛土
58-1	186	南東	S60.4/23 ~ 5/4	史跡現状変更	盛土
58-2	50	北西	S60.5/18 ~ 5/21	史跡現状変更	個人住宅
83	1400	南西	H元.9/12 ~ 12/21	計画調査	
84-1	670	南西	H元.12/20 ~ H23.14	計画調査	
84-2	130	南西		計画調査	
86	1500	北西	H24/28 ~ 7/2	計画調査	
120	805	北東	H10.1/20 ~ 3/31	計画調査	
131-4	38	南西	H128/28	史跡現状変更	個人住宅
133	910	南東	H138/16 ~ 12/10	計画調査	
136	460	北東	H14.5/14 ~ 8/13	計画調査	
140	535	北東	H15.6/4 ~ 8/12	計画調査	
142-13	3	北東	H15.7/24	史跡現状変更	浄化槽 遺構なし
145-18	3.6	北西	H16.11/15	史跡現状変更	浄化槽
148	230	南西	H17.9/2 ~ H18.1/10	計画調査	
162-3	40	南西	H21.9/10 ~ 9/11	史跡現状変更	下水道

第1表 西加座南区画の発掘調査一覧

のちに実施した計画調査の範囲と重複する地点もあるが、西加座南区画全体の60%強の面積が調査されたことを示している。西加座南区画は、地元で通称「中町裏」とも呼称される地区にあり、昭和以降個人住宅の建築がしばしばみられる地区だった。この区画の最も古い調査である昭和50年度の第11-1・2次調査から53年度の第21-4次調査までは、史跡指定以前の個人住宅建築に伴う調査である。これらの調査のいくつかは、本報告以前には詳細が知られていないものもあるが、第13-8・9次調査ではのちに方格街区の区画道路側溝であることが分かる溝が見つかっている。昭和54年の国史跡指定以後も9回の史跡現状変更申請に伴う発掘調査が行われ、うち公共事業である下水道敷設を除く8件は何らかの形で個人住宅に関わる調査だった。

史跡実態解明のための計画調査は、昭和54年度のトレンチ調査である第29次調査の3箇所、昭和57年度の第47次調査の1箇所のトレンチ調査を比較的初期に行っている。これは昭和48年度以降に史跡指定範囲の確定に向けて行ったトレンチ調査が、「中町裏」地区では実施していなかったことを受けての試掘調査である。以後、面的な計画調査は昭和55年度の第34次調査、平成元年度の第83・84次調査、平成2年度の第86次調査に続く。第34次調査では、大型の掘立柱建物、竪穴土器編年の平安時代初期の基準資料となる土坑一括遺物を得ており、平成元年度の第83・84次調査では区画の南西部に東西約41.4m、南北約35.5mの掘立柱の一本柱脚とその内部の建物による方形区画を発見し、翌年度の第86次調査ではこの方形区画の北側の建物配置などを確認した。その後発掘調査の地点は、同じ方格街区内でも「内院」と推定される「鍛冶山西区画」「牛薬東区画」に移り西加座南区画の解明はしば

年度	調査回数	組織	職員
昭和50	11-1、11-2	三重県教育委員会 事務局文化課	課長：井上武弘 文化財係長：片岡良昭 小玉道明・下村登良男・伊藤久嗣・山澤義貴・伊藤克幸・谷本鋭次・藤原寛・吉村利男・吉水康夫
昭和51	13-8・9、13-11、13-12		課長：井上武弘 文化財係長：片岡良昭 小玉道明・伊藤久嗣・山澤義貴・伊藤克幸・谷本鋭次・藤原寛・吉村利男・吉水康夫
昭和52	17-3		課長：井上武弘 文化財係長：片岡良昭 小玉道明・伊藤久嗣・山澤義貴・伊藤克幸・谷本鋭次・大西素行・藤原寛・吉村利男・吉水康夫・駒田利治・山田猛
昭和53	21-2、21-4		課長：長井学 文化財係長：小久保秀和 小玉道明・伊藤久嗣・山澤義貴・伊藤克幸・谷本鋭次・大西素行・吉村利男・吉水康夫・駒田利治・田中喜久雄・山田猛・新田洋・倉田直純・早川裕巳
昭和54	25-13、29		所長：竹林日出夫 山澤義貴・大西素行・吉水康夫・倉田直純
昭和55	34		所長：佐々木宣明 山澤義貴・大西素行・吉水康夫・倉田直純
昭和56	37-12	三重県齋宮跡調査事務所 明和町	所長：佐々木宣明 山澤義貴・大西素行・吉水康夫・倉田直純
昭和57	47		所長：佐々木宣明 山澤義貴・谷本鋭次・吉水康夫・倉田直純
昭和59	53-15		所長：佐々木宣明 山澤義貴・谷本鋭次・福村直人・倉田直純
昭和60	58-1、58-2		所長：佐々木宣明 山澤義貴・倉田直純・泉雄二・杉谷政樹
平成元	83、84-1・2	齋宮歴史博物館 明和町	館長：中村昭一 谷本鋭次・田阪仁・泉雄二・上村安生・御村充生
平成2	86		館長：中村昭一 谷本鋭次・倉田直純・上村安生・御村充生・久保勝正
平成9	120		館長：奥村敏夫 駒田利治・上村安生・赤岩操・角正芳浩
平成12	131-4		館長：藤沢英二 駒田利治・泉雄二・大川勝宏・西村美幸
平成13	133		館長：桂川哲 駒田利治・泉雄二・伊藤裕偉・水橋公恵
平成14	136		館長：桂川哲 泉雄二・伊藤裕偉・小濱学・水橋公恵
平成15	140、142-13		館長：桂川哲 泉雄二・竹内英昭・伊藤裕偉・小濱学
平成16	145-18		館長：吉村裕之 新田洋・竹内英昭・小濱学・柴山圭子
平成17	148		館長：内田筋夫 竹内英昭・小濱学・水橋公恵
平成21	162-3		館長：瀧上昭恵 倉田直純・大川勝宏・新名強・角正芳浩

第2表 西加座南区面発掘調査の組織及び担当者

氏名(敬称略)	専門分野	職名	在任期間
渡邊 寛	古代史	皇學館大学名誉教授	H13.4.1～
金田 章裕	歴史地理学	京都大学名誉教授	H16.4.1～
増岡 徹	文化財学	京都橋大学文学部非常勤講師	H18.4.1～
浅野 聡	都市工学	國學院大学観光まちづくり学部教授	H20.4.1～
綿貫 友子	中世史	神戸大学大学院経済学研究科教授	H22.6.1～
稲葉 信子	遺産マネジメント	筑波大学名誉教授	H24.4.1～
黒田 龍二	建築史	神戸大学名誉教授	H28.6.1～
小澤 毅	考古学	三重大学人文学部教授	H28.6.1～
本橋 裕美	国文学	愛知県立大学日本文学部准教授	H28.6.1～
京楽真帆子	女性史	滋賀県立大学人間文化学部教授	H30.4.1～
仁藤 智子	古代史	国士舘大学文学部教授	R2.9.1～
本中 眞	庭園学	奈良文化財研究所所長	R3.11.1～

第3表 齋宮跡調査研究指導委員(現行)

し中断するが、平成9年度の第120次調査で、区画北東部の区画道路の様相が明らかになったのを皮切りに、平成13年度の第133次調査、14年度の第136次調査、15年度の第140次調査で区画の東部の解明が進んだ。

その後、齋宮跡の発掘調査は「史跡東部整備事業」による史跡公園「さいくう平安の杜」の整備に伴う「柳原区画」の史跡整備事業に伴う発掘調査に注力されることとなったが、平成28年度に策定した「齋宮跡発掘調査基本方針」に示した「重点的な調査対象地域」のひとつに方格街区の東部を挙げており、現在重点的に調査を進めている史跡東部の飛鳥・奈良時代の齋宮中核部と推定される地区の調査後もさらなる解明を進めていくべき地区ではあるが、今回調査成果の一定の総括をすることで、今後の「西加座南区画」および周辺区画の課題も浮かび上がるであろう。

#### 註

- ① 「齋宮跡発掘調査報告Ⅰ」内院地区の調査 本文編 2001
- ② 「齋宮跡発掘調査報告Ⅱ」柳原区画の調査 遺構・遺構総括編 2014
- ③ 榎村寛之「道と蔵」「齋宮歴史博物館研究紀要六」齋宮歴史博物館 1997
- ④ 井上和人「齋宮方格地割研究への提言—再検討への第一歩—」「齋宮歴史博物館研究紀要十二」齋宮歴史博物館 2003  
大川勝宏「齋宮方格地割に関する二・三の試論」「齋宮歴史博物館研究紀要十七」齋宮歴史博物館 2008

## 第2節 調査と刊行の体制

齋宮跡の発掘調査は第2表にもあるとおり、史跡指定以前は県教育委員会事務局文化課の直営で実施してきたが、昭和54年3月の国史跡指定以後は、県教育委員会は齋宮跡調査事務所を発足させ、実態解明の計画調査まで手を広げて調査を行うようになった。さらに平成元年度には史跡内に齋宮歴史博物館が発足し、以後、齋宮跡の調査の拠点となっている。なお、当初教育委員会組織としてスタートした博物館は、平成20年度から教育委員会との「共管」という形は残しつつも知事部局に所管替えとなり、平成24年度からは環境生活部に所属している。一方、史跡の現状変更許可申請に伴う発掘調査は、史跡管理団体となっている明和町が実施主体となり、実際の調査の進行については、現在は齋宮歴史博物館が、調査資料の分散を防ぎ、調査方法等を均質化するため、現場指導という形で関与している。明和町側も史跡指定当初は教育委員会事務局に担当課が置かれたが、平成13年度からは町長部局に移管となり、現在齋宮跡・文化観光課が担当している。

齋宮跡の各年度の調査の概要報告は、現在は調査実施の翌年度に調査担当者等で毎年執筆刊行している。一定の地域の調査の総括を目指す正報告書はこれまで鍛冶山西区画・牛車東区画（平安時代の内院）、柳原区画（寮庁）、下園東区画（寮庫）、中垣内地区（飛鳥時代の推定中核部）を刊行してきている。本書にかかる西加座南区画は令和3年度に「遺構写真図版編」を刊行しており、遺構編である本書ののち次年度以降に遺物・総括編を刊行する予定である。初期の発掘調査には未整理・未公開の部分も少なくなく、広域に検討することで、遺構の時期決定や性格付けも新たにできるようになることから、このような本報告書の刊行も、各年度の概報刊行と同様、齋宮跡の調査研究の進展のため継続していく予定である。

なお、各年度の発掘調査や報告書等の刊行にあたっては齋宮跡調査研究指導委員会（第3表）より常に御指導・御教示を頂いている。あわせて謝意を表したい。

最後に本書刊行時の齋宮歴史博物館内の体制は下記の通りである。

館長：大西宏明 調査研究課：山中由紀子・川部浩司・大川勝宏・小原雄也  
八木光代・大和谷周子・中西宏美



## 第2章 西加座南区画周辺の地形と環境

西加座南区画が包摂される齋宮の方格街区の成立と展開・変遷の概略は、すでに様々な形で示されている<sup>3)</sup>。奈良時代後期までは史跡西部の広範囲に分散する齋王宮城と官衙群が道路により連結されていると考えられ、規則的な全体計画は窺えない。それが、齋宮が史跡東部に移設された光仁朝から桓武朝以降は方格街区という都市計画のフレームの中に収められ、齋王の居所である「内院」は特定の区画から動かなくなり、諸官司も基本的にはこの街区の各区画の中にまとめられるようになったと考えられている。

方格街区敷設の基盤となるのは、史跡西部の祇川段丘以東に広がる、標高約15～8mの東北東に向けて極めて緩やかに傾斜する洪積台地である。史跡内での台地面の傾斜は数%しかない平坦な地形となっている。現在この台地上の地表には耕作土などの腐葉土系の土壌があり、遺物包含層を挟んでその下部から、史跡東半にはしばしば台地上の凹地に堆積したとみられる黒ボク系の土壌もあるが、基本的にはその下部で現れる橙色粘質土や白色粘質土などの洪積層上面が現れ、この面を遺構検出面とすることも多い。西加座南区画でみると現地表面からおおむ40～80cmの深さでこの地層面に達する。

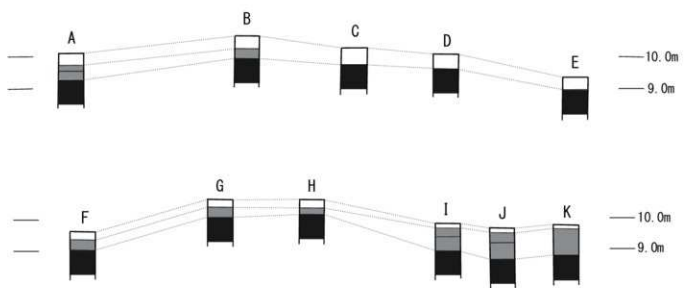
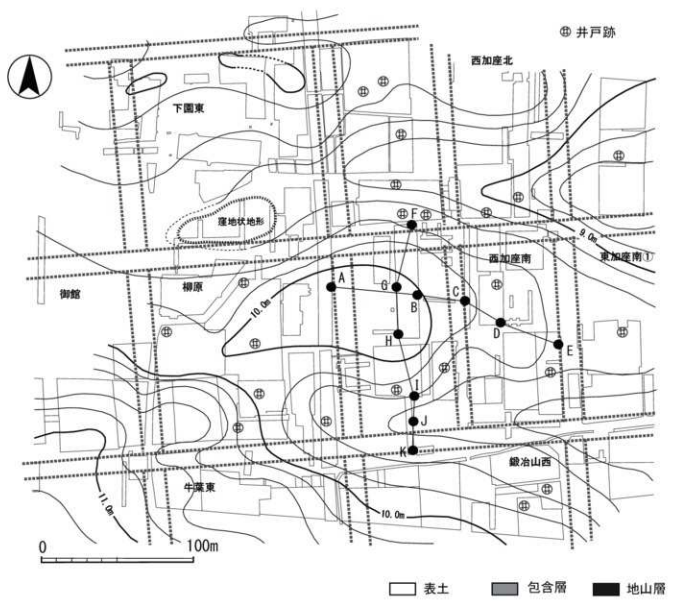
全体的にはほぼ平坦とは言いながら、方格街区の範囲内には微地形的な起伏が存在する。まず、これまでに方格街区の東西道路に近い位置で、西から東に傾斜する東西方向の二条の浅い谷が知られている。道路と谷の関係はおそらく東西方向の排水の効率化を意図したものと考えられるだろう。北側の谷は方格街区北西部の宮ノ前北区画あたりに端を發し、街区の北辺の区画列と北から二列目の区画列の間を東に流下し、もう一つは柳原区画の南東隅付近に端を發し、西加座・東加座の区画列と鍛冶山の区画列の間を東に流下する。「内院」の牛業東区画や鍛冶山西区画は、この谷の南側の平坦面の広い微高地上に造営されている。これらの谷の規模は、西加座南区画付近では、北側の谷で幅100m強、深さ1m弱、南側の谷で幅約70m、深さ0.5～0.7mとなっている。

西加座南区画は、この二つの浅い谷とこれに挟まれた尾根状の地形にあり、西の柳原区画から続く小島状の高地がそのまま東の東加座南①区画に向かって尾根状に伸びている。区画内の現地表面での最高点は標高約10.1m、最低点は約9.2mである。これらの微地形的な起伏は西加座南区画では部分的に遺構検出面までの深さが浅いことから、既に一定の削平を受けている可能性はある。しかしながら、西加座南区画は南側の谷底にあたる南端を除けば、排水的には安定した地形を基盤にしているといえるだろう。

最後に、個々の遺構の詳細は第4章に譲るが、地形的な条件と関係が深いであろう井戸の分布をみると、この柳原区画から西加座南区画の小島状の高地の周囲を巡るように、高地と谷底の堺の部分に集中していることが分かる。未調査地が多く、今後の調査の成果に期待するところも多いが、例えば下園東区画では1基も井戸が見つかっていないことと対照的である。これまでの調査では、齋宮の多くの井戸が、発掘調査の遺構面から0.5～1.0m前後で洪積世粘土層から円礫層に変わり、3～4.5mで底部に達していることから、洪積台地上の浅い谷と井戸の間には水利上の相関があるとみられる。このように西加座南区画は方格街区の中でも、「内院」との近接、排水と水利の面で好適な立地の区画であることが窺われる。

### 註

- ・田阪仁・泉雄二「国史跡齋宮跡調査の最新成果から—史跡東部の区画造営プランをめぐって—」『古代文化』49-11 1991
- ・榎村寛之「道と葺」『齋宮歴史博物館研究紀要六』1997
- ・山中章「齋宮方格地割の設計」『条里制・古代都市研究一七』2001
- ・大川勝宏「齋宮方格地割に関する二・三の試論」『齋宮歴史博物館研究紀要十七』齋宮歴史博物館 2008
- ・大川勝宏「齋宮方格地割の変遷・工期についての素描」『齋宮歴史博物館研究紀要24』齋宮歴史博物館 2015



第4図 西加座南区画周辺の微地形と基本層序(1:2,500 1:60)

### 第3章 区画道路・区画内道路

#### 第1節 西加座南区画の区画道路・区画内道路

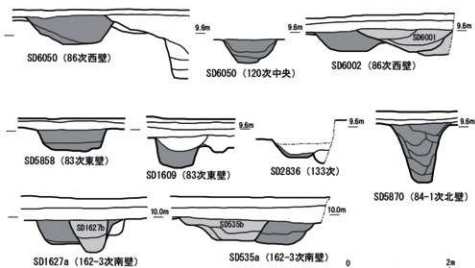
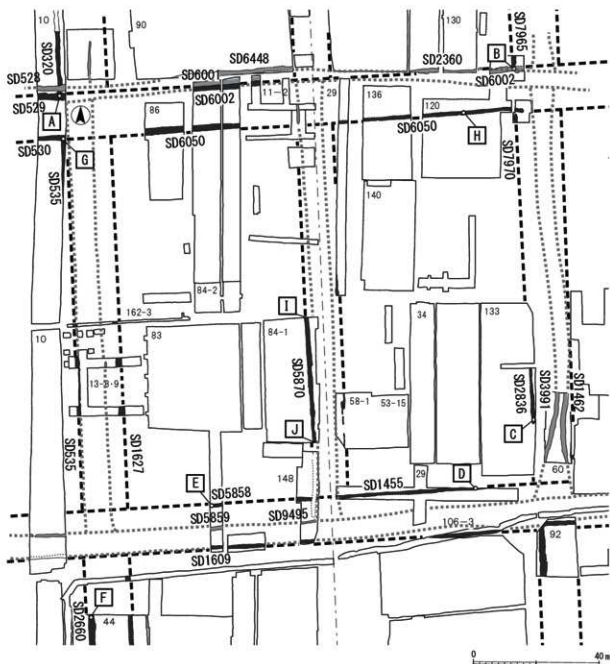
ここでは、西加座南区画の外周に接し、区画を形成する方格街区の区画道路と、西加座地区の区画に特有の、区画の東西中軸を南北に通る区画内道路について触れる。

外周の区画道路のうち、最も検出が進んでいるのは北辺道路である。特に南側溝は断続的ながら、西から第10次調査のSD 530、第86次・第136次・第120次調査のSD 6050と総延長で約132m分を検出している。これらの溝の断面はU字形を呈する。北側溝はあまり明確ではなく、西から第10次調査のSD 529、第86次～第120次調査のSD 6002がある。第86次調査区内では後世のSD 6001が重複するため、溝の断面形は明らかではない。

次に道路遺構が良好に確認されているのは南辺道路である。東端の第92次調査で南辺道路南側溝と東辺道路の西側溝が交わる部分が確認されており、第83次調査南端のSD 1609も南側溝の位置を踏襲するものとみると延長約105m分となる。北側溝も第83次調査のSD 5858を西端に、第29次調査(6AFK-L)のSD 1455まで、延長約88m分を検出している。ただし、区画西端の交差点は全くの未検出で、東端の交差点も先述の第92次調査区で一部を確認しているに過ぎない。第29・83次調査で検出した側溝はいずれも浅く、断面形は幅広の箱形を呈する。

西辺道路は、南端の交差点が未検出だが、北端の交差点は第10次調査で西半分を検出している。西辺道路の西側溝のうち、下園東区画に接する部分ではSD 320があり、この南北方向の側溝は交差点内では一旦途絶している。柳原区画に接する部分でSD 535が検出されており、その南の第162・3次調査区で、下水道整備に伴う細い調査区ながら、西辺道路の東・西両側溝を良好に検出している。特に溝の両肩が明らかで、区画道路造営時の位置・形状を残すと考えられる東側溝は、検出幅約1.6m、深さ約0.5mの断面逆台形で、西側溝も東肩部を後代の溝に埋められているが、底部の形状から幅約1.6m、深さ約0.5mの逆台形のもので推定できる。東辺道路は第120次調査で北端の交差点部分を検出しており、ここでも方格街区造営段階では交差点内には南北側溝は掘削されていないことが判明している。ただし第120次調査区内で検出した溝のうち、北辺道路北側溝のSD 6002からは近世陶磁器等も出土しており、後世の再掘削を受けている可能性もある。東辺道路の西側溝にあたるSD 7970は検出長も短く土坑状の形状で、幅約1.0m、検出深約0.1mで断面形は浅いU字状を呈する。その南側の延長とみられる第133次のSD 2836は延長約24m分を検出している。幅約1m、検出深約0.6mの断面U字形ないしは角の弱い逆台形状の溝である。この溝も南端は第133次調査区内で途切れ、区画南東隅の交差点部分には届かない。

さらに西加座南区画から西加座北区画にかけての区画内道路についてみる。方格街区のうち、鍛冶山西区画から北の西加座北・南両区画は、区画の東西幅が方格街区内の他の区画に比べて広く、現在もこの区画の東西中心軸付近に南北道路が残っていることから、区画の東西中央を南北に貫通する区画内道路の存在が早くから指摘されているが、具体的な道路幅や形状が明確に示されてこなかった。現道と重複するため、側溝や路面などが具体的に確認できている地点は少なく、西加座北区画では第90次調査区のSD 6471が位置的に西側溝を踏襲したのと考えられているのみである。この区画内道路について、最初に具体的に言及されたのは田阪仁・泉雄二氏の論考で、西加座の区画の東西幅を440尺とし、区画内道路の幅を側溝心々間で30尺と復元した<sup>2)</sup>。その後山中章氏は、この区画内道路幅を30尺、道路の両側溝幅をそれぞれ10尺とする復元案を示している<sup>3)</sup>。井上和氏は西加座南区画の東西幅を435尺、区画に接する東辺道路の西側溝、西辺道路の東側溝の幅を加えて450尺という完好な数値が設計時の数値とする見解を示された<sup>4)</sup>。西加座南区画では、第84-1次調査のSD 5870が西側溝と考えられている。SD 5870の北側延長は遺構面の掘乱で明らかでなく、南側延長は第148次調査の平安時代後期のSD 9499が重複しており、明らかではない。SD 5870は第84-1次調査区北端では検出幅約1.2m、深さ約1.2mの切込みの深い逆台形状の溝である。こうした形状の溝は、西加座南区画の他の場所では見つからない。これに対して東側溝は、第29次(6AFI-A)や第58-1次



第5図 西加座南区画外周の区画道路と区画内道路(1:1,200 1:80)

調査区で未命名の溝が位置的に該当するが、いずれも細く浅い溝で、S D 5870 とは対照的である。

以上は、方格街区造営当初に近い段階の区画道路等の姿だが、この道路も平安時代後期には幅員を減じ、直線的なものではなくなる。北辺道路は竇宮跡土器編年でⅢ期に入る頃には、道路全体がやや北に寄り、北側溝 S D 2360・6002・6448 に、南側溝は S D 6001 となり、道路幅は両肩間で約 3～4 m のやや湾曲したものになる。西辺道路・南辺道路も具体的に遺構で押さえられる箇所は少ないが、いずれも幅員が 8～9 m 程度になるようだ。東辺道路は、第 60 次調査の S D 1462・3991 が強く湾曲し、道路側溝と認識されてこなかったが、位置的にみて竇宮Ⅲ期以降の道路側溝と考えていいだろう。この両溝間は最も狭い箇所で約 1.2 m となるが、Ⅲ期以降は方格街区の東部が大きく衰退していくことが知られているので、こうした狭小な道路でも機能したと考えられる。

次に竇宮歴史博物館が管理する遺構の地図情報システムから、西加座南区画の外周の各区画道路の側溝のうち、遺構の遺存状態が良好で、可能な限り方格街区造営当初の形に近いとみられる地点の底部中央の座標データを抽出し、側溝の法線を見てみた。第 5 図の A～J がその地点である。これによると北辺道路北側溝が A-B 間で北に 4° 14' 54" の傾きを、南側溝 G-H 間で 4° 14' 26"、南辺道路北側溝の D-E 間で 4° 14' 53"、東辺道路西側溝の B-C 間で西に 4° 17' 55"、西辺道路西側溝の F-G 間で西に 4° 17' 43"、それぞれ東・北に対して傾きを持っており、やや随意的な測定の抽出とはいえ、非常に高い設計・施工精度を持っていることが窺われる。なお、区画内道路西側溝の I-J 間については、西に 4° 44' 55" の振れで、測定の距離が短すぎる可能性もあるが、西加座南区画の造営における工程の時期の違いに起因することも考えられるだろう。

## 註

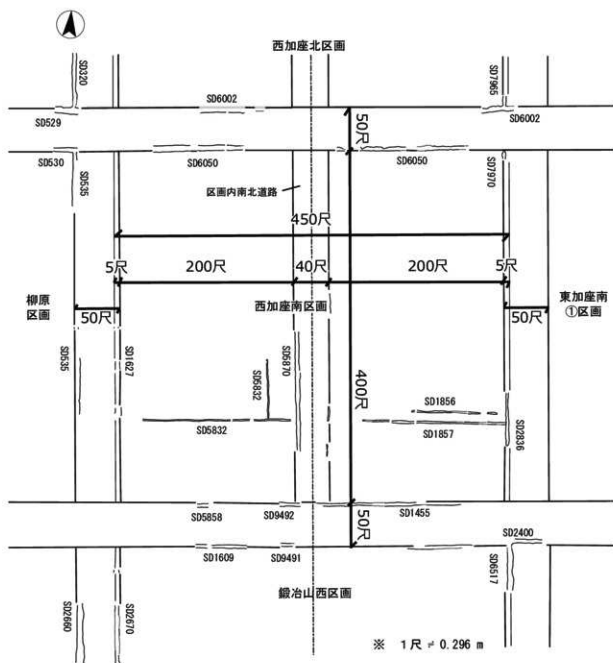
- ①田阪仁・泉雄二「国史跡竇宮跡調査の最新成果から一史跡東部の区画造営プランをめぐって」『古代文化』49-11 1991
- ②山中卓「竇宮方格地割の設計」『桑里制・古代都市研究一七』2001
- ③井上和人「竇宮方格地割研究への提言-再検討への第一歩」『竇宮歴史博物館研究紀要十二』2003

## 第 2 節 西加座南区画の設計プラン

第 1 節で見てきた、方格街区造営時の区画道路等のあり方から、西加座南区画の設計プランを第 6 図のように復元した。区画の東西中心軸を通る区画内道路で分割された東西の区画は、側溝の内々でそれぞれ東西 200 尺、南北は 400 尺とみられる。南北の 400 尺という規模は、方格街区の各区画を構成する基本的なスケールでもある。区画外周の区画道路は、両端の側溝の外側を含めて 50 尺という計画幅を持つことも他の区画と共通する。

次に区画内の南北道路は、従来には側溝心々で幅 30 尺という見方もあったが、他の区画道路同様、両側溝を含めた計画幅の中に道路を敷設するという考え方に拠っているならば、第 84-1 次調査の S D 5870 と第 58-1 次調査の溝の間隔は 104～118 m となり、30 尺幅を大きく超える。これを 40 尺と考えると約 118 m となり、側溝間の実測値にはほぼ合致する。従来、区画内道路幅を含んだ西加座南区画の東西幅は、外周の区画道路の側溝分を除いて 435 尺という考え方があった。しかし実測値から見ても、方格街区全体の計画上の道路幅が 50 尺を中心に完好な数値を取っていることからみても、区画内道路の幅は端数を含まない 40 尺を計画寸法としていると見る方が自然であろう。次に、西加座南区画の西辺道路東側溝は、第 162-3 次調査では幅約 1.6 m、東辺道路西側溝は第 133 次調査の S D 2836 で約 1.0 m の検出幅がある。この側溝の設計上の幅を 5 尺とすると、この両端側溝を含んだ西加座南区画の東西幅は 450 尺で設計したとみられ、これも完好な数字となる。これは西加座南区画だけでなく、少なくとも南接する「内院」の鍛冶山西区画、北側の西加座北区画と共通する規格である。

現在想定されている方格街区の造営の流れは、奈良時代後期の光仁朝に竇宮自体を史跡西部から東部に移設し、その段階の竇宮は東西 450 尺で設計された鍛冶山西区画を中心に、周辺に官衙域が区画道路を伴わずに展開するもので、方格街区は敷行されていなかったと考えている。続く桓武朝になって光仁朝段階の竇宮を核に、計画幅 50 尺の区画道路で区切られた、一辺 400 尺四方 (約 14,020m<sup>2</sup>) を基本とする方形区画を積層して、方格街区が形成されたと考え



第6図 西加座南区画の設計プラン

られている。その際、光仁朝に東西450尺で造営された鍛冶山西区画の北側の西加座北・南区画もまた東西450尺の幅を持つことになるため、区画内道路で東西に二分し、450尺から区画道路側溝分を割いた440尺のうち40尺を区画内道路の計画幅として割くことで、区画内で利用できる空間は200尺×400尺×2≒14,020㎡ということになり、他の方形区画と同面積になるような配慮もなされたのではないだろうか。

## 第4章 西加座南区画の遺構

### 第1節 西加座南区画の遺構変遷の画期

西加座南区画では、これまでの発掘調査により約160棟の掘立柱建物を検出している。それに対して竪穴建物は第140次調査で確認したS1 8845など3棟のみである。掘立柱建物は、西加座南区画の全域にみられ、遺構どうしの重複関係と、出土遺物による時期の推定から、竊宮跡の土器編年による時期区分でⅠ-3期新段階からⅢ-2期までのものがみられる。第5章で述べるが、近隣の内院推定地である牛業東区画や寮庁推定地である柳原区画が竊宮Ⅲ-4期まで建物が見られることと比較すると、奈良時代末から平安時代にかけて竊宮のフレームを形作る方格街区の中央部に位置する区画でありながら、およそ100年早く衰微したことがわかる。

また、平安時代の竊宮の画期を考える上では、まず『類聚国史』や『続日本後紀』といった文献史料から窺われる天長元(824)年から承和六(839)年にかけての度会郡の離宮院への移転を考慮しなければならない。この移転にあたっては、この時期に該当する竊宮Ⅱ-2期の土器が大量に廃棄する土坑が、方格街区の区画道路の中央部にまで掘削され区画道路の機能が後退することから、この多気郡の竊宮を部分的に移動させるだけでなく、整備を進めてきた竊宮の都市的構造も放棄するものだった可能性が指摘されている<sup>①</sup>。また、この移転の前後での方格街区区内での建物配置の大幅な変化は、鍛冶山西区画や柳原区画などでも認められ、竊宮全体に影響したのもだったことがわかる。

その後、承和六年に度会郡の竊宮官舎の火災という異常な事態を経て竊宮が多気郡に復されたのち、区画内でも掘立柱建物は第84-2次調査区周辺のように、同一地点で多いところで十回以上建て替えが繰り返された地点がある他、逆に建物密度の薄い地点もある。第83・84次調査区の掘立柱脚に圍繞された方形区画と内部の建物のように、他に区画内に建物群が構成されることも窺われる。また区画の中の広範囲に同規模の建物が規則的に並列配置されたりL字形配置となったり、さらにそれが崩れるなどの建物配置の変化もみられる。このように区画内の掘立柱建物の変化は、しばしば建物の棟方向の変化を伴っており、建物の重複関係とともに棟方向によるグルーピングにより、区画内の建物群の変化を看取することができる。

こうしたことから、西加座南区画では掘立柱建物の棟方向と建物群の変化から、A～F期の6段階の画期に分け、さらにA期とB期の間に度会郡への移転期間を想定した。また、本報告で扱うのは西加座南区画が竊宮の一画として機能した期間とし、このA～F期は、竊宮跡の土器編年による時期区分のⅠ-3期新からⅢ期の期間に該当する<sup>②</sup>。詳細は第5章に譲るが、A～F期の概要は概略下記の通りである。

- ・A期：西加座南区画の造営が始まり、区画南西部に掘立柱脚による方形区画が整えられ、竊宮跡編年でⅠ-3期新～Ⅱ-2期古の時期。建物の多くがE4°N前後の方格街区と棟方向を合わせる。
- ・度会郡移転期：天長元年から承和六年まで竊宮の度会郡離宮院への移転が行われた時期、Ⅱ-2期古～新の間。
- ・B期：多気郡に竊宮が復し、新たに竊宮が再構築される時期。西加座南区画の東西を分ける区画内道路を挟んで、区画全体に建物が計画的に配置され、ほとんどの建物が方格街区と棟方向を揃える。Ⅱ-2期新～3期古頃の時期。
- ・C期：区画内道路の両側で異なった建物配置に変化する時期。特に区画南西部では方格街区の計画軸から大きく外れたE3°4°Sの棟方向で、廂を持つ大型の建物が現れる、Ⅱ-3期中新を中心とする時期。
- ・D期：区画内建物が小規模化し、棟方向も区画内の各所で小さなまとまりを作る、Ⅱ-4期を中心とする時期。
- ・E期：区画内で北西部に建物が見られなくなり、区画南西部に比較的建物が集中する、Ⅱ-4期新～Ⅲ-1期にかけての時期。
- ・F期：区画北半の建物がほぼ消失し、区画南東部に比較的建物が集中するⅢ-2期を中心とする時期。

以下、この画期の区分に沿って西加座南区画の各遺構について述べる。なお、竊宮が存続した飛鳥-鎌倉期以外の

実年代	都城跡年	築造年代	身宮跡年 段階区分	内院 築期	御原 築期	西加南南 築期	西加南南區主要遺構		遺 宮 関 連 事 項
							主要建物	その他	
620	飛鳥 I	Ⅱ-1							
630		Ⅱ-15							
640	飛鳥 II	Ⅱ-2							
650		F-101							
660	飛鳥 III	Ⅲ-3							
670		F-17							
680	飛鳥 IV	Ⅲ-4		古					大東皇女が伊勢に向う(674)
690	飛鳥 V	F-41		1-1					
700	平城 I	Ⅲ-5		新					齋宮を築に連じる(701)
710	平城 II	C-2		1-2					源の公文に初めて印を用いる(710)・井上内親王・崇王・善王(721)
720	平城 III	Ⅳ-1		1-2					このころ齋宮の官位相当が定められる
730		F-25		古					齋宮年料に官物を用いる確定(730)
740	平城 IV	Ⅳ-2		1-3					
750	平城 V	NN-32		1-3					筑太王を伊勢に派遣(771)・通人内親王を崇王とする(772)
760	平城 VI	Ⅳ-3	○89	新	1期	A1期			齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
770	平城 VII	Ⅳ-3	○89	新	1期	A1期			
780	平城 VIII	Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
790	平城 IX	Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
800	平城 X	Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
810		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
820		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
830		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
840		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
850		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
860		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
870		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
880		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
890		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
900		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
910		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
920		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
930		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
940		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
950		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
960		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
970		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
980		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
990		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1000		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1010		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1020		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1030		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1040		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1050		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1060		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1070		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1080		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1090		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1100		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1110		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1120		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1130		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1140		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1150		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1160		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1170		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1180		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1190		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1200		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1210		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1220		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1230		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1240		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1250		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1260		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1270		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1280		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1290		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1300		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1310		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1320		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1330		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1340		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1350		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)
1360		Ⅳ-3	○89	新	2期	A2期	A期	SH300	齋宮に美童が吸れ改元(781)・紀作良を造齋宮長官に(785)

第4表 齋宮跡出土土器編年と方格街区各区画築期の対応関係



ものとみられる遺構や、時期等が全く不明な遺構については、本報告では割愛した。

## 注

①大川勝宏「斎宮跡方格地割に関する二・三の試論」『斎宮歴史博物館研究紀要十七』2008

②「第3章 斎宮跡の土器編年の検討」『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ 柳原区画の調査 出土遺物編』斎宮歴史博物館 2019

## 第2節 西加座南A期の遺構

### (1) 区画南西部の遺構

西加座南区画内の第13・8・9次、25・13次、83次、84・1次・148次・162・3次調査区と、第21・4次、第84・2次調査区のS A 5840以南の遺構が該当する。

#### 1) 掘立柱建物

**S B 5780(83次)** 第83次調査区の北端中央で検出した4間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約1.0mの方形で、径30cm弱の柱痕跡と柱穴のうち3基には建物の外側に向けて柱を引き倒した抜き取り痕がある。柱間は桁行2.7m、梁行2.6mでほぼ等間である。建物の外周には、西南東側のそれぞれに幅約0.4m、遺構検出面からの深さが約0.2～0.4m、断面形が深いU字形になる溝であるS D 5792・5793・5794が建物の柱筋に沿って掘削されている。建物の柱筋からはそれぞれ約1.8mの間隔をあける。調査区外で確認できていないが北側にも溝が存在する可能性は高い。南東隅はⅡ-3期のS K 5790に壊されるが、南西隅にはS D 5792・5793の間に約1.2～1.5mの間隔がある。各溝とも出土遺物は僅少で、灰釉陶器なども含むが調査時の混入とみられ、暗褐色～黒色の埋土で、S B 5780等と同様Ⅱ-1期に相当し、これらは一体のものと考えられる。概報段階ではこれらの溝は雨落ち溝と推定しているが、その後これを目隠し堀の遺構とみる見解もある<sup>3)</sup>。

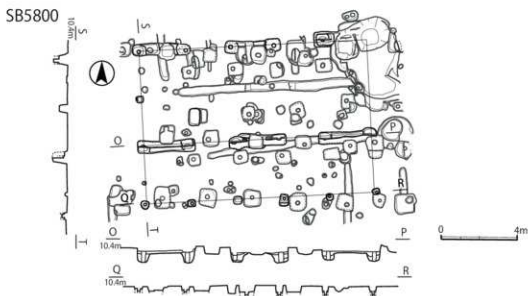
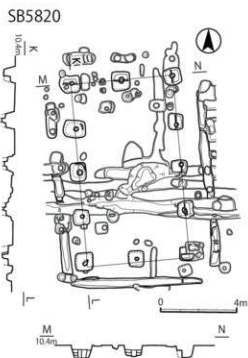
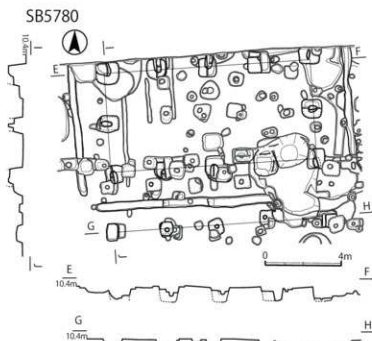
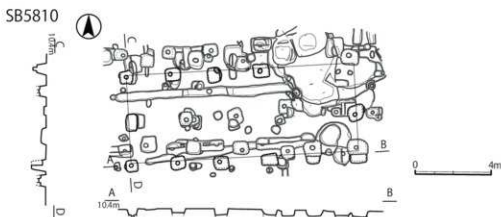
またS B 5780の南桁行柱列から約2.9mで並行して東西4間のS A 5806がある。柱間は約2.7mで、S B 5780の桁行と一致し、S B 5780に付随するものと考えられる。南辺の溝S D 5793と時期差があればS B 5780の南面廂となる可能性もある。

**S B 5800(83次)** 第83次調査区の中央北寄りで検出した東西棟で、5間×2間の身舎の桁行南側に1間分の廂を持つ。柱間は桁行2.4m、梁行2.5m、廂出3.0mで、柱穴は身舎の桁行は柱2本を1組にした溝持ちの構造である。斎宮跡では史跡西部で飛鳥～奈良時代の掘立柱建物にしばしばみられる構造だが、史跡東半の方格街区区内では、第130次調査のS B 8265がみられるのみである。桁行の柱掘形は長さ約1.5～1.7m、幅約0.6m、深さ約0.2mの略長方形で、その両端の約0.8m掘り込みに柱を据えている。東側棟持ち柱は不明だが、西側棟持ち柱および廂は一辺0.4～0.5mの略方形の柱掘形となる。柱痕跡は桁行で径約20cm、廂で径約15cmを測る。柱穴の出土遺物からⅡ-1期新からⅡ-2期にかけてのものと思われる。

**S B 5810(83次)** 第83次調査区の中央北寄りで検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.6m前後の方形で、直径約20cmの柱痕跡がある。柱間は桁行で2.4m、梁行が2.3mでほぼ等間である。柱穴からS B 5800出土のものと同一体の可能性のある土師器壺の破片が出土しており、遺構の重複関係からS B 5780に前後する時期のものと考えられ、Ⅱ-1期に属するとみられる。

**S B 5820(83次)** 第83次調査の西端中央で検出した4間×2間の南北棟である。柱掘形は一辺約1.0mで径約20cm強の柱痕跡がある。柱間は桁行2.4m、梁行2.7mでほぼ等間である。概報の段階ではS B 5780と同様に、東西南の三方に0.8～1.1mの間隔をあけて雨落ち溝S D 5822・5823等が掘削されるとしている。溝の幅は約0.4m、遺構検出面からの深さは約0.3mの浅いU字状の断面形を呈する。こうした溝の存在や、S B 5820の棟方向がS B 5780に対して直角方向となり、柱穴の規模も近似することから、両者は同時併存したものと考えられる。

**S A 5840とその外周溝(21-4-83-84-1-84-2-162-3次)** 第84・1次調査で東辺が、第83・162-3次で西辺が、第83次調査区で南辺が、第21・4・84・2次調査で北辺を検出した掘立柱による一本柱堀で、東西14間×南北12間分があり



第7図 西加座南A期の主要建物(SB5810・5780・5820・5800)(1:200)

東西約41.4m、南北約35.5mの方形の区画を形成する。柱間は東西・南北いずれも2.96m前後でおよそ10尺等間である。柱掘形は一辺約0.8mの方形ないしは隅丸方形で、径約20～30cmの柱痕跡がみられる。南辺を除き、すべての柱穴を検出できていないが、柱間が開く場所や控え柱などは認められず、門の存在は不明である。

堀の外側で柱列から約0.8～1.0mの距離を持って並行に走る溝があり、第83・84-1次調査区では幅約0.4m、深さは約0.3mで断面形は浅いU字状、第162-3次調査区では幅約0.7m、深さ約0.4mで断面形が逆台形となっている。柱列の外周のほぼ全体を巡る点ではS B 5780・S B 5820の外周の溝にも類似し、南辺では第83次調査でS D 5832、第84-1次調査ではS D 5896と命名されている。この南辺の溝は西端で溝の底部が標高9.4m、第84-1次調査区で南北溝S D 5874に接する地点でも9.4mで、ほとんど傾斜していない。S D 5832の東辺の南北溝は南端でS D 5896に接する直前で途切れ、また北端も第84-1次調査区の北部で途切れている。S D 5832の北辺は、他の遺構との重複が多く不明な点もあるが、溝の途中での断絶は無いと考えられる。

柱穴からの出土遺物は少量で、Ⅱ-3期の土器も混入するが、黒褐色系の埋土や、S B 5780・5820やS D 5810と柱筋が一致する点も多いことからⅡ-1期頃のものともみてよいだろう。

## 2) 竪穴建物

**S I 9501-9505 (148次)** 第148次調査区南北トレンチの中央北寄りで、重複して検出した竪穴建物と考えられる遺構である。S I 9501は南北約5.0m、東西2.4m以上、深さ約0.4mで、北辺に竈跡、南側床面には貼り床が確認されている。床面の四周には幅約0.4m、深さ約0.1mの壁周溝がある。S I 9505は他の遺構の重複により、全体形は窺えないが、北辺の竈跡が確認されている。いずれからも柱穴は見つかっていない。Ⅱ-1期古中頃の土器器皿、須恵器有台盤などが出土している。

## 3) 土坑・井戸・溝

**S D 535 (13-8-9次・162-3次)** 西加座南区画西辺道路の西側溝にあたる。第162-3次調査で東側を再掘削した溝(S D 535b)に壊されるが、幅約1.6m、深さ約0.5mの逆台形の溝とみられる。

**S D 1627 (13-8-9次・162-3次)** 西加座南区画西辺道路の東側溝にあたる。第13-8-9次と162-3次調査で良好に検出されている。幅1.6m、深さ約0.5mの逆台形で、ほぼ同じ場所で再掘削され、時期差でa・bに区分できる。第11-8-9次では土師器杯・皿・甕などⅠ-3～Ⅱ-1期の土器が出土している。

**S K 5834 (83次)** 第83次調査区の南中央部のS A 5840の内側で検出した、径約1.2m、深さ約0.2mの小規模土坑である。出土遺物は少ないながらも、土師器杯・椀・皿・高杯・鍋・甕・甕片、黒色土器A類杯、須恵器杯・椀・小型甕・甕などⅡ-1期中頃の土器類が出土している。

**S K 5782 (83次)** 第83次調査区のS A 5840の方形区画の北西隅部で検出した土坑である。径4.5m×3.5mで深さは約1.0mを測る。土師器杯・皿・蓋・高杯・甕・甕、黒色土器A類杯、須恵器杯・蓋・広口甕・甕、摩摩式製塩土器、炭化材が整理箱で1箱分出土している。出土遺物からⅡ-1期新～2期古のものともみられる。

**S E 5850 (83次)** 第83次調査区の南端中央で検出した円形の素掘りの井戸で、検出面では径約2.8m×3.0m、深さ約0.5mのところから径約1.7mにすばまり、さらに深さ約2.0mから壁面が崩落したのか内側が厚さ1.0mほどオーバーハングしている。井戸底は検出面から約4.5mの深さにあり、埋土は検出面から約1.0mまでの暗黒色土を上層、1.7mまでの暗黒褐色土を中層上部、2.9mまでの暗褐色土を中層下部、2.9mからの暗褐色砂質土を下層としている。

出土遺物は再整理の結果、現在は整理箱35箱分となっており、土師器では杯・椀・皿・甕・鍋・甕のほか平底鉢や高杯が目立つ。須恵器では杯・蓋・薬壺蓋・台付盤・高杯・甕が、灰釉陶器では椀・皿類など、このほか緑釉陶器の皿・高杯、黒色土器、小型模造品鉢、瓦片、土錘が出土している。「福」のような吉祥文字や「厨」「目代」「少允殿」といった斎宮家に関連する墨書土器が多数出土している。遺物の所属時期はⅡ-3期とみられるものが最も多いが、最上層からはⅡ-4期の、遺構深部にはⅡ-1期新の土器類がみられること、また、井戸の位置が方形区画を構成する堀S A 5840の東西中軸線に近い堀南側にあり、この方形区画との位置的な親和性を考えると、概報でもす

に可能性が指摘されている通り、Ⅱ-1期にさかのぼり得るものと考えられる。

**S D5851(83次)** 第83次調査区の南東隅で検出した検出長約7.4m、幅約0.8m、深さ約0.1mを測る。出土遺物は少なく、灰釉陶器も含むが混入とみられ、大多数はⅡ-1期中～2期のものとみられ、Ⅱ-1期としたSA 5840南辺やこれに沿うSD 5832と併行するため、この時期のものと考えた。

**S D5858(83次)** 第83次調査の南側に拡張したトレンチの中央部で検出した東西溝である。幅約1m、深さ約0.2mだが、調査区の土層断面図をみると深さ約0.4mの幅広い逆台形状を呈している。出土遺物は少なく、摩耗が進むもののⅡ-1期新頃の土師器杯・椀・皿・甕や須恵器蓋・甕などが出土し、後代の遺物を含まないため、Ⅱ-1期に廻り、比較的早期に埋没していったものとみられ、西加座南区画南辺区画道路の北側溝の一部と考えられる。南側溝に該当する位置には第83・25-13次調査区のSD 1609があるが、これは近世以降に再掘削された溝である。

**S D5870(84-1次)** 第84-1次調査区の東辺で検出した南北溝である。SA 5840の東辺から11.5m東の位置にあり、併行する。調査区北端の土層断面では検出上面で幅約1.1m、底部で幅約0.3m、深さ約1.2mで、断面形が薬研掘りに近い逆台形を呈するが、第84-1次調査区中央では深さが約0.4mまで浅くなり、南端では深さは約0.2mになる。第84-1次調査区の基礎地形は南南東に向けて傾斜していくが、それを勘案しても溝底は北に向かって傾斜していると考えざるを得ない。土師器杯・椀・皿・蓋・高杯・平底鉢・甕、須恵器杯・皿・蓋・短頸壺・甕等が整理箱2箱分出土しており、Ⅲ期の土器が混入するものの、Ⅱ-1期には掘削されたのみでいまいだろう。西加座南区画の東西中軸線を通るとみられる区画間道路の西側溝に該当する。

**S K5872(84-1次)** 第84-1次調査区北端で検出した長径約3.9m、深さ約0.4mの土坑で、調査区外に伸びるため全体形はわからない。遺物は極めて少ないがⅡ-1期に属するとみられる土師器甕片が出土している。

**S K5879(84-1次)** 第84-1次調査区の中央で検出した径3.5m×2.8m、深さ約0.1mの浅い土坑である。出土遺物には摩耗の進んだものもあるが、土師器杯・皿・高杯・甕・甎、須恵器杯・蓋があり、Ⅱ-1期古・中のものと考えられる。

**S K5881(84-1次)** SK 5879の南側で検出した径3.2m×2.5m、深さ約0.1mの浅い土坑である。土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕が出土しており、Ⅰ-3期新の土器を含む。

**S K5933a(84-2次)** 第84-2次調査区の南中央で検出した東西約4.0m、南北3.0m以上、深さ約0.6mの不整形の土坑である。出土遺物は少ないが、Ⅰ-3期新～Ⅱ-1期の土師器皿・高杯・甕の他、Ⅲ-1～2期の土師器杯・皿、灰釉陶器小椀が出土しており、土坑の形状からみて2期の遺構が重複するとみて、Ⅱ-1期頃のものをSK 5933 aとした。

**S D9491(148次)** 第148次調査区の南北トレンチの南端で検出した幅約1.0mの東西溝である。Ⅱ-1期の土師器皿・甕、須恵器片や炭化物が出土している。

**S K9498(148次)** 第148次調査区の南北トレンチのほぼ中央で検出した南北約1.5m、東西約0.7mの楕円形土坑である。Ⅱ-1期の頃とみられる土師器甕や炭化物が少量出土している。

**S K11647(13-8-9次)** 第13-8・9次調査区の南西隅で検出した東西2.2m以上、南北2.8m以上、深さ約0.45mの土坑である。出土遺物は整理箱にして4箱と多く。土師器杯・椀・皿・蓋・高杯・小型高杯・把手付精製鉢・甕・小型甕・鍋・甎や、須恵器杯・皿・高杯・蓋・薬密蓋・短頸壺など儀札などに伴うとみられる土器類が多量に含まれており、儀器的な小型高杯や小型甕が多量に含まれている点は注目できる。土師器類は赤く良好に発色し、胎土も精良なものが多いが、摩耗が進んだものも多い。SK 11650と同じく、西加座南西辺区画道路の西側溝の位置にかかるが、これも前後関係はわからない。

**S K11648(13-8-9次)** SK 11647の東で検出した東西約1.8m、南北1.0m以上、深さ約0.3～0.5mの土坑である。出土遺物は少量ながらⅠ-3期新～Ⅱ-1期中頃とみられる土師器杯・皿・甕、須恵器杯・椀・甕片がある。

**S K11649(13-8-9次)** 第13-8・9時調査区の南東隅で検出した東西約2.5m、南北2.0m以上、深さ約0.5mの土坑

である。Ⅰ-3期新～Ⅱ-1期の土師器杯・碗・皿・高杯・甕、須恵器杯・碗・蓋・高杯・有台盤・壺・甕片の他、上層からの混入とみられる灰釉陶器碗がある。「井」状の線刻がある土師器片も出土している。

**SK11650(13-8-9次)** 第13-8-9次調査区の北端で検出した土坑で、東西4.8m以上、南北3.1m以上、深さ約0.6mの略円形を呈する。Ⅱ-1期中頃のものともみられる土師器杯・碗・甕・高杯と須恵器小片が出土する。西加座南区画西辺の区画道路西側溝の位置に重複するが、前後関係はわからない。

**SD11654(13-8-9次)** 第13-8-9次調査区南北トレンチの南部で検出した東西溝で、幅約1.2m、深さ約0.2mの緩い逆台形状になる。Ⅰ-3期新～Ⅱ-1期の土師器杯、須恵器蓋などが少量出土している。

**SK11656(13-8-9次)** 第13-8-9次調査区の北西部で検出した東西約1.2m、南北1.0m以上、深さ約0.1mの小規模な土坑である。Ⅰ-3期新～Ⅱ-1期中とみられる土師器杯・皿・蓋・甕、須恵器杯・皿・蓋・台付鉢が出土している。上面にⅢ-3期のSK11652が重複する。

## 註

・川部浩司「第5章 考察」『齋宮跡発掘調査報告Ⅴ』齋宮歴史博物館 2023

## (2) 区画北西部の遺構

西加座南区画のうち、第11-1次、11-2次、37-12次、58-2次、第86次調査区と、第21-4次、84-2次調査区のSA5840以北の遺構が該当する。

### 1) 掘立柱建物

**SB6000(86次)** 第86次調査区の中央南寄りで見出された4間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.8m前後の方形で、一部の柱穴に径約25cmの柱痕跡がある。柱間は桁行2.4m、梁行2.6mではほぼ等間である。この北側と南側に桁行柱筋と方向を揃えた溝が掘削されている。南側の溝はSD6035で、長さ約11.5m、幅約0.5m、深さ約0.2～0.3mで、箱掘り状の断面形となる。北側のSD6034は調査区内の南北土層ベルトを挟んで東西に二分される。西側は長さ8.3m以上、東側は約3.0mで、いずれも幅は約0.5m前後、深さは約0.3mである。これらの溝は壁がほぼ垂直に立ち上がり、底部には所々くぼみがあって溝本体と同じ埋土を持つことから、壁あるいは垣のようなものと推定されている。これらの溝からは出土遺物が無いが、SB6000の柱穴からは土師器杯・碗・高杯・甕や須恵器の小片が出土しており、これらはⅡ-1期以降のものともみられる。

**SB6016(86次)** 第86次調査区の北部で見出された3間×2間の東西棟で、柱掘形は径0.3～0.5mの略方形である。柱間は桁行1.9m、梁行1.85mである。柱穴は重複する土坑群の検出中に確認されており前後関係は明確ではないが、出土した土師器杯・碗・高杯・甕、須恵器小片からⅡ-1期新～2期に収まるものとみられる。

**SB6028(86次)** 第86次調査区の中央部北寄りで見出された3間×2間とみられる南北棟である。柱掘形は一辺約0.5mの略方形で、柱間は桁行2.0m、梁行1.9mである。柱穴からⅡ-3期の土師器片も混入しているが、摩耗はしているもののⅡ-1期新以降の土師器杯・碗・皿・甕や大型の黒色土器A類杯、須恵器杯・台付盤、志摩式製塩土器が出土している。

**SB6040(86次)** SB6000と重なるように検出された4間×2間の東西棟でSB6000と棟方向も合わせている。柱掘形は一辺約1.0mの隅丸方形ないしは略方形で、柱穴の一部に径20cm前後の柱痕跡がある。柱間は桁行で2.4m、梁行で2.7mを測る。SB6000との前後関係を示す明確な根拠に欠けるが、土師器杯・皿・甕などの少量の出土遺物からはⅡ-1期頃のものとも推定でき、また柱掘形の形状がやや崩れたものとなっていることから、暫定的にSB6000に後出し、建て替えの関係にあるものと考えたい。

**SB6055(86次)** 第86次調査区の南端近くで見出された(3)間×2間の東西棟の南側に1間分の廂出を持つものである。建物の西側は調査区外にのびるため、全体の規模は不明である。身舎の柱掘形は一辺約1.0mの方形、廂の柱掘形は径約0.5～0.7mの略方形である。身舎の柱穴の一部で確認された柱痕跡は径約25cmである。柱間は桁行2.2m、

梁行 2.4 m、幅出 2.4 m である。柱穴から土器器杯・皿・甕、須恵器蓋・釜・壺など、Ⅱ-1～2 期にかけての土器類が出土している。

**S B 6063 (86次)** 第 86 次調査区の北西で検出した 3 間×2 期の東西棟で、柱掘形は径 0.5～0.7 m の略方形で、一部の柱穴に径約 25cm の柱痕跡がある。柱間は桁行 2.2m、梁行 1.9m である。柱穴からⅡ-2 期の土器片が出土している。

## 2) 土坑・溝

**S K 1122b (21-4次)** 第 21-4 次調査区の北端で検出した土坑で、大部分は調査区外へ伸びている。東西 3.7 m 以上、南北 0.8 m 以上、深さ約 0.5 m で、土坑底部の形状から複数回の掘削が窺われ、取り上げ日時の差で取られる出土遺物の上下でも上層出土とみられるものはⅢ-1～2 期、下層にはⅡ-1～2 期の土器器杯・碗・皿・壺 E・甕、志摩式製塩土器と須恵器甕片が出土しており、下部を S K 1122 b として峻別した。

**S K 5921 (84-2・86次)** 第 84-2 次調査区の北西隅で検出した土坑で、西半は調査区外に続く。南北約 4.3 m、東西 1.2 m 以上、深さ約 0.3 m で、現代遺物の混入もみられるが、土器器杯・皿・甕、須恵器甕片が出土しており、Ⅱ-1 期新～2 期にかけてのものともみられる。

**S K 5922 (84-2次)** 第 84-2 次調査区の北西で検出した小規模土坑で、西加座南 B 期に区分した S B 5920 の柱穴に大部分が壊されている。土器器片、須恵器甕片が少量出土したのみだが、Ⅱ-1 期新～2 期にかけての遺物とみられる。

**S K 5923 (84-2・86次)** 第 84-2 次・86 次調査区にまたがって検出した土坑で、東西約 2.6 m、南北約 2.0 m、深さ約 0.6 m を測る。土器器蓋、須恵器蓋・甕片が少量出土している。

**S D 6002 (11-1・86・120次)・6050 (86・136・120次)** S D 6002 は第 11-1・86 次調査区北端で検出した東西溝で、区画東半の第 120 次調査区まで続くともみられている。西加座南区北辺道路の北側溝にあたる。第 86 次調査区では幅約 1.8 m、深さ約 0.4～0.5 m で断面形は逆台形になる。第 120 次調査区では幅約 1.4 m、深さ約 0.4 m で、断面形は浅い U 字形を呈する。Ⅲ-3 期～Ⅳ期の遺物を含む S D 6001 が重複する。S D 6001 にはⅡ期からⅢ期にかけての幅広い時期の土器類が出土しており、再掘削を伴うものの初源はⅡ-1 期まで遡り得るものと考えられる。最終的にはロクロ土器や無軸陶器碗（山茶碗）を含むため、Ⅲ-2～3 期頃と考えられる。S D 6050 は第 86 次～136 次から 120 次調査区にまたがって検出した溝で、北辺区画道路の南側溝にあたる。幅約 2.0～1.6 m、深さ約 0.4 m 前後で断面形は逆台形、第 120 次調査区では幅約 1.8 m、深さ約 0.4～0.5 m で、これも断面が浅い U 字形を呈する。S D 6050 からは第 86・136・120 次調査区いずれからもⅡ-1～2 期を中心とした土器類が出土しており、Ⅱ-3 期頃までには埋没したと考えられる。出土遺物の中には「府」の墨書土器や水鳥の絵画土器がある。

**S K 6011～6015 (86次)** 第 86 次調査区の北部で検出した土坑で、個別に遺構番号は付与されているが、調査時の遺構略図との照合が困難であり、いずれからもⅡ-1 期中新頃を中心とした土器類が出土しているため、複数の土坑が重複していることは明らかだが、ここでは一括の土坑群として扱う。土坑群は東西約 8.2 m、南北約 5.0 m の範囲にあり、最も深いところで深さ約 0.5 m ある。整理箱で 7.5 箱の土器類が出土しており、土器類や黒色土器、須恵器、志摩式製塩土器、土鏃、炭化材の他、混入とみられる灰軸陶器・緑軸陶器がある。S K 6012 から緑軸単彩陶器の風炉が、S K 6013 の「大炊」墨書土器や多数の土器器高杯が、S K 6015 には輪郭口が含まれる点が注目される。

**S K 6017 (86次)** S B 6013 等の土坑群の南側で検出した南北 3.0 m、東西 1.1 m、深さ約 0.1 m の浅い長楕円形の土坑で、Ⅱ-1 期中新頃とみられる土器器杯・平底鉢・甕や須恵器杯・蓋・甕片・甕片が少量出土している。

**S K 6018 (86次)** S K 6017 の東側で検出した径約 1.4 m×1.2 m、深さ約 0.1 m の不整形の土坑で、Ⅱ-1 期新～2 期の土器器杯・碗・甕・瓶・鍋、志摩式製塩土器、須恵器片が出土している。

**S K 6030 (86次)** 第 86 次調査区の東端中央で検出した南北約 3.2 m、東西約 2.5 m、深さ約 0.4 m の楕円形の土坑である。整理箱 7 箱分の土器器杯・碗・皿・蓋・高杯・甕・鍋・瓶・甕片、志摩式製塩土器、須恵器杯・蓋・壺・甕、「豊兆」墨書土器が出土している。斎宮跡Ⅱ-1 期古～中の基準資料である。

**S D 6033 (86次)** 第 86 次調査区の中央部で検出した長さ約 4.6 m、幅 0.4 m 以上、深さ約 0.2 m で、出土遺物は無いが、

S B 6000 に伴う S D 6034・6035 と同様の箱掘りの形状とされ、同時期のものと考えた。

**S K 6046(86次)** 第86次調査区南東部で検出した土坑で、大部分は調査区の東側に伸びている。南北約5.2m、東西2.2m以上、深さ約0.7mの土坑で、Ⅱ-1期の土器類が整理箱2箱分出土している。土師器杯・椀・皿・蓋・高杯・平底鉢・壺E・甕・鍋などの他、志摩式製塩土器がある。また、「米」状の線刻土器や、土馬の一部とみられるもの含まれる。

**S K 6053(86次)** 第86次調査区の南西隅近くで検出した土坑で、大部分が調査区の西側に伸びるとみられる。南北2.4m以上、東西0.5m以上、深さ約0.3mを測る。土師器杯・皿・甕、須恵器杯などⅡ-1期古中の土器類が少量出土している。

**S K 6054(86次)** S K 6053の南側で重複して検出した南北約1.2m、東西1.3m以上、深さ約0.2mである。土師器の小片が出土したのみだが、埋土の重複関係からS K 6054の方が古い。

**S K 6060(86次)** 第86次調査区の中央部南寄りで検出した土坑で、南北約4.8m、東西5.0m以上、最も深いところで遺構面から約0.3mある。一部Ⅱ-3～4期の土器類の混入はあるものの、整理箱で2箱分の土師器杯・椀・皿・蓋・高杯・甕・鍋・甌、志摩式製塩土器、須恵器蓋・台付盤・壺・円面甕、瓦・土厚、炭化材が出土しており、おおむねⅡ-1期新～2期のものとみられる。

**S K 6070(86次)** 第86次調査区西調査区の南部で検出した南北約3.4m、東西約2.9m、深さ0.2～0.3mの略方形の土坑である。Ⅱ-1期中～2期にかけての土師器杯・皿・蓋・甕・甌、須恵器杯・甕が出土している。

### (3) 区画東部の遺構

西加座南区画のうち、中央の区画内南北道路の東側で、第17-3次、21-2次、29次(6AFI-A)、29次(6AFK-L)、34次、53-15次、58-1次、120次、133次、136次、140次の遺構が該当する。

#### 1) 掘立柱建物

**S B 1436(17-2・34次)** 第34次から第17-2次調査区にかけて検出した桁行3間以上、梁行2間の東西棟である。北側の第140次調査区で、約28mの間隔を開けて建つS B 8859があり、これも5間×2間となる可能性がある。柱掘形は一辺約1.0mの方形で、柱間は桁行2.4m、梁行2.5mを測る。Ⅱ-1期中新頃の土師器杯・皿・高杯・甌、須恵器蓋などが出土している。

**S B 1437(17-2・34次)** 第34次から第17-2次調査区にかかる3間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約1.1mの方形で、柱間は桁行2.0m、梁行2.4mを測る。Ⅱ-1期古中頃の土師器杯・蓋・甕が出土している。

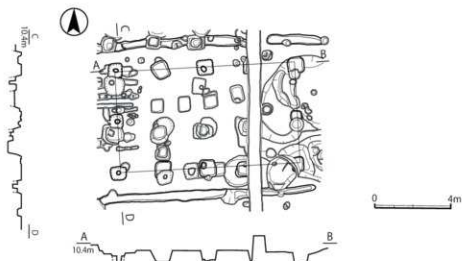
**S B 1853(34・133次)** 第34・133次調査区の北部で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.5～0.8mの略方形で、一部の柱穴に径約20cmの柱痕跡が残る。柱間は桁行・梁行とも2.4mである。Ⅱ-1期古中頃の土師器杯・高杯・甕などが出土している。

**S B 1860(34・133次)** 第34・133次調査区の中央北寄りで検出した5間×2間の身舎に南に1間分の廂を持つ建物である。柱掘形は身舎が一辺約0.7～1.0mの方形、廂が径0.5m前後の略方形で、身舎の柱穴の一部に径25cmの柱痕跡がある。柱間は桁行2.4m、梁行2.4m、廂出2.5mを測る。区画南西部の方形区画を構成する塼S A 5840の南辺に沿って併行に掘削されたS D 5832に対して、区画南東部で対照的な位置にあるS D 1857溝心から約6.8m、その北側に並走するS D 1856の溝心から約3.1mの距離に、同方向で建つ南面庇付建物である。柱穴からⅡ-1期古中の土師器杯・椀・皿・甕・甌・甌、志摩式製塩土器、須恵器杯・蓋・壺・甕が出土した。

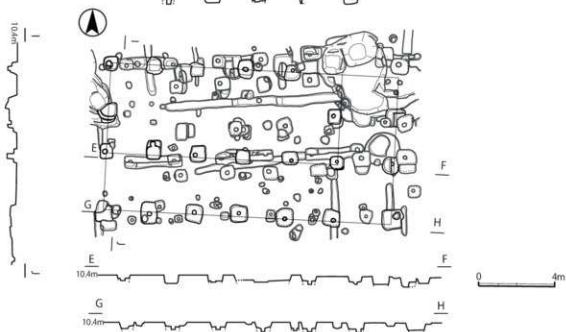
**S B 1870(34・47・133次)** 第34・133次調査区の南端近くで検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.5m前後の隅丸方形あるいは略方形で、一部の柱穴に径約20cmの柱痕跡が残る。柱間は桁行・梁行とも約2.45mである。この北側約20mのところ同一規模・同一方向のS B 1858が梁間柱筋を揃えて並立する。

**S B 3874(34・53-15次)** 第34次調査区南西隅から第53-15次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.4mの隅丸方形から径0.3m前後の略方形で、柱間は桁行約2.4m、梁行約2.5mで一部の柱穴に徑

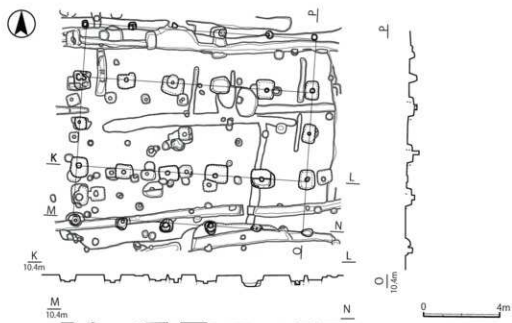
SB6000



SB5815



SB5830



第8図 西加座南A・C期の主要建物(SB6000・6015・6030)(1:200)



約 20cm の柱痕跡が残る。S B 3874 は柱穴の規模や形状は異なり、Ⅲ期の土器類が混入しているものの、東の S B 1870 とは約 15.5 m の間隔をあけて、棟方向と柱筋をおおむね合わせており、同時期のものと考えられている。

**S B 8000(120次)** 第 120 次調査区の南東部で検出した 5 間×2 間の東西棟で、柱掘形は一辺約 0.8～1.1 m の方形で、一部の柱穴に径約 30cm の柱痕跡が残る。柱間は桁行・梁行とも約 2.4 m である。柱穴から混入とみられる灰陶器片もあるが、土師器杯・皿・平底鉢・甕・甕、須恵器杯・甕や炭化材などⅡ-1 期新～2 期の遺物が大量を占めている。

**S B 8461・8462(133次)** 第 133 次調査区の南東部で検出した東西棟で、いずれも柱筋が平行四辺形状に大きく歪むものである。S B 8461 は、3 間×2 間の東西棟で、柱掘形は一辺約 0.5 m の隅丸方形を呈し、径約 15～20cm の柱痕跡が残る。柱間は桁行約 1.7 m、梁行約 1.8 m である。土師器杯・椀・皿・薬壺・甕、須恵器杯・盤・甕等が出土し、Ⅱ-1 期新～2 期にかけてのものである。S B 8462 は S B 8461 と同位置で検出した 3 間×2 間の東西棟で、柱掘形は 0.9～0.6 m の方形で、径約 20cm の柱痕跡が残る。柱間は桁行約 2.2 m、梁間 2.3 m と S B 8461 より大型である。柱穴の重複関係から S B 8462 の方が古い。

**S B 8539(136次)** 第 136 次調査区の南部で検出した桁行 6 間以上、梁行 2 間の東西棟である。東接する第 120 次調査区まで延長するならば桁行は 8 間となる可能性がある。柱間は桁行約 2.0 m、梁行約 1.9 m、柱掘形は一辺約 0.6～0.8 m の略方形ないしは円形のやや不整形のもので、径約 20cm の柱痕跡が残る。重複関係から S B 8543 より古い可能性があり、出土遺物は微細で、灰陶器を含まず、Ⅱ-1～2 期にかけてのものともみられ、棟方向が E 8°N と、他の建物と大きな差異があることから、区画北東部で他の建物に先行するものとみられ、より後出のものである可能性も否めない。また、第 136 次調査で検出した建物の柱穴からはⅡ-3 期の土器類が混入することが多いが、遺構の位置関係等を重視して時期決定をしている。

**S B 8543(136次)** 第 136 次調査区の南部で検出した 5 間×2 間の東西棟で、柱掘形は一辺 0.4～0.6 m の隅丸方形で、径約 15cm の柱痕跡が残る。柱間は桁行・梁行とも 2.4 m で、出土遺物は少量だが、重複関係から S B 8542 より古く、また、第 140 次調査の S B 8860 などとともに区画内で計画的に配置された可能性があることから、消極的ながら A 期のものと考えられる。

**S B 8544(120次)** 第 120 次調査区の南東部で検出した 5 間×2 間の東西棟で、第 120 次調査段階では未確認だったが、第 136 次調査区の S B 8543 の東に約 14.5 m の位置に、棟方向と柱筋をおおむね合わせているため、同時期の建物と考えられた。柱掘形は径 0.5 m 前後の不整形形で、柱痕跡は認められない。柱間は桁行約 2.45 m、梁行が約 2.5 m と柱穴の規模が小さいことを除けば S B 8543 と近似し、先にみた区画東南端の S B 1870・3824 とほぼ同様の位置関係となる。

**S B 8853(140次)** 第 140 次調査区の西北部で検出した桁行 5 間の南北棟である。東側の桁行柱筋のみ確認している。柱掘形は一辺約 0.8～1.0 m の方形で、径約 20cm の柱痕跡が残る。桁行の柱間は約 2.2 m 前後である。少量の土師器杯・皿・甕が出土しており、おおむねⅡ-1 期頃のものと考えられる。第 140 次調査で検出した建物の柱穴にはしばしばⅡ-4～Ⅲ期の遺物が混入するが、遺構の位置関係等を重視して時期決定している。

**S B 8854(140次)** 第 140 次調査区の北東部で検出した 4 間×2 間の南北棟である。柱掘形は一辺約 0.8 m の略方形で、径約 20cm の柱痕跡が残る。柱間は桁行 2.6 m、梁行 2.9 m を測る。土師器杯・椀・高杯・甕、須恵器杯など、Ⅱ-2 期とみられる土器類が出土している。

**S B 8859(140次)** 第 140 次調査区の南部で検出した 5 間×2 間の東西棟である。柱掘形は一辺約 0.7～0.9 m の略方形で、径約 25cm 前後の柱痕跡が残る。柱間は桁行約 2.15 m、梁行約 2.5 m である。重複関係から S B 8860 より新しいとみられる。

**S B 8860(140次)** 第 140 次調査区の南部で検出した 5 間×2 間の東西棟である。柱掘形は一辺約 0.7～0.9 m の方形で、径約 25cm の柱痕跡が残る。柱間は桁行 2.25 m、梁行 2.0 m ほどである。重複関係から S B 8859 より新しい。

## ②竪穴建物

**S 18845(140次)** 第140次調査区の北端で検出した竪穴状遺構である。東西約6.1m、南北約2.6m、残存する深さ約0.2mの隅丸長方形で、重複関係からⅡ-1期古中の土器類を包含するSK 8846より新しい。内部に柱穴は確認していない。Ⅱ-1期古中の土師器杯・椀・皿・甕・鍋・甌、異形筒形土器、須恵器台付盤・壺Eや土鍾が出土している。

### 3)井戸・土坑・溝

**SK1404(29次)** 第29次調査6AFI-Aトレンチのほぼ中央で検出した、南北約2.5m、東西1.3m以上、深さ約0.4mの略方形の土坑である。土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器杯・甕などⅡ-1期古中の土器類が少量出土している。

**SK1443(29-34次)** 第34次調査区の北西部で検出した、南北約4.1m、東西約2.5m、深さ約0.2mの大型土坑である。土師器杯・椀・皿・高杯・平底鉢・小型広口壺・甕・甌・小型甌、黒色土器A類杯、須恵器蓋・壺E・甕、志摩式製塩土器などⅡ-1期古中の土器類が整理箱で1箱分出土している。

**SK1445(29-34次)** 第34次調査区の中央西寄り検出した南北約4.1m、東西3.4m、最大深約0.6mの大型土坑である。土坑の南半が段を持って約0.2m下がり、あるいは複数の土坑が重複している可能性がある。

出土した土器群は、現在斎宮跡Ⅱ-1期新の基準資料となっており、土師器杯・椀・皿・蓋・高杯・平底鉢・甕・鍋・甌、須恵器杯・皿・有台盤・蓋・葉蓋、小型円面視などが整理箱で39箱分出土している。「年平」「萬」「大」などの吉祥文字を墨書した土器が多数出土している点も注目できる。

**SK1450-1451(29次)** 第29次調査6AFK-Lトレンチの中央部で検出した土坑である。SK 1450は東西約4.5m、南北約2.4m、深さ約0.7mの楕円形土坑で、底部が一段下がる。SK 1451はSK 1450の南に接して検出した土坑で、東西約2.6m。南北0.5m以上の方形の土坑となるだろうか。SK 1450からは土師器杯・椀・皿・蓋・壺E・甕・甌、須恵器杯・蓋・葉蓋・無台盤・直口鉢・把手付盤・甕、土鍾・鉄製品などⅡ-1期の遺物が整理箱で3箱分、SK 1451からは土師器杯・椀・皿・蓋・高杯・甕・鍋・甌、須恵器杯・蓋・有台盤・甕などⅡ-1～2期の遺物が整理箱で3箱分出土している。

**SD1856(34-47-133次)** 第34次調査区から第133次調査区にかけて検出した東西方向の溝で、幅約0.4～0.6mある。Ⅱ-1期中～2期の土師器椀・皿・甕、須恵器蓋・平甌、灰釉陶器椀が少量出土している。

**SD1857(34-47-53-15-133次)** 西は第53-15次調査区の北部から始まり、第34次調査区の中央やや南寄りを経て第133次調査区に至り、西加座南区画の区画内道路の西側溝であるSD 2836に接続する東西方向の溝である。幅約0.7～1.0mあり、溝底高から、西から東へ流下する溝である。北側に約3.0mの間隔をあけて並走するSD 1856は同時期のもので、東西方向の通路状をなす。また、SD 1857は区画西半の第83・84-1次調査区のSD 5832と対称的な位置関係にあることが知られている。遺構からはⅡ-1期中以降の土師器杯・皿・甕、須恵器高杯などが少量出土している。

**SK1863(34-133次)** 第34・133次調査区間の中央で検出した長径約3.5m、短径約3.0m、深さ約0.3mの不整形の土坑である。Ⅱ-1期古中頃の土師器杯・椀・皿・高杯・壺・鉢・甕・鍋、須恵器杯・蓋・葉蓋・有台盤・甕、土鍾の他、炭化材が整理箱で3箱ほど出土している。土師器高杯が多数含まれる点が特筆できる。

**SK2823～2825-2827～2831(47-133次)** 第133次調査区の中央部で、SD 1857に重なるようにして掘削された長径約1.0～2.6mの楕円形～略方形の土坑群である。いずれからもⅡ-1期古中を中心に土師器杯・椀・皿・蓋・平底鉢・壺・甕・甌、須恵器杯・椀・有台盤・広口壺・甕、土鍾が整理箱で2箱弱ほど出土している。

**SK2835(47-133次)** 第133次調査区の中央東端で検出した径1.0m以上の土坑である。西加座南区画の区画内道路の路面内に位置する。Ⅱ-1～2期の土師器杯・椀・皿・甕、黒色土器A類片、須恵器杯・蓋・無台盤が少量出土している。

**SK7980(120次)** 第120次調査区の中央やや北寄りで検出した、東西約2.1m、南北約1.9m、深さ約0.2mの不整形の土坑である。Ⅱ-1～2期頃とみられる土師器杯・椀・甕、須恵器片が少量出土している。椀には外面C手法を用いるものも含まれる。

- SK7990(120次)** 第120次調査区の南東隅で検出した東西約2.9m、南北0.9m以上、深さ約0.2mの円形の土坑である。Ⅱ-1期新〜2期とみられる土師器杯・皿・甕、須恵器甕などと甕の小型模造品が出土している。
- SK8392(133次)** 第133次調査区の東端で検出した南北約4.0m、東西1.4m以上の楕円形土坑である。第47次調査のSK2834と同一のものである。Ⅱ-1期の土師器皿・高杯・甕、や須恵器蓋と炭化材が少量出土している。
- SK8393(133次)** 第133次調査区の中央やや北寄りで検出した、東西約1.7m、南北1.2m以上、深さ約0.2mの方形土坑である。Ⅱ-1期以降の土師器杯・皿・甕、須恵器台付鉢が少量出土している。
- SK8399-8400(133次)** 第133次調査区の南東部で重複して検出した土坑で、SK8400は長径約1.6mの略楕円形を呈する。Ⅱ-1〜2期頃の土師器杯・碗・甕が少量出土している。
- SK8413(133次)** 第133次調査区の南部中央で検出した、長径約4.2m、短径約1.6m、深さ約0.1mの長楕円形の土坑である。Ⅱ-2期の土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・短頸壺・甕、灰軸陶器小片が少量出土している。
- SK8416(133次)** 第133次調査区の南端部で、SK8395と重複して検出した南北約3.0m、深さ約0.7mの不整形の土坑である。Ⅱ-1〜2期の土師器杯・碗・甕・鍋、須恵器蓋、志摩式製塩土器が少量出土している。
- SK8422(133次)** 第133次調査区の北部で検出した南北約3.5m、東西約3.1m、深さ約0.4mの不整形の土坑である。Ⅱ-1期中新以降のものともみられる土師器杯・碗・高杯・甕・鍋・竈、須恵器杯・蓋・高杯・台付盤・壺、緑軸陶器片が出土している。
- SK8425(133次)** 第133次調査区の北東部東端で検出した南北3.2m以上、東西1.8m以上の略方形土坑である。位置や形状からみて南側のSK8390と一体のものである可能性が高い。Ⅰ-3期新〜Ⅱ-1期の土師器杯・碗・皿・蓋・甕・甕、須恵器杯・台付盤・蓋の他、焼土・炭化材が出土している。
- SK8428(133次)** 第133次調査区の北部で検出した長径5.1m以上、短径約1.4m、深さ約0.1mの長楕円形土坑である。規模と土坑の軸線で約25m南のSK8413と似ている。Ⅱ-1〜2期の土師器杯・碗・皿・蓋・甕、須恵器蓋、灰軸陶器碗などが少量出土している。
- SK8433(133次)** 第133次調査区の北部でSK8422の東に接して検出した、長径約2.3m、短径約1.9m、深さ約0.2mの楕円形土坑である。Ⅱ-2期頃の土師器杯・皿・甕、須恵器小片が少量出土している。
- SK8520〜8523(136次)** 第136次調査区北部に想定される西加座南区画期の北辺道路の南側側溝に沿って区画内側で掘削された土坑群である。長径約2.4m〜3.5m、深さ約0.2〜0.3mの土坑が東西に連続しており、Ⅱ-1期中頃の土師器杯・碗・皿・平底鉢・短頸壺・甕・鍋、須恵器杯・蓋・壺等が出土している。
- SK8524(136次)** 第136次調査区の北部で、SK8523の東側で検出した長径約3.8m、短径2.8m、深さ約0.4mの楕円形土坑である。Ⅱ-1〜2期頃の土師器杯・碗・皿・平底鉢・小型甕・甕・鍋、須恵器杯・蓋・甕、灰軸陶器碗・段皿が出土している。
- SK8843(140次)** 第140次調査区の中央やや西寄りで検出した、長辺2.8m、短辺2.3m、深さ0.3mの長方形の土坑で、底部はほぼ平坦になっている。Ⅰ-3期新〜Ⅱ-1期の土師器杯・碗・高杯・甕、須恵器蓋・甕が少量出土している。
- SK8844(140次)** 第140次調査区のほぼ中央で検出した、長辺3.3m、短辺1.4m、深さ0.3mの細長い長方形の土坑で、中央部でさらに0.1mほど掘り下げられている。Ⅱ-1期以降の土師器碗・甕が少量出土している。
- SK8846(140次)** 第140次調査区の北東隅で検出した、長径7m以上、短径4.2m、深さ約0.3m以上の楕円形土坑である。他の遺構保護のため完掘していない。Ⅱ-1〜2期の土師器杯・碗・皿・甕・鍋、須恵器杯・碗・蓋・壺・甕と土錘などが出土している。
- SE8850(140次)** 第140次調査区の北東隅部で検出した井戸とみられる遺構で、周辺の遺構の保護のため全体的に掘削調査を行わず、部分的に小トレンチを設けて井戸であることを確認している。井戸掘形は不整形で、長径約4.0m、短径約3.0mとみられ、遺構検出面から約1.0m掘り下げたところで、一辺約1.7mの方形の井戸枠痕跡を確認している。安全と遺構保護のため深さ約1.0mまでで掘削をとどめている。土師器杯・碗・皿・平底鉢・壺E、小型

模造品の甕、志摩式製塩土器、須恵器杯・蓋・皿、高杯・広口壺・短頸壺などが出土し、Ⅰ-3期新～Ⅱ-1期のものである。

**SK11666(34次)** 第34次調査区の南東隅で検出した東西約32m、南北約2.5m、深さ約0.35mの略三角形の土坑である。Ⅰ-3期～Ⅱ-1期の土師器杯・甕・鍋・甌、須恵器蓋・甕が少量出土している。

**SK11669(53-15次)** 第53-15次調査区の北半で検出した、径約1.5mの不整形の土坑で、深さ約0.3mである。Ⅱ-1～2期の土師器杯・甕・鍋の破片が少量出土している。

### 第3節 斎宮の度会郡移転期の遺構

**SK6005(86次)** 第86次調査区の北部の西加座南区画北辺道路上に掘削された、東西約10.7m、南北約3.2mの大規模な土坑で、深さは西側で0.5m、東側で約1.0mある。土師器杯・椀・皿・高杯・平底鉢・甕・鍋・甌、志摩式製塩土器、須恵器杯・椀・蓋・壺・甕、土錘、瓦、「継」墨書土器など、Ⅱ-1期新～Ⅱ-2期の土器類が整理箱で2.5箱分出土している。出土遺物の時期と区画道路上に掘削された土坑の位置から、斎宮の度会郡移転に伴う遺構とみられる。

**SK6061(86次)** 第86次調査区の北西部の、西加座南区画北辺道路上で検出した、東西5.7m、南北1.8m、深さ約0.2mという、規模の割には浅い土坑である。土師器杯・甕、須恵器杯・壺・甕が少量出土しており、Ⅱ-2期以降のものとみられる。度会郡移転期から西加座南B期にまで及ぶかもしれない。

**SK8510～8517(136次)** 第136次調査区の北部で検出した土坑群である。西加座南区画北辺道路の路面上に長径約1.5～7.0mまで、大小の楕円形ないしは不整形の土坑が掘削されている。遺構検出面から深さ約0.4mの平坦な底部のものや約1.1mの深さのすり鉢状になるものまであり、いずれもⅡ-2期を中心とした時期の土師器杯・椀・皿・甕・鍋・甌、須恵器杯・蓋・高杯・台付盤・甕、土錘、志摩式製塩土器などが出土している。斎宮が度会郡に移転する際の塵埃や器物を処分するために掘削された土坑群ではないかと考えられる。

この他、柱穴に含まれる土器から、第86次調査区のS B 6016・6028・6063や第133次調査区のS B 8461は、この段階にも存続していた可能性がある他、第136次調査区のS K 8520・8521・8522・8523・8524も一部この時期にまで掘削が続いた可能性がある。

### 第4節 西加座南B期の遺構

#### (1) 区画西部の遺構

この段階では、A期に顕著にみられた区画西南隅の掘立柱塼で囲まれる卓越した施設が消失し、南西部と北西部の一体感が強まる段階である。

#### 1) 掘立柱建物

**S B5787(83次)** 第83次調査区の北端で検出した4間×2間とみられる南北棟である。柱掘形は一辺0.5～0.8mの隅丸方形で、径約20cmの柱痕跡が残る。柱間は桁行1.7m、梁行1.9mを測る。柱穴からⅡ-3期の土師器杯・皿・高杯・甕、黒色土器A類杯、須恵器杯・壺、灰釉陶器椀などが出土している。

**S B5807(83次)** 第83次調査区の北東部で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.4～0.6mの隅丸方形ないしは略方形で、一部の柱穴に径20cm強の柱痕跡が残る。柱間は桁行・梁行とも2.4mである。Ⅲ期遺物の混入もみられるが、Ⅱ期前半とみられる土師器杯などが出土しており、ほぼ同規模・同方位のS B 5812が近接することから、これとほぼ同時期と考えた。

**S B5808(83次)** 第83・84-1次調査区の北東部で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺0.6～0.9mの隅丸方形で、径20cm強の柱痕跡が残る。柱間は桁行1.8m、梁行2.0mである。柱穴から土師器杯・椀・甕、黒色土器A類短頸壺や須恵器蓋・高杯・壺、土錘など、Ⅱ-2～3期古の土器類が出土した。

**S B5812(83次)** 第83次調査区の北東で検出した5間×2間の東西棟で、S B 5845および第84-2次調査区のS B 5924さらに第86次調査区のS B 6010と規模や棟方向・南北の柱筋がおおむね揃っており計画的な建物配置が行われたことがうかがえる。柱掘形は一辺約1.0mの方形、径約30cmの柱痕跡が残る。柱間は桁行2.4m、梁行2.1mである。柱穴から一部Ⅲ期の土器の混入が見られるが、土師器・鉢・皿・高杯・甕などⅡ-1期新〜2期の土器が出土している。重複関係から3間×2間のS B 5808より古いことがわかる。

**S B5817(83次)** S B 5808の南で検出した3間×2間の東西棟である。柱穴は径0.4〜0.5mの略円形、柱間は桁行1.5m、梁行1.8mである。出土遺物は少ないが、Ⅱ期の中に納まるものとみられる。

**S B5818(83-84-1次)** 第83-84-1次調査区の北部にまたがって検出された3間×2間の東西棟で、柱掘形は一辺0.6〜0.7mの隅丸方形で、柱間は桁行1.9m、梁行2.1mで、規模の上ではS B 5808に近似する。柱穴出土遺物は少ないが、Ⅱ-2〜3期頃のものだろうか。

**S B5829(83次)** 83次調査区の南西部で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.4〜0.5mの隅丸方形で、柱間は桁行1.9m、梁行2.0mである。Ⅱ期の前半とみられる土師器杯・甕が少量出土している。

**S B5835(83次)** 第83次調査区の南東で検出した4間×2間の南北棟である。柱掘形は一辺約0.6〜0.8mの略方形ないしは不整形で、径20cm強の柱痕跡がある。柱間は桁行・梁行とも1.7mである。S B 5835は、概ね段階では平安初期の建物とされていたが、遺構の重複関係からS D 5832より新しいとされ、この溝は西加座南A期とした掘立柱屏S A 5840に伴う溝と考えられること、柱穴からの出土遺物が土師器杯・鉢・高杯・甕、黒色土器A類鉢、須恵器蓋・壺などⅡ-1〜2期にかけてのものともみられること、S B5818に直交する位置関係にあるとみられることから、B期の遺構と判断した。

**S B5845(83次)** 第83次調査区の南東隅で検出した5間×2間の東西棟で、S B 5812などと棟方向・柱筋を揃える。S B 5812との間隔は約16mである。柱掘形は一辺約0.8mの略方形、径約20cmの柱痕跡がある。柱間は桁行・梁行とも2.4mである。柱穴からは土師器杯・鉢・皿、須恵器壺や灰軸陶器が出土しており、Ⅱ-3期古の遺物が主体的である。

**S B5846(83次)** S B 5845と重複して検出した5間×2間の東西棟で、柱穴の重複関係からS B 5845より新しいと判断される。柱掘形は一辺約0.7〜0.8mの略方形で、径約20cmの柱痕跡がある。柱間は桁行2.0m、梁行2.1mである。柱穴からⅡ-3期の土師器杯・鉢・甕、須恵器杯・鉢、灰軸陶器が出土している。

**S B5853(83次)** 第83次調査区の南部のトレンチで検出した3間×2間とみられる南北棟である。柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形で、桁行の柱間は1.9mである。Ⅱ-2期新〜3期古頃の土師器杯などが出土している。

**S B5901(84-1次)** 第84-1次調査区の南東隅で検出した桁行3間以上、梁間2間の南北棟である。柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形で、径約20cm弱の柱痕跡がある。柱間は、桁行・梁間とも1.9mである。土師器杯・皿、須恵器杯、灰軸陶器碗など、Ⅱ-3期前半とみられる土器類が出土している。

**S B5920(84-2次)** 第84-2次調査区から第21-4次調査区にかけて検出した東西棟で、5間×2間の規模になるとみられる。柱掘形は一辺約1.3mの方形と大きく、径20cm強の柱痕跡が残る。柱間は桁行・梁行とも約2.4mである。土師器杯・鉢・皿・平底鉢・甕・鍋、須恵器蓋・壺などⅡ-1期を中心とした土器類が出土しており、灰軸陶器は柱痕跡からしか出土していない。この建物も同規模のS B 6037・6020とおおむね棟方向・柱筋を合わせて規則的に並列する。直近のS B6037との間隔は約15mである。また、柱穴の重複関係からS B 5924より古いと判断される。

**S B5924(84-2-86次)** 第84-2次調査区から第86次調査区にかけて検出した5間×2間とみられる東西棟で、南のS B 5812との間隔は約15.6mである。柱掘形は一辺約0.9mの方形で、径約30cmの柱痕跡がある。柱間は桁行・梁行とも2.4mである。柱穴からⅢ期のものもわずかに混入するが、土師器杯・鉢・皿・甕、須恵器蓋・壺、土錘などⅡ-2期を中心とした時期の土器類が出土している。

**S B6010(86次)** 第86次調査区の北東寄りで検出した5間×2間とみられる東西棟で、S B 5924から約36.6mの

間隔でおおむね棟方向・柱筋を描える。この距離は、現在は確認できていないがS B 6010・5924間に同規模の東西棟がもう1棟入れば、建物間隔が約15～16mでほぼ等間隔に4棟並ぶことになる。S B 6010の柱掘形は一辺約0.8mの方形で、径30cm弱の柱痕跡がある。柱間は桁行・梁行とも約2.3mである。柱穴から土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・碗などⅡ～3期古中頃の土器類や炭化材が出土している。

**S B 6020(86次)** 第86次調査区の北西部で検出した5間×2間の身舎に、南に1間分の廂を持つ東西棟である。身舎の柱掘形は一辺約0.9mの方形、径30cm弱の柱痕跡を持つ。廂の柱穴は径約0.5mの円形である。柱間は桁行・梁行ともに2.4m、廂出は2.7mである。柱穴から土師器杯・碗・皿・高杯・平底壺・甕・甌、須恵器杯・蓋・壺、土錘などのⅡ～2期を中心とした多量の土器類と炭化材が出土した。

**S B 6021(86次)** 第86次調査区の北西部で検出した5間×2間の東西棟で、S B 5920・6037とは並列に配置されている。直近のS B 6037とは約14.8mの間隔である。柱掘形は一辺約0.7mの方形で、径20cm強の柱痕跡が残る。柱間は桁行2.5m、梁行2.4mである。土師器杯・碗・皿・蓋・甕、須恵器片などⅡ～2期頃の土器類が出土した。

**S B 6037(86次)** 第86次調査区の中央やや南寄り検出した東西棟で、桁行3間以上、梁行2間だが、5間×2間の蓋然性が高い。S B 5920・6021とはほぼ等間隔で、棟方向・柱筋をおおむね揃えている。柱掘形は一辺約0.8m、径30cm前後の柱痕跡が見られる。柱間は桁行2.5m、梁行2.4mである。土師器杯・碗・皿・甕・鍋、須恵器蓋・皿・甕など、Ⅱ～1期新～2期の土器類や炭化材が出土している。

**S B 6068(86次)** 第86次調査区の西端で検出した、桁行2間以上、梁行2間の東西棟とみられる建物である。柱掘形は一辺0.6～0.7mの隅丸方形で、径20cm弱の柱痕跡がある。柱間は桁行2.2m、梁行1.9mで、柱穴からⅡ～2期頃のものとみられる土師器杯・甕が出土している。

## 2)土坑・溝

**S K 1127(21-4次)** 第21-4次調査区の北東隅で検出した、東西約1.5m、南北0.6m以上、深さ約0.65mの楕円形土坑である。Ⅱ～2～3期古とみられる土師器杯・皿・甕、須恵器台付盤などが少量出土している。

**S K 5784(83次)** 第83次調査区の北西隅近くで検出した東西約2.9m、南北約2.6m、深さ約1.0mの深い不整形土坑で、底部の形状から複数の土坑が重複している可能性がある。Ⅱ～1～3期にかけてのものとみられる土師器杯・碗・皿、須恵器片などが少量出土している。

**S D 5798(83次)** 第83次調査区の北東隅で検出した最大幅0.7m以上、深さ0.4～0.5mの東から西に傾斜する東西溝である。延長で約7m分を検出した。Ⅱ～2～3期の土師器甕などの小片が少量出土している。

**S K 5826(83次)** 第83次調査区の南西隅近くで検出した、東西1.8m以上、南北5.0m以上、深さ約0.1mの略方形の土坑である。Ⅱ～2～3期の土師器杯・碗・皿・高杯・甕・甌、須恵器蓋・無台盤・甕、緑釉陶器片が少量出土している。

**S K 5894(84-1次)** 第84-1次調査区の南西隅近くで検出した、東西1.8m以上、南北4.0m以上、深さ約0.15～0.2mの不整形土坑である。Ⅱ～2～3期の土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器杯・蓋、灰釉陶器碗、緑釉陶器片や線刻土器が少量出土している。

**S K 5927(84-2次)** 第84-2次調査区の西端で検出した、東西0.8m以上、南北2.4m以上、深さ0.3mの不整形土坑である。底部に段を有することから、複数の土坑が重複している可能性がある。Ⅱ～1期新～2期にかけての土師器杯・碗・皿・高杯・平底鉢・甕・鍋・甌、黒色土器A類杯、須恵器杯・蓋・壺・甕、志摩式製塩土器が少量出土している。

**S K 5928(84-2次)** 第84-2次調査区の西寄り検出した、東西3m以上、南北約3.8m、深さ約0.2～0.5mの不整形土坑で、遺構の輪郭や底部の形状から複数の土坑が重複している可能性が高い。Ⅱ～1期古～2期の土師器杯・碗・皿・高杯・平底鉢・精製壺・甕・甌、黒色土器A類杯、須恵器杯・盤・壺・短頸壺、小型模造品、志摩式製塩土器や炭化材が整理箱で5.5箱と多量の遺物が出土している。その中に灰釉陶器が全く含まれておらず、小型模造品の黒色土器甕や内面に被熱痕のある土師器杯・皿や線刻土器を含んでいることが特徴である。

**S K 5929(84-2次)** 第84-2次調査区で、S K 5928の東に接して検出した、東西27 m以上、南北約3.2 m、深さ約0.4～0.5 mの不整形土坑で、これも複数の土坑が重複している可能性がある。Ⅱ-1期新～2期の土師器杯・碗・皿・高杯・平底鉢・甕、黒色土器A類片、須恵器杯・蓋・高杯・鉢・甕、灰軸陶器耳皿、志摩式製塩土器、土鎌、輪羽口片、鉄製品が整理箱で約3箱出土している。

**S K 6008(86次)** 第86次調査区の北東部で検出した、東西2.5 m以上、南北約1.7 m、深さ約0.4 mの長楕円形の土坑である。Ⅱ-2～3期の土師器杯・碗・皿・高杯・甕、黒色土器A類杯、須恵器杯・提瓶・甕、灰軸陶器段皿、志摩式製塩土器などが整理箱約3分の1箱分出土している。

**S K 6027(86次)** 第86次調査区のほぼ中央部で検出した、東西約2.2 m、南北約0.7 m、深さ約0.2 mの楕円形の土坑である。Ⅱ-3期の土師器甕・瓶などの小片、須恵器甕、灰軸陶器皿が少量出土している。

**S K 6032(86次)** 第86次調査区の中央やや南寄りで見出された、東西約1.8 m、南北約0.6 m、深さ約0.25 mの長楕円形の土坑である。Ⅱ-3期頃の土師器甕などの小片、灰軸陶器片が少量出土している。

**S K 6041(86次)** 第86次調査区の東端の中央南寄りで見出された、長径1.8 m以上、短径約1.2 m、深さ約0.15 mの楕円形の土坑である。Ⅱ-3期を中心とした土師器杯・皿・甕・鍋、須恵器甕が少量出土している。

**S K 6042(86次)** 第86次調査区の南東部で見出したS K 6042～6045の土坑群の一つである。南北約2.0 m、深さ約0.4～0.6 mの略方形の土坑である。Ⅱ-2～3期とみられる土師器杯・碗などの小片が出土している。

**S K 6043(86次)** S K 6042～6045の土坑群の一つで、東西約1.5 m、南北約1.7 m、深さ約0.55 mの不整形の土坑である。Ⅱ-2～3期のものとみられる土師器杯・甕・瓶・甕、須恵器杯の他、土師器小型高杯が少量出土している。

**S K 6044(86次)** S K 6042～6045の土坑群の一つで、東西約1.5 m、南北約1.8 m、深さ約0.4 mの略円形の土坑である。Ⅱ-2～3期古の土師器杯・皿・甕、黒色土器A類杯、須恵器壺・甕が少量出土している。

**S K 6045(86次)** S K 6042～6045の土坑群の一つで、東西約3.0 m、南北約1.8 m、深さ約0.4 mで、S K 6043と大きく重複するようである。Ⅱ-1期新～3期古の土師器杯・碗・皿・高杯・平底鉢・甕・甕、黒色土器A類杯・台付碗、須恵器蓋・壺・甕、小型模造品の甕が整理箱で約1.5箱出土している、灰軸陶器は含まれない。Ⅱ-2期～3期古の段階のものが主体となる。

**S K 6048(86次)** 第86次調査区の南東部で見出した南北約4.2 m、東西約3.3 m、深さ約0.25 mの大型土坑である。Ⅱ-2～3期古の土師器杯・碗・皿・甕・鍋・甕、黒色土器A類杯、須恵器杯・蓋・壺・甕、灰軸陶器碗・段皿や瓦・炭化材が整理箱で3箱出土している。

**S K 6056(86次)** 第86次調査区の南端近くで見出した東西約1.8 m、南北約1.8 m、深さ約0.1 mの不整形の土坑である。Ⅱ-1～3期古の土師器杯・皿・甕・鍋が少量出土している。

**S K 6064(86次)** 第86次調査区の西部でS K 6065・6066と重なる、南北3.1 m以上、東西1.5 m以上の楕円形とみられる土坑である。Ⅱ-2～3期古の土師器杯・甕、須恵器蓋・壺が少量出土している。

**S K 6065(86次)** S K 6064・6066と隣接する、東西約2.5 m、南北約2.1 m、深さ約0.3 mの不整形土坑である。Ⅱ期のものとみられる土師器杯・碗・甕、須恵器杯、志摩式製塩土器が少量出土している。

**S K 6066(86次)** S K 6064・6065と接する、径約3.5 m、深さ約0.2 mの円形の土坑である。Ⅱ期のものとみられる土師器杯・甕、須恵器碗・蓋・壺・甕、緑軸陶器片が少量出土している。

## (2) 区画東部の遺構

### 1) 掘立柱建物

**S B 1101(21-2次)** 第21-2次調査区南北トレンチの北部で見出した桁行3間の南北棟になるとみられる建物である。柱掘形は一辺約0.5 mの略方形で、桁行の柱間は1.8 mである。Ⅱ-1～2期にかけての土師器杯・甕・鍋などが少量出土している。

**SB1105(21-2次)** 第21-2次調査区の東西トレンチで検出した桁行2間以上、梁間2間の南北棟とみられる。柱掘形は一辺約0.8mの方形で、柱間は桁行2.8m、梁行2.2mである。柱穴から土師器杯・椀・高杯・甕、須恵器壺や灰軸陶器小瓶が出土しているが、柱抜き取り後の遺物が混入している可能性がある。

**SB1400(29次)** 第29次調査区6AFI-Aトレンチのほぼ中央で検出した桁行5間の南北棟である。柱掘形は径0.6～0.7mの不整形で、西側桁行柱筋のみの検出である。東の第136次調査区でその延長を確認していないので、梁間はおそらく2間であろう。柱間は桁行で1.9mである。Ⅱ-3期頃の土師器杯・甕、須恵器杯が出土している。

**SB1438(29-34次)** 第34次調査区の中央北寄りで検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約1.0mの方形で、柱間は桁行が3.0m・2.5mとバラつきがあり、梁行は2.1mである。概報段階ではさらに東に1間分の延長が想定されていたが、この間の柱間が3.4～3.5mにもなるため、ここでは採用していない。柱穴からⅡ-1期の土師器杯・蓋・甕、須恵器薬壺蓋・甕が出土している。また、柱穴の規模は異なるが、北に約9mの間隔で、3間×2間で棟方向の似たSB1840と並列配置の関係にあるとみられる。

**SB1439(29-34次)** SB1438と重複して検出された3間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約1.3mと建物規模に比して大きい。柱間は桁行2.7m、梁行2.5mである。柱穴からⅡ-1期とみられる土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕の他、混入とみられる灰軸陶器片が出土した。SB1438とは規模・棟方向・同時期性の点から建て替えの関係にあるとみられるが、先後関係はわからない。

**SB1440(29-34-53-15次)** 第34次調査区から第53-15次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約1.0mの方形で、柱間は桁行2.3m、梁行2.5m、土師器杯・椀・皿・蓋・高杯、須恵器片、志摩式製塩土器、炭化材などⅡ-1期新～2期の土器類等が出土している。SB1440の西側棟柱に梁間の柱筋を合わせてSB3871とL字形の建物配置を構成する。ほぼ同位置でC期まで同規模のSB1442・1441の順で建て替えられている。

**SB1840(29-34次)** 第34次調査区の北西部で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺1.0～1.3mの方形と、建物面積に比して大型である。柱間は桁行・梁行とも2.5mである。柱穴から土師器杯・椀・皿・蓋・高杯、須恵器甕片、志摩式製塩土器、炭化材など、わずかにⅡ-3期のもも混入するが、大勢としてはⅡ-1期新～2期の土器類等が出土している。先述のとおり南のSB1438とは並列に配置されたものとみられる。

**SB1843(34-133次)** 第34次調査区から第133次調査区にかけての北端部で検出した桁行3間の東西棟である。梁行の規模は調査区外に伸びるため不明である。柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形で、柱間は桁行2.1mを測る。柱穴から土師器杯・甕、志摩式製塩土器等の小片が出土しており、Ⅱ-2～3期にかけてのものともみられる。この時期にSB1843から南に類似した規模の建物(SB1848・1854)が南北に並んでいる。SB1848との間隔は約4.5mである。

**SB1848(34-133次)** SB1854の北約5.5mで検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は長辺約0.4～0.6mの略方形で、柱間は桁行2.0m、梁行1.9mを測る。Ⅱ-2～3期の土師器杯・甕、須恵器片が少量出土している。

**SB1854(34-133次)** SB1843の南で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は長辺約1.1m、短辺約0.8mの長方形だが、柱痕跡は径約20cmと小さい。柱穴埋土の断ち割りから、掘形底は深さ約0.4mに段差があり、柱はこの一段下がったところに据えられたことが判明している。柱間は桁行約2.1m、梁行2.0mである。柱穴からⅡ-1期中新頃の土師器杯・皿・平底鉢・甕、須恵器杯・直口鉢・甕、炭化材が少量出土している。

**SB1861(34次)** 第34次調査区の南西部で検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は一辺約0.6～0.7mの隅丸方形で、柱間は桁行・梁行とも1.8mである。柱穴から土師器杯・椀・皿・甕、須恵器蓋・短頸壺、志摩式製塩土器、土鍾と、混入とみられる灰軸陶器が出土している。重複関係から、A期に西加座南区画の南端は区切ったSD1857より新しい。

**SB1864(34-133次)** 第34次調査区と第133次調査区の南部でまたがる位置で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は長辺約0.8m、短辺約0.4mの略長方形で、径20cm強の柱痕跡が残る。柱間は桁行・梁行とも1.9mである。柱穴からⅡ-1期中以降の土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕、志摩式製塩土器が少量出土している。並列の構造



を作る北のS B 1854等とは約15.0mの間隔をあけるが、建物の規模・棟方向を描いていると考えられる。

**S B 1867(34次)** 第34次調査区の南西部で検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は一辺約0.5～0.7mの略方形で、柱間は桁行2.7m、梁行2.6mである。柱穴からⅡ-1期新～2期の土師器杯・椀・甕・甕、須恵器小片が出土している。同じ位置で重なるS B 1866より柱穴の重複関係から古いことがわかる。第34次調査の概報段階では、2間×2間の四脚門と想定されていたが、第133次調査の概報段階で修正されている。

**S B 1869(34次)** 第34次調査の南東部で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.4～0.5mの不整形円形で、柱間は桁行2.0m、梁行1.8mである。Ⅱ-1～2期の土師器杯・椀・高杯・甕、須恵器杯が少量出土している。

**S B 3871(53-15-58-1次)** 第53-15次調査区と第58-1次調査区にまたがって検出された3間×2間の南北棟である。柱掘形は一辺約0.8mの略方形である。柱間は桁行2.1m、梁行2.25mで、土師器杯・皿・甕、須恵器片などⅡ-2期頃とみられる土器類が出土している。先述のとおりS B 1440とL字形の配置を構成する。

**S B 7995(120次)** 第120次調査区の南西部で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.6mの方形で、径約30cm弱の柱痕跡が残る。柱間は桁行・梁行とも1.9mである。Ⅱ-2期を中心とした土師器杯・椀・皿・甕・鍋、須恵器杯・蓋・壺・甕、志摩式製塩土器が出土している。

**S B 7996(120次)** 第120次調査区の中央西寄りで検出した2間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺0.5～0.7mの方形で、一部の柱穴に柱の抜き取り痕が認められる。柱間は桁行2.1m、梁行1.3mであまり類例の無い構造である。柱穴からⅡ-2～3期古の土師器皿・甕、炭化材が少量出土している。

**S B 7998(120次)** 第120次調査区の中央東寄りで検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は一辺約0.6～0.8mの方形で、径約20cmの柱痕跡が残る。柱間は桁行1.9m、梁行2.1mを測る。柱穴からⅡ-1期新～2期の土師器杯・皿・甕・鍋、須恵器蓋・壺が出土している。

**S B 7999(120次)** 第120次調査区の東端で検出した桁行2間以上、梁行2間の東西棟の身舎の北側に1間分の廂出を持つものである。柱掘形は一辺約0.4～0.5mの方形で、径約20cmの柱痕跡が残る。柱間は桁行・梁行とも2.1mである。概報では平安時代初期の建物とされているが、柱穴の出土遺物はⅡ-2期以降の土師器皿が掘形埋土から出土しており、B期の建物と判断した。

**S B 8003(120次)** 第120次調査区の南東部で検出した3間×2間の東西棟で、柱掘形は一辺約0.5mの略方形で、一部に径約20cmの柱痕跡が残る。柱間は桁行1.9m、梁行2.1mである。柱穴からⅡ-2期以降の土師器皿・甕、須恵器甕、志摩式製塩土器が出土している。S B 7995と規模や棟方向の上で似ており、同時併存か建て替えの関係にあるとみられる。

**S B 8463(133次)** 第133次調査区の南東部で検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は一辺0.5～0.7mの隅丸方形で、柱間は桁行・梁行とも約2.6mである。Ⅱ-2期以降の土師器杯・椀・甕などが出土している。

**S B 8536(136次)** 第136次調査区の南半で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.5～0.7mの隅丸方形で、径30cm弱の柱痕跡が残る。柱間は桁行約2.4m、梁行2.3mである。柱穴からⅡ-3期の土師器杯・甕、須恵器蓋、灰軸陶器椀が出土しており、B期からC期にかけての建物と判断した。第140次調査区のS B 8855・8862とほぼ等間隔で並列されたとみられる。

**S B 8538(136次)** S B 8356に重なって検出された5間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.5～0.6mの隅丸方形あるいは略方形で、径20cm強の柱痕跡が残る。柱間は桁行2.1m、梁行2.2mである。柱穴からⅡ-3期頃の土師器杯・甕・飯、須恵器杯・壺、灰軸陶器椀が出土している。

**S B 8855(140次)** 第140次調査区の北半で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約1.0～1.2mの方形で、径約30cmの柱痕跡が残る。柱間は桁行2.4m、梁行2.5mを測る。Ⅱ-2～3期前半の土師器椀・皿・高杯・甕、黒色土器A類杯、須恵器杯・蓋・盤・高杯・壺・甕、灰軸陶器椀が出土している。第136次調査区のS B 8536とはおおむね棟方向と梁間柱筋を描き、約13mの間隔で並立する。

**S B8862(140次)** 第140次調査区の南端で検出した5間×2間とみられる東西棟で、東梁行は調査区外に延びる。柱掘形は一辺約1.0mの方形で、径約30cm前後の柱痕跡が残る。柱間は桁行2.2m、梁間2.5mである。柱穴からはⅡ-3期以降の土師器杯・椀・皿・高杯・甕、黒色土器A類杯、須恵器杯・蓋・壺・甕、緑釉陶器皿、鉄製品が出土している。B期後半からC期にかけてのものだろうか。

### 3) 土坑・溝

**S K1444(29-34次)** 第34次調査区の西部中央で検出した、東西約2.4m、南北約2.5m、深さ約0.3mの略円形の土坑である。Ⅱ-3期中新頃の土師器杯・皿・蓋・甕・瓶・甕、黒色土器A類杯、須恵器壺・甕、灰釉陶器椀が少量出土している。

**S K2832(47-133次)** 第133次調査区の中央東寄りで検出した長径2.3m以上、短径約1.5m、深さ約0.4mの楕円形とみられる土坑である。Ⅱ-1-2期とみられる土師器皿・椀・高杯・甕・瓶、須恵器杯・高杯・甕が少量出土している。

**S K4262(58-1次)** 第58-1次調査区の南東部で検出した、東西約1.8m、南北約1.9m、深さ約0.15mの略三角形の土坑である。Ⅱ-2-3期古の土師器杯・椀・皿・高杯・甕・鍋、須恵器蓋・甕、灰釉陶器皿、志摩式製塩土器が少量出土している。

**S K8381(133次)** 第133次調査区の中央部東寄り、S D 2836に重なって検出した径約2.0m、深さ約0.3mの略円形土坑である。Ⅱ-1-2期の土師器杯・椀・高杯・把手付盤・甕・鍋、須恵器杯・蓋・壺・甕、炭化材が出土している。

**S K8385(133次)** S K 8381に接して検出した径1.0m以上の略円形の土坑で、第47次調査のS K 2833と同一のものである。埋土の重複関係からS K 8381より新しい。Ⅱ-3期の土器類が少量出土している。

**S K8412(133次)** 第133次調査区の中央部南寄りでS K 8413に接して検出した、長径2.0m前後の不整形土坑である。Ⅱ-2期とみられる時期の土器類が少量出土している。

**S K8414(133次)** S K 2832に西接して検出した、長径約1.1mの楕円形土坑である。Ⅱ-2-3期とみられる土師器小片が出土している。

**S K8395下(133次)** 第133次調査区の南端近くで検出した、東西約5.5m、南北約4.0m、深さ約0.8mの不整形土坑である。埋土を上層・下層に分離し、下層からはⅡ-1-2期の土師器杯・椀・皿・高杯・平底鉢・甕、須恵器杯・蓋・高杯・甕・円面甕・獸蹄、灰釉陶器椀、甕の小型模造品などが土坑全体で整理箱7.5箱分出土している。

**S K11664(34次)** 第34次調査区の中央東端で検出した、東西約2.8m、南北約1.0m、深さ約0.4mの不整形土坑である。形状的にはピットの集合とも考えられる。Ⅱ-1期中～2期の土師器杯・椀・皿・高杯・甕・鍋・瓶、須恵器杯・皿・蓋・壺・甕が少量出土している。

## 第5節 西加座南C期の遺構

### (1) 区画南西部の遺構

C期には再び西加座南区画の南西部では、規模・構造・棟方向の上で区画内の他の建物群とは明らかに一線を画すようになる。

#### 1) 掘立柱建物

**S B5815(83次)** 第83次調査区の北半で検出した東西棟で、5間×2間の身舎に東・南の二方向に1間分ずつ廂を持つ建物である。柱掘形は身舎で一辺約0.8～0.9mの方形、廂は0.9～1.0mの方形で、身舎より廂の柱掘形がやや大きい。身舎・廂いづれにも径20～30cm弱の柱痕跡が残る。柱間は桁行2.45m、梁行2.3m、廂出は南廂が2.8m、南廂が3.0mである。棟方向がE3°Sと、これまでと大きく異なるが、これはE4°Nを基本とする方格街区の基準方向からも大きく外れる。概報段階では平安時代前I期のものとされていたが、柱穴からⅡ-2-3期中の土師器杯・

碗・皿・平底鉢・甕・甌、黒色土器A類碗、須恵器杯・蓋・台付盤・甕、炭化材が出土している。

こうしたL字形に廂を配する大型建物は、これまでに御館区画の第19次調査のS B 1000など6棟確認されている。II期のものは鍛冶山西・御館・西加座南・西加座北区画といった方格街区の中央の区画に限られる。

**S B 5830(83次)** 第83次調査区の南半で検出した東西棟で、5間×2間の身舎の北・南側に1間分の廂を持つものである。柱掘形は身舎で一辺約0.9～1.2mの方形、廂は0.4～0.5mの略方形ないしは円形である。柱間は桁行2.4m、梁行2.3m、廂出は南北ともに2.9mである。S B 5815同様E 3°Sの棟方向をとる。概ね段階では平安時代前I期のものとされていたが、柱穴からII-2～3期にかけての土師器杯・碗・甕、須恵器壺、瓶・甕、灰軸陶器碗が出土している。S B 5815とは約5.5mの間隔で、西側梁間柱筋をおおむね揃えていることから、2棟は同時併存した可能性がある。

**S B 5925(84-2次)** 第84-2次調査区で検出した、桁行5間以上、梁行2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.7～0.9mの方形ないし不整形で、径30cm弱の柱痕跡が残る。柱間は桁行2.4m、梁行2.5mである。この建物もE 3°Sの棟方向をとる。柱穴からII-2期以降の土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕、すり石が出土している。

**S B 6051・6052(84-2・86次)** S B 5925の北側で2棟重複して検出した東西棟で、柱掘形の規模は他の建物との重複で判断しがたいがS B 6051で一辺0.6m前後の略方形、S B 6052で一辺0.5～0.6mの略方形ないし不整形である。柱痕跡はわからない。柱間はS B 6051で桁行2.2m、梁行2.3m、S B 6052で桁行2.0m、梁行1.9mである。出土遺物にはS B 6051からはII-1～3期の土師器杯・高杯・甕、須恵器壺、灰軸陶器碗、炭化材が、S B 6052からはII-2～3期の土師器壺等が出土している。この2棟の前後関係は明らかでないが、S B 5925の後身のものと考えたい。

## 2) 土坑・井戸・溝

**S K 5786(83次)** 第83次調査区の北西部で検出した、南北約2.4m、東西約1.8m、深さ約0.25mの楕円形土坑である。II-3期頃の土師器杯・皿・甕、灰軸陶器碗が少量出土している。

**S K 5790(83次)** 第83次調査区の北東部で検出した、東西約5.8m、南北約4.7m、最大深約0.5mの大型土坑である。遺構の輪郭や底部の形状から数基の土坑が重複しているものとみられる。II-3期古中を中心とした時期の土師器杯・皿・台付鉢・盤・甕・鍋・甌、須恵器杯・碗・高杯・盤・直口鉢・細頸壺・甕、灰軸陶器碗・皿・段皿・三足盤・細頸壺、緑軸陶器片、志摩式製塩土器、土鍬や釘とみられる鉄製品が、整理箱で25箱分出土している。

**S K 5791(83次)** 第83次調査区の北東隣近くで検出した、東西約2.5m、南北約3.5m、最大深約0.2mの不整形土坑である。これも複数の土坑が重複している可能性がある。II-3期中以降の土師器杯・碗・皿・高杯・甕・甌、黒色土器A類碗・小型短頸壺、B類片、須恵器杯・小型碗・細頸壺・広口壺・甕、陶器小杯、灰軸陶器碗・皿・耳皿・壺、小型模造品土師器甕の他、鉄釘・炭化材が整理箱で7箱分出土している。

**S D 5795(83次)** 第83次調査区の北東部で検出した、幅約0.5m、深さ約0.1m、検出延長約2.5mの南北溝である。東のS D 5803・5819や、同時期のS B 5815の東側梁間柱筋とおおむね方向を揃える。II-3期頃のものともみられる土師器碗・皿・甕、須恵器碗、灰軸陶器碗・壺が少量出土している。

**S K 5801(83次)** 第83次調査区の北東隅で検出した、南北2.3m以上、東西約2.0m、深さ約0.5mの楕円形の土坑である。近世陶器も混入するものの、II-3期を中心とする時期の土師器壺・甌、須恵器壺が少量出土している。

**S D 5803(83次)** 第83次調査区北東部で検出した、幅約0.5m、深さ約0.1m、検出した延長が約6.0mの南北溝である。さらに3m以上南に続くともみられる痕跡もある。S D 5795・5819やS B 5815と向きを揃えるものである。II-3期頃のものともみられる土師器杯・皿・甕や輪郭口が少量出土している。

**S K 5805(83次)** 第83次調査区の北東隅で検出した、東西1.0m以上、南北約0.9m、深さ約0.05mの浅い楕円形土坑である。II-3期頃のものともみられる土師器杯・甕などが少量出土している。

**S D 5819(83次)** 第83次調査区の北東部で検出した、幅約0.5m、深さ約0.1m、検出した延長が約10.1mの南北

溝である。S D 5795・5803やS B 5815と向きを揃えている。Ⅱ-2期～3期にかけての土師器杯・椀・高杯、須恵器蓋などの小片が少量出土している。

**S K 5849(83次)** 第83次調査区の南東部で検出した、東西2.5m以上、南北1.6m以上、深さ約0.15mの楕円形の土坑である。Ⅱ-2～3期にかけてのものともみられる土師器杯・皿・平底鉢・甕、須恵器壺、灰軸陶器椀が少量出土している。土師器杯には口縁に油煙が付着したものが複数点みられる。

**S K 5852(83次)** 第83次調査区の南東隅で検出した、南北約2.6m、東西0.8m以上、深さ約0.5mの楕円形の土坑である。Ⅱ-3期中新の土師器杯・椀・皿・甕、ロクロ土師器小皿、須恵器壺、陶器椀、灰軸陶器椀が少量出土している。土師器杯には口縁に油煙が付着したものが複数点みられる。

**S K 5854(83次)** 第83次調査区の中央南東寄りで検出した、径約1.0m、深さ約0.2mの円形の土坑である。Ⅱ-3期の土師器杯・皿・平底鉢、灰軸陶器椀・壺、志摩式製塩土器が少量出土している。

**S E 5880(84-1次)** 第84-1次調査区の中央部で検出した井戸である。検出面では長径約3.6mの楕円形を呈し、概報の記述によれば、約4.3m掘り進めた段階から一辺約1.4mの方形の掘形となり、検出面から4.7mの深度で底部に至る。調査時にも方形の一辺約1.3mの木杵を持ち、底部の水溜として径約0.6mの曲物が底部に据えられ、その外周に径20～30cmの川原石が据えられていた。

出土遺物には土師器杯・皿・蓋・付台盤・高杯・平底鉢・甕・鍋、須恵器杯・蓋・壺・短頸壺・甕、灰軸陶器椀・段皿・壺、陶器付台杯・灰軸陶器模倣の椀、山茶椀、緑釉陶器片、志摩式製塩土器、瓦が整理箱で3箱分出土している。全体的には出土土器はⅡ-1～Ⅲ-3期頃まで幅がある。調査時に分層も試みているが、主體的になるのはⅡ-4～Ⅲ-1期に属すと考えられるもので、遺物の取り上げ日時から上層と判断できるところからはⅢ期以降の土器類が出土している。こうしたことから、S E 5880はⅡ-3期の後半に掘削され、Ⅲ-3期までに埋没したと考えられる。周囲の溝理土からの混入とみられる3～4型式の山茶椀も含まれる。

**S K 5890a(84-1次)** 第84-1次調査区の南西部で検出した、一辺約2.5m、深さ約0.2mの方形土坑である。遺構全体で整理箱2箱分の土器が出土している。そのうち下層とみられる一群はⅡ-3期が中心とみられるまとまりの良い一群で、これをS K 5890aとし、上層遺物とみられるⅢ-2期の一群をS K 5890bとして分離した。5890aには土師器杯・椀・皿・高杯・把手付台付盤・甕・甕や変形小皿、須恵器杯・玉縁口縁鉢・壺・甕、灰軸陶器椀、瓦が出土している。土師器皿に線刻を施したものもある。

**S K 5893(84-1次)** 第84-1次調査区の南西部で検出した、長径約2.5m、短径約1.8m、深さ約0.2～0.4mの楕円形の土坑である。Ⅱ-3期古中頃を主体とした土師器杯・椀・皿・蓋・平底鉢・甕・甕・壺、須恵器壺、陶器付台鉢、灰軸陶器椀、緑釉陶器片、土馬、瓦、鉄製品の他、Ⅲ期の土師器皿・高杯が混入する。

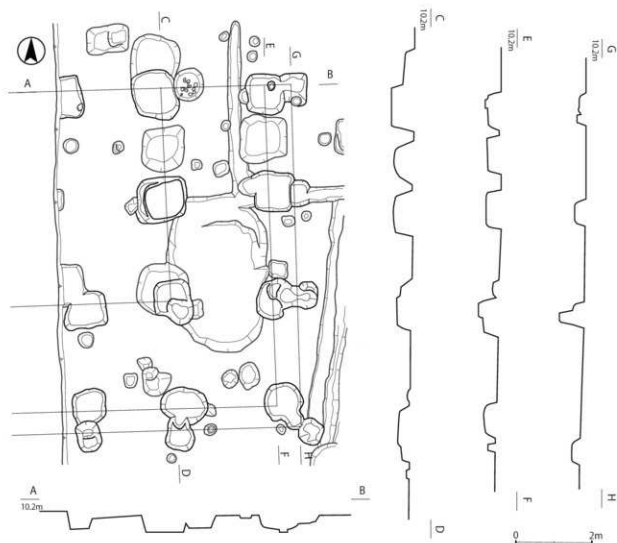
## (2) 区画北西部の遺構

### 1) 掘立柱建物

**S B 6019(86次)** 第86次調査区のほぼ中央で検出した3間×2間の南北棟である。西側桁行柱筋は検出していない。柱掘形は一辺0.6～0.7mの方形ないしは略方形で、一部で径20cm弱の柱痕跡が残る。柱間は桁行・梁行とも1.9mである。柱穴からはⅡ-2～3期中の土師器杯・高杯・甕、黒色土器A類皿、須恵器杯・蓋、灰軸陶器椀が出土している。前後関係はわからないが、重複するS B 6079とは建て替えの関係にあるとみられる。

**S B 6023(86次)** 第86次調査区の北東部で検出した、桁行3間以上、梁間2間の東西棟である。柱掘形は径約0.5mの略方形で、一部に径20cm弱の柱痕跡がある。柱間は桁行・梁行とも2.4mである。柱穴からは少量のⅡ-3期新の土師器皿・甕、須恵器片が出土している。D期まで存続する可能性がある。

**S B 6024(86次)** 第86次調査区の中央東寄りで検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は径約0.4mの円形ないし不整形である。柱間は桁行1.8m、梁行1.85mである。柱穴からはⅡ-3期新以降とみられる土師器杯・皿・甕・



第9図 西加座南C期の建物(SB1435) (1:100)

鍋、須恵器甕が少量出土している。

**SB6036(86次)** 第86次調査区の中央東端で検出した、桁行3間以上、梁間2間の東西棟である。柱掘形は径0.5mの略方形ないしは円形で、一部に径20cm弱の柱痕跡が残る。柱間は桁行2.0m、梁行1.9mである。柱穴からはⅡ-3期新~4期の土師器杯・甕・鍋、黒色土器A類椀、須恵器蓋、灰軸陶器碗・皿、緑軸陶器片が出土している。D期まで存続する可能性がある。北側のSB6023とは7.8mの間隔をあけて西側梁行柱筋を合わせており、同時併存とみられる。

**SB6074(86次)** 第86次調査区の西端で検出した桁行4間以上、梁行2間とみられる東西棟である。柱掘形は一辺約0.6mの略方形で、柱間は桁行2.4m、梁行2.2mである。柱穴からはⅡ-3期以降の土師器甕や灰軸陶器片が少量出土している。

**SB6076(86次)** 第86次調査区の西端で検出した桁行1間以上、梁行2間の南北棟と考えられる建物である。柱掘形は一辺約0.8mの方形で、梁行の柱間は1.9mである。概報段階ではⅡ-1期の建物とされていたが、柱穴からは少量だがⅡ-3~4期の土師器杯・皿が出土している。

**SB6079(86次)** 第86次調査区のはほぼ中央で検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は一辺約0.5mの略方形で、柱間は桁行・梁行とも2.0mである。柱穴からはⅡ-3期新以降の土師器杯・甕、須恵器杯、灰軸陶器碗、土鍾が出

土している。

**S B6080(86次)** 第86次調査区の南部で検出した、桁行3間以上梁行2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.4mの略方形で、柱間は桁行2.4m、梁行2.2mを測る。少量の土師器残片などが出土している。

## 2) 土坑・溝

**S K6003(86次)** 第86次調査区の北東部で検出した土坑群の一括である。個別に遺構番号は付与されていないが、南北約7.0m、東西4.5m以上の範囲に径約0.5m～2.0mの小規模土坑が密集している。最も深いところで遺構検出面から約1.3mある。出土遺物は土師器、志摩式製塩土器、須恵器、灰軸陶器、緑軸陶器、鉄製品や「周」墨書土器があり、Ⅱ～3期中～4期にかけてのものと思われる。

**S K6058(86次)** 第86次調査区の南部で検出した、南北約1.4m、東西0.9m以上、深さ約0.15mの略方形の土坑である。Ⅱ～3期中新頃の土師器杯などの小片が少量出土している。

**S K6071(86次)** 第86次調査区の西部で検出した、東西2.6m以上、南北約2.9m、深さ約0.2mの不整形土坑である。Ⅱ～3期中新を中心とした土師器杯・椀・皿・平底鉢・甕・鍋、須恵器杯、灰軸陶器碗・皿・段皿、輪羽口、志摩式製塩土器が整理箱でおよそ1箱分出土している。

**S K6073(86次)** 第86次調査区の西部で検出した、東西1.0m以上、南北約2.1m、深さ約0.1mの略楕円形の土坑である。Ⅱ～3期中新頃の土師器杯・皿・甕・瓶・甕、須恵器蓋・壺・甕、灰軸陶器皿、志摩式製塩土器が少量出土している。

## (3) 区画東部の遺構

### 1) 掘立柱建物

**S B1100(21-2次)** 第21-2次調査区の北部で検出した4間分の柱列である。柱掘形は一辺約0.5～0.8mとバラつきがある。柱間は約2.6mを測る。あるいは堀跡の可能性もある。

**S B1102(21-2次)** 第21-2次調査区の北部で検出した南北2間の建物である。東西棟になるだろうか。柱掘形は径約30cmの円形で、柱間は南北で1.8mである。Ⅱ～3期を中心とした土師器小片が出土するのみで、詳細な時期は判断しがたいが、C～D期にかけてのものだろう。

**S B1435(29-34次)** 第34次調査区の北西隅で検出した東西棟と考えられる建物で、桁行2間以上、梁行2間の身舎に、東・西の二方に1間分の廂を持つものである。調査区外だが、西側にも廂を有する可能性は高い。また、北側は明瞭ではないが、東の廂柱筋から約0.6m、南側の柱筋からは約0.9mの間隔をあけて径0.6～0.7mの不整形の柱穴が並んでおり、概ね段階では廂部分の建て替えを想定しているが、廂の柱穴と比較していずれも規模が小さく、10～15cmほど浅くなっていることから、廂先の縁の東柱の可能性も考えられる。柱穴からはⅡ～3期中～4期にかけての土師器杯・椀・皿・高杯・平底鉢・甕・瓶、須恵器蓋・有台盤・壺・甕、灰軸陶器椀・皿が出土している。S B1435は、その構造と規模から西加座南C期での区画南東部の中心的な建物と考えられる。

**S B1441-1442(29-53-15-34次)** 第34次調査区の南西部から第53-15次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。B期のS B1440を同じ場所建て替えてきたもので、第34次調査時の所見ではS B1442→1441の順で建て替えられたとされる。柱掘形はいずれも一辺約0.5mの略方形で、柱間はS B1441で桁行2.4m、梁行2.5m、S B1442で桁行・梁間とも2.1mとなっている。S B1441の柱穴からはⅡ～3期中新の土師器杯・椀・皿・高杯・甕、須恵器杯・蓋・鉢、志摩式製塩土器、鉄製品・炭化材が、S B1442からはⅡ～3期中新を中心とした土師器杯・椀・鉢・甕・皿片、須恵器甕、灰軸陶器椀、志摩式製塩土器と混入とみられるロクロ土師器が出土している。

**S B1845(34次)** 第34次調査区の北東部で検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は一辺0.5mの略方形か不整形で、一部に径20cm弱の柱痕跡とみられるくぼみがある。柱間は桁行1.7m、梁行1.9mである。柱穴からは、混入とみられる青磁片もあるが、Ⅱ～3期中～4期の土師器杯・皿、灰軸陶器椀が少量出土している。位置と規模から

みて、S B 1845 と建て替えの関係にあると考えられる。

**S B 1846(34次)** S B 1845 の東側で検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は径0.4～0.5mの不整形で、柱間は桁行2.0m、梁行1.8mである。柱穴からはⅡ-3期中新の土師器杯・甕・甌、須恵器壺、灰釉陶器碗が少量出土している。

**S B 1871(34次)** 第34次調査区の南東部で検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は径約0.3mの円形で、柱間は桁行1.8m、梁行1.9mである。Ⅱ-1～3期にかけての土師器杯、須恵器杯などが出土している。

**S B 1872(34-133次)** 第34・133次調査の南部で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.4～0.5mの円形ないしは略方形である。柱間は桁行・梁行とも1.7mである。柱穴からⅡ-1～3期にかけての土師器杯・甕須恵器壺などが出土している。

**S B 1865(34-53-15次)** 第34次調査区の南西隅から第53-15次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.7mの隅丸方形で、柱間は桁行2.4m、梁行2.3mである。柱穴からⅡ-1期以降の土師類が出土しているが、新しい時期のものの混入もあるものの、主体的になるのはⅡ-3期頃の遺物と考えられる。南北棟S B 3871・3872とL字形配置となる可能性もある。

**S B 3872(53-15-58-1次)** 第53-15次調査区から第58-1次調査区にまたがって検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は一辺0.5～0.6mの略方形で、柱間は桁行2.2m、梁行2.25mである。柱穴からはⅡ-3期中新の土師器付・碗・皿・甕、須恵器広口壺・甕が出土している。棟方向はN3°Wで北側梁行柱筋がS B 1441の桁行柱筋と揃い、共存していた可能性がある。

**S B 7989(120次)** 第120次調査区の西半中央で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.3mの円形ないしは不整形で、建物の規模に比して小規模である。柱間は桁行1.9m、梁行1.95mである。柱穴からはⅡ-3期中以降の土師器杯・甕・鍋、須恵器蓋、灰釉陶器碗、鉄製品が出土している。

**S B 7993-7994(120次)** 第120次調査区の南西隅で重なって検出された、いずれも桁行3間以上、梁間2間の南北棟である。柱穴の重複関係からS B 7993の方が新しいとされる。柱掘形はいずれも径0.4～0.7mの円形ないしは不整形で、柱間はS B 7993で桁行1.9m、梁行2.1m、S B 7994は桁行2.0m、梁行2.1mである。柱穴からはSB7993からはⅡ-3期中以降の土師器杯・甕、須恵器壺、志摩式製塩土器が、SB7994からはⅡ-3期の土師器杯・皿・甕、須恵器蓋・壺が少量出土している。

**S B 8537(136次)** 第136次調査区の南半で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺0.5～0.6mの隅丸方形で、径約20cmの柱痕跡が残る。柱間は桁行・梁行とも2.45mほどで、Ⅱ-3期中新頃の土師器碗や灰釉陶器碗が出土している。

**S B 8540(136次)** 第136次調査区の南半で検出した、5間×2間の身舎に南に1間分の廂がつく東西棟である。柱掘形は身舎が一辺0.8～1.1mの方形、廂が径0.6～0.85mの楕円形ないしは不整形である。柱間は桁行が2.45m、梁行が2.4m、廂出が2.9mである。柱穴からはⅡ-1期新～3期中頃の土師器杯・碗・皿・高杯・鉢あるいは盤・甕、黑色土器A類杯、須恵器杯・蓋・壺・甕、灰釉陶器碗、志摩式製塩土器、炭化材が出土している。

**S B 8541(136次)** 第136次調査区の南半で検出した、4間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺0.7～0.9mの方形で、柱間は桁行2.45m、梁行2.4mである。柱穴からはⅡ-3期頃の土師器杯・皿・平底鉢・甕、須恵器壺、灰釉陶器片、緑釉陶器片、炭化材が出土している。

**S B 8858(140次)** 第140次調査区の南東部で検出した3間×2間の南北棟である。一辺0.7～1.1mの方形ないしは長方形の方形ないしは長方形で、柱間はおおよそ桁行およそ2.9m、梁行2.25mである。柱穴からはⅡ-3期中新の土師器杯・碗・甕、須恵器蓋・甕、灰釉陶器碗・皿、緑釉陶器陰刻花文皿が出土している。

## 2) 土坑・溝

**S K 1403(29次)** 第29次調査の6AFI-Aトレンチの中央北寄りで検出した、南北約2.1m、東西1.2m以上、深さ

約0.2mの略円形の土坑である。Ⅱ-3期のものとみられる土師器杯・甕、須恵器壺・灰軸陶器碗が少量出土している。  
**SK1850(34次)** 第34次調査区の中央北寄りで検出した。東西約4.1m、南北約3.5m、深さ約0.5mの不整形形の土坑である。底部は複雑な形状をしており、複数の土坑が重複している可能性がある。Ⅱ-3期中新頃の土師器杯・碗・皿・蓋・粗製甕・鉢・甕・甌、黒色土器A類碗、須恵器壺、灰軸陶器碗・皿・小瓶と、混入とみられる青白磁片が整理箱で1箱分出土している。

**SK4257(58-1次)** 第58-1次調査区の北西で検出した、長径約1.5m、深さ約0.2mの楕円形の土坑である。Ⅱ-3期新を中心とした時期の土師器杯・高杯・甕、須恵器壺、灰軸陶器碗・壺が少量出土している。

**SK4258(58-1次)** 第58-1次調査区の北西で検出した、径約2.0m、深さ約0.2mの円形の土坑である。Ⅱ-3期頃のものともみられる土師器杯・皿・甕・鍋・甌、須恵器片、灰軸陶器碗が少量出土している。

**SK4259(58-1次)** 第58-1次調査区の南西でSK4258に接して検出した、東西約3.3m、南北約4.3m、最大深約0.2mの不整形土坑である。遺構の輪郭や底部の形状から複数の土坑が重複しているものとみられる。Ⅱ-3期古中を中心とした時期の土師器杯・碗・皿・高杯・甕・甌、須恵器壺、灰軸陶器碗・皿、緑釉陶器片が整理箱で0.5箱分出土している。

**SD7974(120次)** 第120次調査区を南北に貫通する、幅約0.8～1.3mの溝である。深さは約0.1～0.3mで、南から北に向かって流下する。検出延長は約25mある。おおむねⅡ-4期までとみられる土師器小片や須恵器円面碗が出土している。なお、概報では同時期とされたSD7978からは多量の近世陶器や瓦が出土しているため、ここでは扱わなかった。

**SD7976(120次)** 第120次調査区の東部で検出した、幅約0.8m、深さ約0.1～0.3mで、北に向かって流下する南北溝である。南のSD7983はその延長と考えられており、そうすると検出延長で30m強になる。Ⅱ-3期以降のものともみられる土師器小片が出土している。

**SK7985(120次)** 第120次調査区の南西部で検出した、径約2.2m、深さ約0.35mの略円形の土坑である。Ⅱ-3期中頃以降の土師器杯・碗・大型碗・皿・高杯・平底鉢・甕・鍋・甌、須恵器杯・蓋・壺、灰軸陶器碗・皿・段皿、志摩式製塩土器、土錘や鉄製品、炭化材が整理箱で1.5箱分出土している。

**SK7986(120次)** SK7985の西側で検出した、長径約1.8m、深さ約0.1mの略楕円形の土坑である。Ⅱ-3期中頃以降の土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・甕、灰軸陶器碗、緑釉陶器碗、志摩式製塩土器、土錘が整理箱で3分の1箱分出土している。

**SK7987(120次)** 第120次調査区の南西隅で検出した、南北約2.2m、東西約1.5m、深さ約0.1mの楕円形土坑である。Ⅱ-3期中新の土師器・皿・甕・鍋、須恵器、灰軸陶器碗、志摩式製塩土器、土錘が少量出土している。

**SK7988(120次)** SK7987の南側で検出した、東西約1.5m、南北0.9m以上、深さ約0.1mの土坑である。Ⅱ-3期頃の土師器杯・皿・甕、須恵器壺が少量出土している。

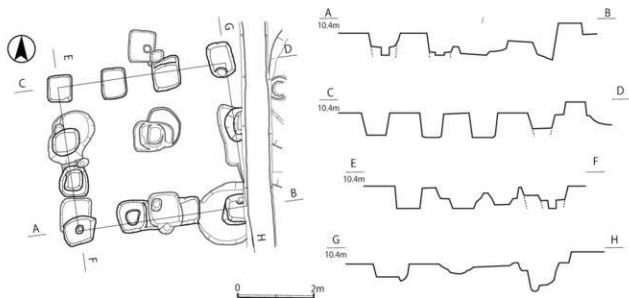
**SK8395上(133次)** 第133次調査区の南端近くで検出した大土坑で、下層をSK8395下としてB期の節で報告した。上層からはⅡ-3期古を中心とした土師器杯・碗・皿・高杯・台付鉢・壺E・甕、須恵器杯・壺・甕、灰軸陶器碗・小碗・段皿、志摩式製塩土器が出土している。

**SK8518(136次)** 第136次調査区の北東部で検出した長径1.5m、短径0.8m、深さは最深部で約0.4mの楕円形土坑だが、底部の形状から複数の土坑が重複している可能性もある。Ⅱ-2～3期の土師器小片、志摩式製塩土器が少量出土している。

**SK8842(140次)** 第140次調査区の南西隅で検出した、長径4.0m、短径2.7m、深さ約0.2mの楕円形の土坑である。Ⅱ-3期を中心とした時期の土師器杯・碗・皿・高杯・甕・甌・鍋、須恵器壺・甕・壺、灰軸陶器碗・皿・段皿、緑釉陶器碗・皿・段皿・壺や緑釉単彩陶器の火舎の破片などが整理箱で18箱分出土した。

**SK8851(140次)** 第140次調査区の南西部でSK8842に接して検出した長径約5.3m、短径2m以上、深さ約0.25





第10図 西加座南D期の建物(S B 6038) (1:100)

mの楕円形土坑である。Ⅱ-3期の土師器杯・椀・皿・高杯・甕、須恵器杯、灰釉陶器椀・皿などが出土している。  
**S K 11659(17-3次)** 第17-3次調査区の中央で検出した、南北約2.8m、東西2.3m以上、深さ約0.5mの楕円形とみられる土坑である。Ⅱ-3期中新を中心とした時期の土師器杯・椀・皿・甕、須恵器蓋・甕、灰釉陶器椀・皿が少量出土している。

**S K 11660(34次)** 第34次調査区の北東隅近くで検出した、一辺約1.4m、深さ約0.45mの略方形の土坑である。Ⅱ-3期の土師器杯・甕、須恵器甕が少量出土している。

## 第6節 西加座南D期の遺構

### (1) 区画南西部の遺構

#### 1) 掘立柱建物

**S B 5802(83次)** 第83次調査区の北東部で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.35～0.5mの円形ないしは楕円形で、柱間は桁行1.8m、梁行1.9mで、この建物もE4°Sの棟方向を取る。柱穴からはⅡ-4期新を中心とした時期の土師器杯・皿・甕、須恵器広口壺・甕、灰釉陶器皿、緑釉陶器片、土錘が出土している。E期まで存続するかもしれない。

**S B 5828(83次)** 第83次調査区の南西隅で検出した桁行4間以上、梁行2間の東西棟である。柱掘形は径0.25～0.4mの円形ないし不整形で、柱間は桁行1.8m、梁行2.1mである。柱穴からはⅡ-4期新以降の土師器杯・皿・椀、須恵器甕、灰釉陶器椀が出土している。E期まで下る可能性がある。ほぼ同規模のS B 5827と重なり、前後関係は明らかではないが、出土遺物からS B 5827が後出と考えた。E4°Sの棟方向を取り、西加座南区画南西部では依然、東で南に振る棟方向の建物が続く。

**S B 5847(83-84-1次)** 第83次調査区の南東隅から第84-1次調査区にかけて検出した、5間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.3～0.4mの円形ないし不整形で、柱間は桁行2.0m、梁行2.1mである。約23m西のS B 5828とは同じE4°Sの棟方向で規模も類似しており、同時に並立する可能性が高いとみられる。柱穴からはⅡ-4期新以降の土師器杯・甕、黒色土器A類椀・壺、須恵器甕・灰釉陶器椀、緑釉陶器片が出土している。これもE期まで下る

可能性がある。

**S B5926(84-2次)** 第84-2次調査区で検出した桁行4間以上、梁行2間の東西棟である。柱掘形は径0.5～0.6mの円形ないしは楕円形で、柱間は桁行1.9m、梁行2.0mで、これも棟方向がE4°Sと東で南に触れている。柱穴からはⅡ-3期以降の土師器壺・甕・甍片、須恵器杯・壺・甕、灰軸陶器碗、志摩式製塩土器が出土している。

## 2)土坑・溝

**S K5804(83次)** 第83次調査区の北東部で検出した、南北約1.6m、東西0.9m以上、深さ約0.2mの円形の土坑である。Ⅱ-4期以降のものともみられる土師器杯・甕、須恵器玉縁口縁鉢・甕、灰軸陶器片、緑軸陶器片が少量出土している。

**S K5811(83次)** 第83次調査区の中央やや北東寄りで検出した、長径約1.2m、短径約1.0m、深さ約0.2mの楕円形の土坑である。Ⅱ-3期新～4期新の土師器杯・台付杯・碗・皿・甕・甍、須恵器杯・壺、灰軸陶器碗・皿・壺、緑軸陶器片が少量出土している。

**S K5831(83次)** 第83次調査区南部の中央で検出した長径約1.6m、短径約1.2m、深さ約0.2mの楕円形の土坑である。Ⅱ-4期新～Ⅲ-1期古にかけての時期を中心とした土師器杯・台付小皿・高杯・甕・甍、クロ口土師器杯、須恵器杯・甕、灰軸陶器碗、棒状土製品が少量出土している。

**S D5843(83次)** 第83次調査区の南部で検出した、幅約0.6～0.8m、深さ約0.1～0.2m、検出延長約120mの南北溝で北から南に傾斜している。土師器碗・甕・甍、須恵器蓋・広口壺、灰軸陶器壺が少量出土し、遺構はⅡ-3期頃のものともみられる。

**S D5844(83次)** 第83次調査区の南部で検出した、幅約0.6m、深さ約0.05～0.15m、検出延長約10.2mの北から南に傾斜する南北溝である。途切れてはいるものの、S D 5843の延長である可能性もある。Ⅱ-3～4期にかけての土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器甕、灰軸陶器碗、緑軸陶器片が少量出土している。

**S D9492(148次)** 第148次調査の南北トレンチの中央を横断する東西溝である。幅約0.8～1.0m、不可須佐約0.3mで、断面形は逆台形となる。位置と方向からみると、東で第29次調査区のS D 1455、西で第83次調査区のS D 5858につながる可能性があり、西加座南区画南辺道路北側溝の位置にあたる。埋土からはⅡ-3～4期の土師器杯・皿・甕、須恵器甕などが少量出土している。

**S K9507(148次)** 第148次調査の東西トレンチの南西隅で検出した東西約4.0m、南北1.2m以上の不整形の土坑である。Ⅱ-4期の土師器杯・皿・高杯・甕、灰軸陶器片、陶器片が少量出土している。

**S D9513(148次)** 第148次調査区の東西トレンチで検出した幅約1.0mの南北溝である。Ⅱ-3～4期の土師器杯・皿・甕、須恵器片が少量出土している。

**S K11653(13-8-9次)** 第13-8-9次調査の北側東西トレンチの東端で検出した東西約4.5m、南北1.5m以上、深さ約0.4mの略方形の土坑である。Ⅱ-3期新～4期にかけての土師器杯・皿、須恵器杯・甕、陶器碗が少量出土している。

**S K11657(13-8-9次)** 第13-7-8次調査区の南側の東西トレンチの東端近くで検出した、南北0.8m以上、東西約0.7m、深さ約0.5mの楕円形の土坑である。Ⅱ-4期新の時期を中心とした土師器・碗・台付鉢が少量出土している。

## (2)区画北西部の遺構

### 1)掘立柱建物

**S B6057(86次)** 第86次調査区南端近くで検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.4～0.5mの円形ないしは不整形形で、一部に径10cm前後の柱痕跡が残る。柱間は2.0m、梁行1.95mで、この建物も棟方向がE2°Sと方格街区とは逆に東で南に触れている。柱穴からは、S B 6057からは土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・壺・甕、灰軸陶器碗、緑軸陶器片が出土しⅡ-4期以降の遺構と判断できる。

**S B6059(86次)** S B 6057に重なる位置で検出した桁行2間以上、梁間2間の東西棟である。柱掘形の規模もS B 6057とほぼ同様で、柱間は桁行2.1m、梁行1.9mを測る。S B 6059からは土師器皿、黒色土器A類碗などが少量出

土しておりⅡ-3期新〜4期と判断できる。S B 6057との前後関係はわからないが、規模の類似性から建て替えの関係にあるとみられる。

**S B 6022・6025(86次)** 第86次調査区の北東部で検出した東西棟とみられる建物で、S B 6022は桁行2間以上、梁行2間、S B 6025桁行1間以上、梁行2間である。柱掘形はいずれも径0.4m前後の円形ないしは不整形で、柱間はS B 6022が桁行1.7m、梁行1.8m、S B 6025が梁行2.0mを測る。柱穴からは、S B 6022からは土師器片、須恵器蓋、灰軸陶器碗が少量出土しておりⅡ-4期頃と、S B 6025からは土師器杯・甕、須恵器蓋・甕と円面視の可能性のある破片、灰軸陶器蓋が少量出土しておりⅡ-3期新以降のものと考えられる。この2棟も前後関係はわからないが、建て替えの関係にあると推定できる。

**S B 6038(86次)** 第86次調査区の中央部南寄りで検出した東西棟で、桁行は3間だが、梁行は東側が2間、西側が3間と特異な間面になる。柱掘形は一辺約0.6mの方形だが、南桁行の中間の2穴は連結した布掘りとなる。柱間は桁行1.5m、梁行は東で1.6mと1.9mと揃わず、西で約1.17mの等間隔となる。柱穴からは土師器杯・甕、灰軸陶器皿、緑軸陶器片が少量出土しており、遺構としてはⅡ-4〜Ⅲ-1期のものと考えられる。S B 6038は西加座南区画北西部にあって、他の建物からの隔絶やE7°Nという横方向の面で、特殊な役割を持った建物の可能性がある。

**S B 6026・6029(86次)** いずれも第86次調査区の中央部で検出した3間×2間の南北棟で、いずれも柱掘形は径0.4〜0.5mの円形ないしは不整形で、一部の柱穴に径10cm前後の柱痕跡が残る。柱間はS B 6026が桁行1.8m、梁行1.7m、S B 6029が桁行2.0m、梁行1.9mを測る。柱穴からは、S B 6026からは土師器杯・台付杯・高杯・甕、黒色土器A類杯、須恵器蓋、灰軸陶器碗・皿、緑軸陶器片が、S B 6029からは土師器杯・皿・台付小皿・高杯・甕、須恵器蓋・甕、灰軸陶器碗・皿、緑軸陶器片が、出土しておりいずれもⅡ-4期の遺構と判断したが、柱穴の重複関係からS B 6029の方が古いと判断された。

**S B 6067・6069(86次)** 第86次調査区の北西部で検出した東西棟で、S B 6007は桁行1間以上、梁行2間。柱掘形は径0.3〜0.4mの円形で、柱間は梁行1.8mである。S B 6029は桁行2間以上、梁行2間で、柱掘形は径約0.5mの円形あるいは不整形で、柱間は桁行2.0m、梁間1.8mである。柱穴からは、S B 6067からは土師器小片、須恵器円面視片、灰軸陶器碗など、S B 6069からは土師器皿・台付杯、須恵器蓋・甕と円面視の可能性のある破片、灰軸陶器碗・壺などが少量出土しており、いずれもⅡ-4期の遺構と判断した。

**S B 6075(86次)** 第86次調査区の南西隅で検出し、東西2間以上、南北で1間以上ある。柱掘形は径0.4m弱の円形で径10cm強の柱痕跡が残る。柱間は東西で約2.0mをはかる。柱穴からは土師器杯・皿・台付小皿・甕、須恵器蓋、灰軸陶器碗が少量出土しており、Ⅱ-3期新〜4期の遺構と考えられる。

**S B 6077(86次)** 第86次調査区の西部で検出した南北棟で、桁行1間以上、梁行2間である。柱掘形は一辺約0.5mの方形ないしは不整形である。柱間は梁行で1.9mである。柱穴からは土師器杯・甕、須恵器杯、灰軸陶器碗が少量出土しており、Ⅱ-4期の遺構と判断した。

## 2) 土坑・溝

**S K 6006(86次)** 第86次調査区の北東部でS K 6007に重なって一部が検出された土坑である。Ⅱ-3期中以降の土師器杯・皿、須恵器蓋などが少量出土している。

**S K 6007(86次)** 第86次調査区の北東部の、西加座南区画北辺道路の敷地内に掘削された、東西3.0m以上、南北4.1m以上、深さ約0.35mの大型土坑である。底部の形状から複数の土坑が重複している可能性もある。Ⅱ-2期〜3期中にかけての時期を中心に土師器杯・碗・皿・高杯・平底鉢・甕・鍋・土管、黒色土器A類杯、須恵器蓋・高杯・盤・壺・甕、灰軸陶器皿、緑軸陶器片、「官」墨書土器が整理箱で3分の1箱ほど出土している。

**S K 6031(86次)** 第86次調査区のほぼ中央で検出した、東西約1.5m、南北約1.7m、深さ約0.2mの不整形土坑である。Ⅱ-4期古以降の時期を中心とした土師器杯・碗・皿・高杯・甕、黒色土器A類杯、須恵器蓋、灰軸陶器碗、緑軸陶器片が少量出土している。

**SK6062(86次)** 第86次調査区の西部で検出した、東西約1.8m、南北約1.5m深さ約0.2mの円形の土坑である。Ⅱ-4期新頃の時期を中心に土師器杯・台付杯・平底鉢・甕、須恵器蓋・甕、灰軸陶器碗の他、混入とみられる小型高杯が出土している。

**SK6072(86次)** 第86次調査区の西部で検出した、南北約1.3mの略円形とみられる土坑である。Ⅱ-3期新〜4期にかけての土師器付・皿・盤、甕が少量出土している。

**SK6073(86次)** 第86次調査区の西部で検出した、東西1.0m以上、南北約2.0m、深さ約0.1mの土坑である。Ⅱ-3期中新の時期を中心とした土師器杯・皿・甕・瓶・甕、須恵器蓋・壺・甕、灰軸陶器皿、志摩式製塩土器が少量出土している。

### (3) 区画東部の遺構

#### 1) 掘立柱建物

**SB1104(21-2次)** 第21-2次調査区の東西トレンチで検出した桁行4間、梁行2間以上の東西棟と考えられる建物である。柱掘形は一辺0.5m強の方形で、柱間は桁行1.95m、梁行1.8mである。柱穴からは土師器杯・皿・甕、須恵器甕、灰軸陶器碗が出土しており、Ⅱ-3期新以降の遺構と判断した。

**SB1401(29次)** 第29次調査の6AFI-Aトレンチの中央で検出した桁行3間の南北棟と考えられる建物である。西加座南区画の南北方向の区画内道路にかかる位置にあるため、東西は2間の桁行になるものと考えられる。柱掘形は、一辺0.5〜0.6mの略方形ないしは不整形で、柱間は桁行で1.9mを測る。柱穴からは土師器杯・皿・甕、須恵器甕、灰軸陶器碗が少量出土しており、Ⅱ-3期新以降の遺構と判断した。

**SB1446(34-53-15次)** 第34次調査区から第53-15次調査区にかけて検出した、3間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.6〜0.7mの略方形で、柱間は桁行2.0m、梁行1.8mである。柱穴からは土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器壺・甕、灰軸陶器碗・壺が出土しており、Ⅱ-3期新〜4期の遺構と判断した。

**SB1866(34次)** 第34次調査区の南西部で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.6m前後の略方形で、柱間は桁行・梁行とも1.9mである。柱穴からは土師器杯・皿・甕・甕片、須恵器蓋・甕、灰軸陶器碗・皿が出土している。第133次調査の概報ではⅡ-1・2期のものとしているが、この時期を示す土器は出土していない。

**SB3873(53-15次)** 第53-15次調査区で検出した3間×2間の東西棟で、柱掘形は径約0.6mの略方形ないしは円形である。柱間は桁行1.9m、梁行1.8mである。柱穴からは土師器皿・蓋・平底鉢・甕、須恵器杯・蓋・広口壺などⅡ-1〜2期の土器類が出土しているが、他のA・B期の建物との位置の取り合いや、近接するSB1446との規模や棟方向の親和性からD期の建物と判断した。

**SB7991・7992(120次)** 第120次調査区の南西隅で検出した南北棟で、SB7991は3間×2間、SB7992は桁行3間以上、梁行2間である。SB7991は柱掘形が径約0.4mの円形で、柱間は桁行1.9m、梁行2.2m、SB7992は柱掘形が径0.4〜0.7mの円形ないしは不整形、柱間は桁行・梁行とも2.1mである。柱穴からは、SB7992からは土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・提瓶、灰軸陶器碗や小型模造品とみられるⅡ-3期古新と判断される少量の土器類が、SB7995からはⅡ-2〜4期の土師器杯・碗・皿・甕・鍋、須恵器杯・蓋・壺・甕、志摩式製塩土器が出土している。この2棟も前後関係は不明だが建て替えの関係にあると考えられる。

**SB8002(120次)** 第120次調査区の南東部で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.4m前後の円形ないしは不整形で、柱間は桁行1.8m、梁行1.9mである。柱穴からは土師器杯・甕、黒色土器A類片、須恵器杯・甕、灰軸陶器皿が出土しており、Ⅱ-4期の遺構と判断した。

**SB8454(133次)** 第133次調査区の中央部西端で検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は一辺約0.5mの隅丸方形で、柱間は桁行2.2m、梁行2.05mである。柱穴からはⅡ-2〜3期の土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器甕などが出土している。

**S B8455(34・133次)** 第34・133次調査区の南部で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は径約0.3～0.4mの円形で、柱間は桁行1.9m、梁行2.05mである。Ⅲ-1期頃の土師器杯・甕、ロクロ土師器台付杯が出土している。

**S B8459(133次)** 第133次調査区の南部で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.2～0.3mの円形で、柱間は桁行2.1m、梁行1.8mである。柱穴からはⅡ-4期～Ⅲ-1期の土師器甕、ロクロ土師器小皿、須恵器甕、灰軸陶器鉢が少量出土している。

**S B8542(136次)** 第136次調査区の南部で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺0.4～0.5mの方形で、径10～20cmの柱痕跡が残る。柱間は桁行1.8m、梁行2.0mである。柱穴からはⅡ-4期の土師器杯・甕、須恵器鉢、灰軸陶器碗や鉄滓が出土している。

**S A8545(136次)** 第136次調査の南端で検出した東西5間分の掘立柱礎である。柱掘形は径0.4～0.5mの円形ないし楕円形で、径10cm前後の柱痕跡が残る。柱間は2.5mである。柱穴からはⅡ-3期新～4期の土師器杯・皿・台付杯・甕、須恵器蓋、灰軸陶器皿が出土している。北側のS B 8542とは約2.2mの間隔で並行しており、同時併存の可能性が高い。

**S B8861(140次)** 第140次調査区の南端付近で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺0.6～0.8mの方形あるいは略方形で、径25cm前後の柱痕跡が残る。柱間は桁行2.25m、梁行2.0mである。柱穴からはⅡ-3～4期の土師器碗・皿・台付小皿・台付盤・甕、黒色土器A類片、須恵器壺、灰軸陶器碗・段皿・広口壺、緑陶器片が出土している。

## 2) 土坑・溝

**S K1873(34次)** 第34次調査区の南端近くで検出した、南北約1.8m、東西1.7m以上、深さ約0.1mの略方形の土坑である。Ⅱ-3期新～4期新の土師器杯・台付小皿・台付鉢・甕、黒色土器A類片、須恵器杯・鉢・盤・壺・甕、灰軸陶器碗・皿、土錘が少量出土している。

**S K1874(34次)** S K 1873の南側で検出した、東西約1.7m、南北約1.4m、深さ約0.2mの不整形の土坑である。Ⅱ-4期を中心とした時期の土師器杯・皿・甕・瓶、須恵器片、灰軸陶器碗、志摩式製塩土器と鉄製品が少量出土している。

**S D8525・8531(136次)** S D 8525は、第136次調査区の西部で南北に延びる幅約0.4m、深さ約0.1mの溝で、そのまま南のS D 8531に連続していたものと考えられる。溝底部の深さから、南から北に向かって排水した溝と考えられる。Ⅱ-4期以降の土師器杯・碗・皿・高杯・鉢?・甕・鍋・瓶、須恵器小片、灰軸陶器皿、志摩式製塩土器や鉄製品などが少量出土している。

**S K8529(136次)** 第136次調査区の南西部で検出した土坑で、形状から長径1.8～3.5mの土坑が2～3基重複している可能性がある。検出面からの深さは0.2～0.3mである。Ⅱ-3～4期の土師器杯・碗・皿・小型高杯・小型甕・甕、黒色土器片、須恵器杯・甕、灰軸陶器碗・短頸壺、志摩式製塩土器、軽石などが出土している。

**S D8530(136次)** S K 8529からS D 8532につながる、幅約0.5m、長さ約0.5mの短い溝である。Ⅱ-4期以降の土師器杯・碗、須恵器甕などが少量出土している。

**S K8535(136次)** 第136次調査区の南西隅で検出した、一辺約2.0m、深さ約0.1～0.2mの方形の土坑である。Ⅱ-3期頃の土師器杯・碗・皿・高杯・甕・鍋、志摩式製塩土器などが少量出土している。

**S K8546(136次)** 第136次調査区の中央やや南寄りで検出した、径約0.6m、深さ約0.1mの円形土坑である。Ⅱ-4期以降の土師器杯・碗・台付皿・甕、須恵器片、土錘が少量出土している。

**S D11667(34次)** 第34次調査区の南端で検出した、延長約1.5m、幅約0.6mの南北溝である。Ⅱ-3～4期にかけての土師器小片や灰軸陶器碗が少量出土している。

## 第7節 西加座南E期の遺構

### (1) 区画南西部の遺構

#### 1) 掘立柱建物

**S B5781(83次)** 第83次調査区の北西隅で検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は径0.4～0.5mの円形で、柱間は桁行・梁行とも2.1mである。柱穴からはⅢ-1期以降の土師器杯・皿や白色土器系土師器の高杯ないしは器台が少量出土している。

**S B5788(83次)** 第83次調査区の北端中央で検出した南北棟で、桁行4間以上、梁行2間、柱間は桁行1.8m、梁行2.1mである。柱穴からはⅡ-4～Ⅲ-1期の土師器杯・皿・台付小皿・甕、須恵器小片、灰軸陶器碗、陶器小型杯、緑軸陶器片が少量出土している。

**S B5789(83次)** 第83次調査区北東隅で検出した桁行2間以上、梁行2間の南北棟とみられる建物である。柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形で、一部の柱穴に径30cm弱の柱痕跡が残る。柱間は桁行2.0m、梁行2.2mである。Ⅱ-3期頃のものともみられる土師器杯・甕、灰軸陶器碗などが少量出土した。

**S B5796(83次)** 第83次調査区北東隅で検出した桁行1間以上、梁行2間の南北棟とみられる建物である。柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形で、径約20cmの柱痕跡が残る。柱間は梁行で1.9mである。Ⅲ-1期頃の土師器杯・甕、白色土器系土師器の高杯、灰軸陶器碗が少量出土している。

**S B5797(83次)** 第83次調査区の北東隅で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.5m前後の円形で、一部に径約20cmの柱痕跡が残る。柱間は桁行2.0m、梁行1.7mである。柱穴からはⅡ-4～Ⅲ-1期の土師器杯・台付杯・皿・甕、須恵器壺・甕、灰軸陶器碗、緑軸陶器片のほか、混入とみられる青磁片が出土している。

**S B5799(83次)** 第83次調査区の北東隅で検出した桁行3間の東西棟と考えられる建物である。柱掘形は径0.3～0.5mの円形ないしは楕円形である。径10cm前後の柱痕跡が残る。柱間は桁行1.8m、梁行1.9mである。柱穴からはⅢ-1期以降の土師器甕片、白色土器系のロクロ土師器碗が少量出土している。

**S B5816(83次)** 第83次調査区のほぼ中央で検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は径約0.4mの円形で、柱間は桁行・梁間とも2.0mである。柱穴からは土師器台付小皿・甕・碗片、須恵器杯・甕、灰軸陶器碗が出土しており、遺構はⅡ-4～Ⅲ-1期のものと判断した。S B 5788とは同規模で棟方向も近似するため、約5.5mの間隔で併存した可能性がある。

**S B5827(83次)** 第83次調査区の南西隅で検出した桁行3間以上、梁行2間の東西棟である。柱掘形は径約0.4mの円形ないしは不整形で、柱間は桁行・梁行とも2.0mである。柱穴からは土師器杯・台付小皿・甕、須恵器台付盤、灰軸陶器碗が出土しており、遺構はⅢ-1期以降のものと判断した。D期のS B 5828とはほぼ同規模・同棟方向で、これを建て替えたものと考えられる。

**S B5876(84-1次)** 第84-1次調査区の北端で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.3～0.4mの円形ないしは不整形で、柱間は桁行1.8m、梁行1.85mである。柱穴からは少量の土師器杯・皿・台付小皿・甕、陶器片などが出土し、遺構はⅢ-1期頃のものとして判断した。西側のS B 5799とは規模・棟方向が近似するため、建て替えあるいは同時併存の可能性がある。

**S B5877(84-1次)** 第84-1次調査区の北部で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.3～0.4mの円形で、柱間は桁行2.0m、梁行1.95mである。柱穴からはⅡ-4期頃の土師器杯・甕、須恵器甕が少量出土している。前後関係は明らかではないが西側のS B 5797とは規模がほぼ同じで、東で南に振る棟方向も揃っているため、建て替えあるいは同時併存の関係にあるとみられる。

**S B5900(84-1次)** 第84-1次調査区の南端で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.4m前後の円形で、柱間は桁行1.9m、梁行1.95mである。柱穴からはⅡ-4～Ⅲ-1期の土師器杯・皿・甕・瓶、ロクロ土師器小型杯、須恵器甕、灰軸陶器碗が出土している。

**S B5902(84-1次)** 第84-1次調査区の南端で検出した5間×2間の東西棟で、柱掘形は一辺0.4～0.5mの略方形である。柱間は桁行・梁行とも1.8mである。柱穴からは土師器杯・皿・小皿・甕、ロクロ土師器杯・皿、須恵器甕、灰軸陶器碗が出土しており、遺構はⅢ-1期以降のものと判断した。

## 2) 土坑・溝

**S K1123(21-4次)** 第21-4次調査区のほぼ中央で検出した、径約2.3m、深さ約0.5mの円形の土坑である。Ⅲ-1期を中心とした時期の土師器杯・台付杯・皿・高杯・平底鉢・粗製台付鉢・粗製盤・底部穿孔壺・異形短頸壺・甕・甗、ロクロ土師器杯・小型杯・台付杯、須恵器付・鉢・甕、灰軸陶器碗・皿・壺、陶器碗や土管の可能性のある土製品が、整理箱で4箱出土している。須恵器甕には硯に転用された破片を含む。

**S D5821(83次)** 第83次調査区の中央部で検出した幅約1.1m、深さ約0.1m、検出延長約17.8mの浅い東西溝で、西から東に緩やかに流下するものである。Ⅱ期～Ⅲ-2期にかけての土師器皿・甕、ロクロ土師器小皿、須恵器片が少量出土している。

**S D5856(83次)** 第83次調査区の南側拡張トレンチのほぼ中央部で検出した幅約1.7m、深さ約0.25mの浅い溝である。Ⅲ-1～2期にかけての土師器片、ロクロ土師器片が少量出土している。

**S K5933b(84-2次)** 第84-2次調査区のA期に属するS K 5933の上層遺構である。Ⅲ-1～2期の土師器杯・皿、灰軸陶器小碗などが出土している。

**S K5934(84-2次)** 第84-2次調査区の東端で検出した、南北約1.4m、東西1.6m以上、深さ約0.2mの略円形の土坑である。Ⅱ-3期～Ⅲ期の土師器杯・台付杯・甕、須恵器甕、灰軸陶器片が少量出土している。

**S D9503(148次)** 第148次調査の南北トレンチの北半で検出した、幅約1.9mの東西溝である。Ⅲ-1～2期にかけての土師器杯・皿・甕、ロクロ土師器碗、須恵器甕、灰軸陶器片が少量出土した。

**S K9506(148次)** 第148次調査の東西トレンチの南西隅で検出した東西2.5m以上、南北1.4m以上の略円形の土坑である。Ⅲ-1～2期にかけての土師器杯・皿・甕が少量出土した。

**S D9515(148次)** 第148次調査の東西トレンチの東端で検出した南北溝である。大部分は調査区外で詳細は分からない。Ⅲ-1～2期にかけての土師器杯・皿・甕、ロクロ土師器片、灰軸陶器片が少量出土している。

**S D11655(13-8・9次)** 第13-8・9次調査区の北側の東西トレンチの北端で検出した、幅0.8m以上、深さ約0.15m、延長で13.6m以上の東西溝である。西加座南区画西辺区画道路上を横断する位置にある。Ⅱ期～Ⅲ期の幅広い時期の土師器杯・皿、ロクロ土師器碗、須恵器杯・高杯・甕、灰軸陶器碗、陶器碗(山茶碗)が少量出土している。最終的な埋没はⅢ-3期以降だろう。

## (2) 区画北西部の遺構

**S K6039(86次)** 第86次調査区の南部で検出した、東西2.0m以上、南北約1.5m、深さ約0.2mの楕円形の土坑である。Ⅱ-4期新～Ⅲ-1期にかけての土師器杯・碗・台付皿、黒色土器A類鉢、土鍾と鉄滓が少量出土している。

## (3) 区画東部の遺構

### 1) 掘立柱建物

**S B4255(58-1次)** 第58-1次調査区内の西寄りで検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は径約0.4mの円形ないしは不整形で、柱間は桁行1.8m、桁行2.05mである。柱穴からはⅢ期の土師器杯・台付杯・平底鉢、須恵器小片、灰軸陶器小片が少量出土している。

**S B4256(58-1次)** 第58-1次調査区の西寄りで検出した5間×2間の南北棟である。柱掘形は径0.4～0.6mの円形ないしは不整形で、柱間は桁行2.2m、梁行1.95mである。柱穴からの出土遺物はなく、建物の位置関係からD～E期にかけてのものとみられる。

**S B4260(58-1次)** 第58-1次調査区の南西隅で検出した南北2間以上、東西1間以上の建物である。柱掘形は径0.3 m前後の円形ないしは楕円形で、南北の柱間は1.8 mである。柱穴からは土師器杯・皿・平底鉢、須恵器甕、灰釉陶器片が出土しており、遺構はⅢ-1期以降のものと判断した。

**S B7997(120次)** 第120次調査区の南西隅で検出した桁行3間以上、梁行2間の南北棟とみられる建物である。柱掘形は一辺約0.4 mの略方形ないしは不整形である。柱間は桁行・梁行とも2.1 mである。柱穴からは土師器杯・皿・台付杯・高杯・甕、須恵器甕、志摩式製塩土器が出土しており、遺構はⅡ-4～Ⅲ-1期のものと判断した。

**S B8001(120次)** 第120次調査区の南東部で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.4 mの略方形で、一部に径10 cm前後の柱痕跡が残る。柱間は桁行2.0 m、梁行1.8 mである。柱穴からは土師器杯・甕、緑釉陶器片が少量出土しており、遺構はⅡ-4期以降のものと判断した。

**S B8453(34・133次)** 第133次調査区の北部で検出した5間×2間の東西棟で、西梁行柱筋は第34次調査区で検出している。柱掘形は径約0.4 mの円形で、柱間は桁行1.85 m、梁行1.95 mである。柱穴からは土師器杯・台付杯・台付皿・甕・甗、ロクロ土師器台付小皿、須恵器杯・壺・甕、灰釉陶器碗、緑釉陶器片、鉄製品が出土しており、遺構はⅢ-1～2期のものと判断した。

**S B8456(133次)** 第133次調査区の中央やや南寄りで検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は径0.3 m強の円形で、一部に径10 cm前後の柱痕跡が残る。柱穴からはⅢ-1期の土師器杯・碗・台付杯・甕、ロクロ土師器台付杯が少量出土している。

**S B8466(34・133次)** 第34次調査区北東隅から第133次調査区にかけて検出した3間×2間の東西棟と考えられる建物である。北側桁行柱を欠いているため、南北棟の可能性もある。柱掘形は径0.2 m強の円形、柱間は桁行2.0 m、梁行1.95 mである。柱穴からは杯など少量のⅢ期とみられる土師器片が出土したのみで、時期の判断はできないが、南のS B 8453と棟方向を揃えるところからE期のものと判断した。

**S B8857(140次)** 第140次調査区の南寄りで検出した5間×2間の身舎の北側に1間分の廂がつく東西棟である。柱掘形は身舎で一辺0.5 mの隅丸方形ないしは略方形で、一部に径10 cm強の柱痕跡が残る。廂は径0.4～0.5 mの略円形で、柱間は桁行2.4 m、梁行2.6 m、廂出は2.5 mである。柱穴からはⅢ期頃とみられる少量の土師器片、須恵器片が出土したのみで、遺物から時期の判断はできないが、建物の位置関係からE期のものと判断した。

**S B8863(140次)** 第140次調査区の南端で検出した桁行5間以上、梁行1間以上の東西棟である。柱掘形は径0.3～0.4 mの円形ないしは不整形で、柱間は桁行2.0 mである。柱穴からは土師器杯、須恵器小片、灰釉陶器片が出土しており、Ⅲ期の純粋のものと考える。

## 2) 土坑・井戸・溝

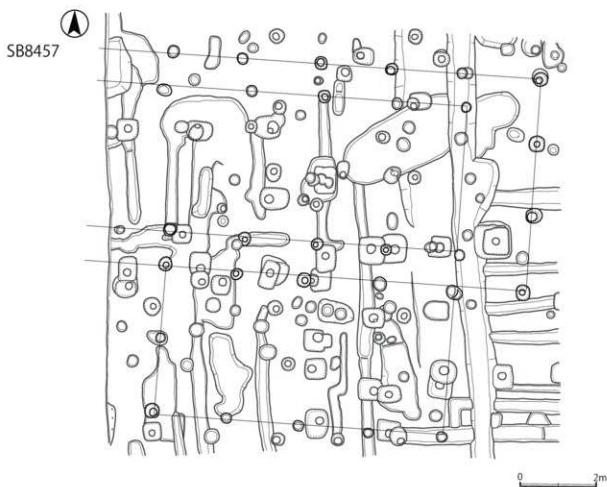
**S D1447(29・34・133次)** 第34次調査区から第133次調査区の南端を東西に走る溝である。幅は1.0 m前後で、断面形は浅いU字状になる。西から南に流下する。Ⅲ-1～2期にかけて掘削、利用された溝と考えられ、E～F期にかけて存続したものと考えられる。Ⅱ-4期～Ⅲ期にかけての土師器杯・皿・高杯・甕・羽釜・甗、須恵器杯・高杯・壺・甕、灰釉陶器碗・壺が少量出土している。

**S K1875(34次)** 第34次調査区の南東隅でS D 1447に重なって検出した東西約2.0 m、南北約1.1 m、深さ約1.2 mの楕円形の土坑である。Ⅲ-1～2期の土師器杯・碗・皿・台付小皿・甕、ロクロ土師器柱状高台杯、須恵器甕、陶器鉢が少量出土しているが、S D 1447の遺物が混入している可能性がある。

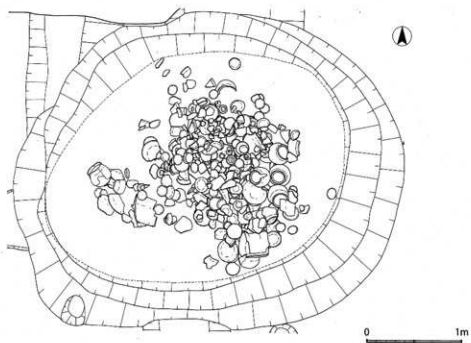
**S K4263(58-1次)** 第58-1次調査区の南端でごく一部を検出した土坑で、東西約4.6 mを検出している。Ⅲ期を中心に土師器杯・台付杯・甕、須恵器甕が少量出土している。

**S E8391(133次)** 第133次調査区の中央北寄りで検出した井戸で、検出時の径は3.6～4.1 m、検出面から約0.6 mの深さで2.9～3.5 mにすままる。深さ約1.5 mの付近でⅢ-2期古を中心とした土器類が大量に出土している。出土遺物は土師器杯・碗・皿・台付杯・台付碗・台付小皿・盤(鉢)・台付盤(鉢)・甕、甗、筒形土器、黒色土器B類碗、





SE8391  
遺物出土状況



第11図 西加座南F期の主要遺構(SB8457・SE8391遺物出土状況)(1:100 1:40)

ロクロ土師器杯・小皿・台付杯・台付小皿・椀、灰軸陶器椀・皿、陶器椀・鉢、緑軸陶器片などの土器類の他、金属製釘、鉄製刀子、砥石、瓦を含め整理箱31箱分の出土がある。井戸の稼働期間はⅡ-4期終わり頃からⅢ-2期にかかる頃と考えられている。

**SK11665(34次)** 第34次調査区の南西隅近くで検出した南北約1.5m、深さ約0.1mの方形とみられる土坑である。Ⅲ-1期を中心とした土師器杯・椀・皿・台付鉢・鍋、黒色土器A類椀、須恵器皿、灰軸陶器椀、陶器椀などが出土している。

## 第8節 西加座南F期の遺構

### (1) 区画南西部の遺構

#### 1) 掘立柱建物

**SB5813(83次)** 第83次調査区の西端で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.5mの略方形ないしは楕円形で、柱間は桁行2.3m、梁行2.4mである。柱穴からは、SB5813からは少量の土師器杯片が出土したのみだが遺構はⅢ-1～2期頃のものともみられる。

**SB5814(83次)** 第83次調査区でSB5813と重なる位置で検出した4間×2間の東西棟である。柱掘形は一辺0.5～0.8mの長方形ないしは略方形で、柱間は桁行2.7m、梁行2.8mである。SB5814からは土師器皿、ロクロ土師器台付小皿、須恵器壺が出土しており、遺構はⅢ-1～2期頃のものとは判断したが、柱穴や柱間からみて若干異なる可能性もある。

**SB5903(84-1次)** 第84-1次調査区の南西隅で検出した桁行3間以上、梁行2間の東西棟である。柱掘形は径0.2～0.4mの円形ないし不整形で、柱間は桁行2.1m、梁行1.7mである。柱穴からは土師器小皿・甕、ロクロ土師器杯、灰軸陶器皿、緑軸陶器片が出土しており、Ⅲ-1～2期のものと判断した。

**SB5930-5931(84-2次)** いずれも第84-2次調査区で検出した桁行3間以上、梁行2間の東西棟で、柱掘形は径0.3～0.4mの楕円形ないしは不整形である。柱間はSB5930は桁行・梁行とも2.1m、SB5931は桁行・梁行とも2.0mである。柱穴からは、SB5930からは土師器杯・甕、ロクロ土師器台付杯、須恵器壺・甕が、SB5931からは土師器皿、ロクロ土師器小皿、陶器小片などが出土しており、いずれもⅢ-2期の遺構と判断した。

#### 2) 土坑・溝

**SK1122上層(21-4次)** 第21-4次調査の北端で検出した東西3.7m以上、南北0.8m以上、深さ約0.65mの土坑の上層部分である。調査の日付で推察される上層にはⅢ-1期新～2期にかけての土師器杯・台付杯・甕・甌、須恵器甕、灰軸陶器椀、無軸陶器片、土鍾が少量出土している。

**SD5825(83-84-1次)** 第83次調査区から第84-1次調査区にかけて東西にのびる溝で、幅0.7～1.4m、検出した延長は約31mで、緩やかに蛇行しながら、西から東に流下し、西加座南区画の区画内南北道路の西側溝につながる。Ⅲ-2期以降の土師器杯・皿・高杯・甕・甌、ロクロ土師器杯・椀・小型杯・小皿、須恵器杯・甕、灰軸陶器椀、緑軸陶器片のほか陶器椀(山茶椀)が多数出土している。

**SD5837(83次)** 第83次調査区の南西隅で検出した、幅1.0m前後、検出延長約19mのやや湾曲した東西溝で、東端でいったん途切れるものの、SD5844などの南北溝につながるとみられる。Ⅲ-2期～3期を中心とした時期の土師器杯・皿・台付椀、黒色土器A類片、ロクロ土師器小皿、須恵器杯・甕・甕、灰軸陶器椀、陶器椀(山茶椀)・皿(山皿)が少量出土している。

**SK5839(83次)** 第83次調査区の南西隅付近で検出した、東西約1.2m、南北0.7m以上、深さ約0.2mの楕円形とみられる土坑である。Ⅲ-2期以降の土師器杯・皿・甕、陶器鉢、緑軸陶器片が少量出土している。

**SD5871(84-1次)** 第84-1次調査区の北端近くで検出した、幅約0.5m、検出延長約0.9mの短い東西溝である。Ⅲ期～Ⅳ期にかけての土師器杯・甕、ロクロ土師器小型杯、陶器杯、圜器甕、施軸陶器が少量出土している。

**S K5873(84-1次)** 第84-1次調査区の北東隅で検出した、東西約1.3m、南北約1.0m、深さ約0.25mの楕円形の土坑である。Ⅲ期～Ⅳ期にかけての土師器甕・鍋、陶器片が少量出土している。

**S D5874(84-1次)** 第84-1次調査区の東半で検出した、幅0.6～1.2m、検出延長約37.5mの南北溝で、南端で東に直角に折れて調査区外に続く。おおむね北から南流下にする溝である。出土遺物はⅡ期～Ⅳ期にかけて幅広い時期の土器類が少量出土している。

**S D5875(84-1次)** 第84-1次調査区の東端で検出した、幅約0.5～0.7m、検出延長約28mの南北溝である。南端では緩やかにカーブして、調査区の東側に伸びている。出土遺物はⅡ期～Ⅳ期にかけて幅広い時期の土器類が少量出土している。

**S D5882(84-1次)** 第84-1次調査区の東端で検出した幅約0.8m、検出延長約7.3mの南北溝である。Ⅲ～3期～Ⅳ期にかけての土師器杯・皿、ロクロ土師器杯・台付杯などが少量出土している。

**S D5883～5886(84-1次)** 第84-1次調査区の中央南寄りで検出した、幅約0.5～0.7mの東西溝で、西はS E 5880をはさんでSD5825に、東はS D 5874やS D 5870といった南北溝に接続している。いずれの溝からもⅡ～3期～Ⅲ～3期頃にかけての土師器、ロクロ土師器、灰軸陶器、陶器碗(山茶碗)が少量出土している。

**S K5887(84-1次)** 第84-1次調査区の東端の南寄りで検出した、東西約1.9m、南北約1.5m、深さ約0.4mの不整楕円形の土坑である。Ⅲ～2期以降のものともみられる土師器杯、ロクロ土師器台付杯、陶器碗(山茶碗)が少量出土している。

**S K5890b(84-1次)** 第84-1次調査区の南西部で検出した、一辺約2.5m、深さ約0.2mの方形土坑である。遺構全体で整理箱2箱分の土器が出土している。そのうち上層遺物とみられるⅢ～2期の一群をS B 5890bとして分離した。Ⅲ～2期の土師器杯・甕、ロクロ土師器杯・台付杯・台付小皿・器筈、灰軸陶器碗などが少量出土している。

**S K5898(84-1次)** 第84-1次調査区の南端近くで検出した、径約1.8m、深さ約0.4mの円形の土坑である。Ⅲ～2期頃の土師器台付杯・皿・小皿・甕、黒色土器片、ロクロ土師器杯・台付杯・碗・小皿、灰軸陶器碗、陶器碗(山茶碗)、白磁片が出土している。

**S K5932(84-2次)** 第84-2次調査区の南西部で検出した、東西約4.6m、南北2.6m以上、深さ約0.1mの浅い方形土坑である。Ⅲ～1～2期にかけての土師器杯・碗・甕、須恵器片、灰軸陶器碗、志摩式製塩土器片が少量出土している。

**S K5935(84-2次)** 第84-2次調査区の南東隅で検出した東西約1.8m、南北1.3m以上、深さ約0.4mの楕円形とみられる土坑である。Ⅲ～1～2期にかけての土師器杯・皿・瓶・甕、ロクロ土師器杯・台付杯・台付碗・台付小皿、灰軸陶器碗、陶器碗(山茶碗)が整理箱2分の1箱分出土している。

**S K11652(13-8・9次)** 第13-8・9次調査区の北側東西トレンチの西端で検出した、東西3.5m以上、南北3.0m以上、深さ約0.6mの方形になるとみられる土坑である。Ⅲ～2～3期にかけての土師器杯・皿・台付杯・「て」の字口縁皿・甕、ロクロ土師器台付杯、須恵器杯・鉢・甕、灰軸陶器碗、陶器碗(山茶碗)などが整理箱で4箱分出土している。

**S K11658(13-8・9次)** 第13-8・9次調査区の南北トレンチのほぼ中央で検出した、東西約1.0m、南北約0.7m、深さ約0.1mの楕円形の土坑である。Ⅲ～2期とみられる土師器皿・「て」の字口縁皿、須恵器片が少量出土している。

**S K11668(83次)** 第83次調査区の南東隅で検出した、東西約1.1m、南北0.5m以上、深さ約0.1mの楕円形の土坑である。Ⅲ～3期以降の土師器杯・皿・甕、ロクロ土師器杯・小皿、白色土器片、須恵器鉢、陶器壺、灰軸陶器片、白磁片が出土している。

## (2)区画北西部の遺構

**S D6001(86次)** 第86次調査区の北辺のS D 6001の北側で検出した、幅1.5m以上、深さ約0.4mの東西溝である。平安時代後期における西加座南区画北辺道路の南側溝とみられる。Ⅲ～3期～Ⅳ期にかけての土師器皿・甕、ロクロ

土師器小型杯、須恵器壺・甕、陶器碗（山茶碗）が整理箱の4分の1ほど出土している。

**S K6004(86次)** S D 6001の南で検出した。東西約1.7 m、南北約0.6 mの不整形土坑で、土坑というより小ピットの集合と考えられる。Ⅲ-2期以降の土師器杯・甕、陶器碗が少量出土している。

### (3)区画東部の遺構

#### 1)掘立柱建物

**S B8451(133次)** 第133次調査区の北部で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.3 m前後の円形ないしは楕円形で、柱間は桁行1.8 m、桁行2.05 mである。柱穴からは土師器杯・皿・台付小皿・甕、須恵器甕、灰軸陶器碗が出土しており、Ⅲ-1期新～2期の遺構と判断した。

**S B8457(133次)** 第133次調査区の南半で検出した東西棟で、5間×2間の身舎の東北南の三方向に1間分の扉を持ち、さらに南側には4間×2間分の孫廂あるいは縁がつくとみられる建物である。概報段階ではS B 8457の他にS B 8458・8460の遺構番号が付されていたが、概報でもこれは一体の建物である可能性が高いと指摘されており、相互の柱の並びが揃っていることから、本報告では一つの建物として扱う。柱掘形はいずれも0.2～0.3 mの円形で、柱間は身舎（旧S B 8458）で桁行1.95 m、梁行1.9 m、廂（旧S B 8457）で桁行2.0 m。桁行1.9 m、南の張り出し（旧S B 8560）で桁行1.85 m、桁行2.0 mである。北に約22 mのところにあるS B 8452とは棟方向を揃える。柱穴からは土師器杯・皿・碗・甕、ロクロ土師器小皿・台付小皿、須恵器有台盤、無軸陶器片、灰軸陶器碗が出土しており、Ⅲ-2期の遺構と判断した。

**S B8452(133次)** 第133次調査区の北部で検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.3～0.4 mの円形で、一部に径10 cm前後の柱痕跡が残る。柱間は桁行2.0 m、梁行2.1 mで、柱穴からは土師器皿・台付小皿・甕、黒色土器A類片、灰軸陶器三足盤、鉄製品が出土しており、Ⅲ-1～2期の遺構と判断した。

**S B8465(133次)** 第133次調査区の北東隅近くで検出した3間×2間とみられる東西棟で、柱掘形は径20 cm強の円形である。柱間は桁行・梁行とも1.9 mである。柱穴からは土師器小片、灰軸陶器片が出土したのみで、Ⅲ期のものと考えられる。

**S B8467(34・133次)** 第133次調査区の北部から第34次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱掘形は径0.2 mの円形で、柱間は桁行2.0 m、梁行2.05 mである。柱穴からは土師器台付杯などの小片がわずかに出土したのみで、Ⅲ期のものと考えられる。建物の規模と棟方向の共通性から、前後関係は明らかでないが、S B 8452・8467とは建て替えの関係にあるとみられる。

**S B8856(140次)** 第140次調査区の中央部西寄りで検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は径0.4 m前後の円形ないしは楕円形で、柱間は桁行1.9 m、梁行1.85 mである。柱穴からは土師器高杯・甕、ロクロ土師器台付杯・台付小皿、須恵器片が出土しており、Ⅲ-2期頃のものと判断した。

#### 2)土坑・溝

**S D1842(34・133次)** 第34次調査区と第133次調査区の北端付近を、緩やかカーブしながら通る東西溝である。流路の方向は調査区南端のS D 1447に近く、あるいはE期にまでさかのぼる可能性があるかもしれない。幅約0.4～0.8 mで、西から東に流下する。断面形はU字状を呈する。Ⅲ-3期以降の土師器杯・碗・皿・甕、ロクロ土師器台付皿、須恵器甕・玉縁口縁鉢、灰軸陶器碗・皿、緑軸陶器片、陶器碗（山茶碗）が出土している。

**S D1844・1849・1858・1859(34次)** 第34次調査区の中央を、やや湾曲しながら南北に貫く、幅約0.5～1.0 mの溝である。遺構番号は個別に付されているが、本来は連続したものとする。北から南に流下する溝だが、南端は他の溝などに接続せず途切れている。Ⅱ-3～Ⅲ-4期にかけての土師器杯・台付杯・甕、ロクロ土師器台付杯・台付小皿、須恵器円面甕、灰軸陶器碗・皿、陶器碗（山茶碗）が少量出土している。S D 1849からは緑軸陶器唾壺が出土している。

**S K8397(133次)** 第133次調査区の中央西端で検出した東西3.0 m以上、南北2.8 m以上、深さ約0.4 mの略円形土

坑で、Ⅱ-3～Ⅲ-2期の土器類が少量出土している。埋土下層から焼土が確認されている。

**SK8407(133次)** 第133次調査区の中央やや南寄りで検出した、東西約1.5m、南北約1.3m、深さ約0.4mの楕円形土坑である。Ⅲ-2期の土器類が少量出土している。

**SK9508(148次)** 第148次調査区の東西トレンチ中央で検出した東西約1.5mの不整形土坑である。Ⅲ-2期の土師器杯・皿、ロクロ土師器碗・皿、陶器片や被熱した石が出土した。

**SK9509(148次)** 第148次調査の東西トレンチで検出した長径1.9m以上、短径1.0mの略楕円形の土坑である。Ⅲ-2期を中心とした土師器皿・甕、ロクロ土師器碗、灰釉陶器小碗、陶器片が少量出土した。

**SK9510(148次)** 第148次調査の東西トレンチで検出した、長径約2.0mの不整形土坑である。Ⅲ-2期のものを中心に土師器碗・皿・高杯・甕、ロクロ土師器皿、灰釉陶器皿、陶器碗(山茶碗)・鉢が少量出土した。

**SK11662(34次)** 第34次調査区の北部で検出した、長径約1.2m、深さ約0.4mの略楕円形の土坑である。Ⅲ-2～3期の土師器杯・台付杯・台付皿・碗・甕、黒色土器A類碗、須恵器壺・甕、灰釉陶器碗、無釉陶器碗(山茶碗)が少量出土している。

**SK11670(162-3次)** 第162-3次調査区の東部で検出した、東西2.2m以上、南北1.0m以上、深さ約30mの不整形土坑である。2基の土坑が重複している可能性がある。土師器杯・皿・台付杯、ロクロ土師器杯・皿・小皿・台付杯・台付小皿、灰釉陶器小碗など、供膳具を中心にⅢ-2期古頃のまとまった資料である。

遺構番号	調査回数	ビット番号		時期	西加南南 画像	規模		柱間寸法 (m)	主軸 方位 N/E/S/W	備考	
		番(1はグリッド番号)				間(m)×間(m)					
SR100	21-2	(0)P1/(7)P2/(0)P3-5		Ⅱ-2~3	C期5		(4.1)×(-)	桁行 1.9	南北	N3° E	傾の可能性もあり
SR101	21-2	(0)P1/(0)P4		Ⅱ-25	B期5		(3.5.4)×(-)	桁行 1.9	東西	E1° N	
SR102	21-2	(0)P4/(0)P1		Ⅱ-3	C期~0期		-(-)×2(3.6)	桁行 1.8	東西	E2° S	
SR104	21-2	(1)P6-7/(2)P5/(3)P4-9		Ⅱ-3中新	D期		(4.7.0)×2(3.6)	桁行 1.95	東西	E2° S	
SR105	21-2	(3)P3-7/11-12/(4)P2		Ⅱ-3古	B期		(3)×2(4.4)	桁行 2.2	東西	E2° N	
SR100	29(06F1-A)	(7)P1/(0)P3-7/(0)P3-6		Ⅱ-35+	B期		(5.0.75)×(-)	桁行 1.95	南北	N4° W	Ⅱ-35+
SR101	29(06F1-A)	(0)P4/(0)P1-2-7		Ⅱ-3新~	B期		(3.5.7)×(-)	桁行 1.9	不明	90°	
SR135	29(06F1-F)・34	29次: (2)P1-2/(3)P1-3/(4)1+5-10 34次: (C1)P2/(C3)P1-2/(0)P2/(0)P2-3/(0)P1/(0)P1-3+4		Ⅱ-3中新	C期		(3)×3(3.3)	桁行 2.5	東西	E3° N	
SR136	17-3- 29(06F1-F)・34	29次: (0)P2/(0)P7 34次: (0)P2/(0)P2-3		Ⅱ-1中新	A期		(3)×2(3.5)	桁行 2.5	東西	E3° N	
SR137	17-3- 29(06F1-F)・34	29次: (0)P7/(0)P13 34次: (0)P2/(0)P3/(0)P1/(0)P1/(0)P1		Ⅱ-1古中	A期		(4.3.0)×2(4.8)	桁行 2.0	東西	E3° N	SR138より新
SR138	29(06F1-F)・34	29次: (0)P4/(0)P4-8 34次: (0)P4/(0)P1-5		Ⅱ-1古中	B期		(4(1.5)×2(4.2)	桁行 2.1	東西	E4° N	
SR139	34	(0)P1/(0)P2/(0)P3/(0)P2/(0)P1		Ⅱ-1	B期		(3.0.1)×2(3.0)	桁行 2.7	東西	E2° N	
SR140	29(06F1-F)・ 34-53-15	29次: (0)P1/(0)P1-2+4 34次: (1)P1/(2)P1 53-15次: (A5)P5-10/(A6)P5-7/(0)P8-9/(A6)P5-7		Ⅱ-1新~2	B期		(2)×2(3.0)	桁行 2.5	東西	E3° N	SR142より新
SR141	29(06F1-F)・ 34-53-15	29次: (0)P2/(0)P2-7 53-15次: (A5)P1-3/(A6)P4-6		Ⅱ-3中新	C期		(2)×2(3.0)	桁行 2.4	東西	E3° N	
SR142	29(06F1-F)・ 34-53-15	29次: (0)P2/(0)P2-9 34次: (1)P2 53-15次: (A5)P2+1/(1)P2 P2+12/(0)P6		Ⅱ-3中新	C期		(2)×2(4.2)	桁行 2.1	東西	E3° N	
SR146	29(06F1-F)・ 34-53-15	29次: (0)P6/(0)P1+6 53-15次: (0)P1+10 34次: (1)P1+3		Ⅱ-3新~4	D期		(2)×2(3.8)	桁行 2.0	東西	E2° N	
SR180	34	(0)P2/(0)P4		Ⅱ-1新~2	B期		(3.7.3)×2(3.5)	桁行 2.5	東西	E3° N	
SR183	34-133	34次: (0)P2-3 133次: (1)P1/(1)P3		Ⅱ-2	B期		(3.6.3)×2(1)	桁行 2.1	東西	N1° W	
SR184	34	(0)P3/(0)P3/(0)P1-5/(0)P7-9		Ⅱ-3中~4	C期		(3.5.1)×2(3.8)	桁行 1.7	南北	N2° E	SR184より新
SR186	34	(0)P2-5/(0)P2+6/(1)P2/(0)P4-5-8		Ⅱ-3中~新	C期		(3.6.0)×2(3.6)	桁行 2.0	南北	N2° W	SR184より古
SR188	34-133	34次: (0)P5-7+9/(0)P7-9 133次: T10/(2)P7/(2)P8/(2)P5/(2)P20		Ⅱ-2~3	B期		(3.6.1)×2(3.8)	桁行 2.03	東西	N1° W	
SR183	34-133	34次: (0)P2/(0)P2-3 133次: T10/(2)P3/(2)P5-5/(2)P5+12		Ⅱ-1古中	A期		(5.12.0)×2(4.8)	桁行 2.4	東西	N3° W	
SR184	34-133	34次: (0)P5/(0)P4+7-8 133次: T9/(2)P1-5/(2)P5-6/(2)P1+7/(2)P3+4-5+13		Ⅱ-1中~	B期		(3.6.2)×2(4.0)	桁行 2.1	東西	N2° W	
SR180	34-133	34次: (0)P6-7/(0)P1-3/(0)P6/(0)P3-5+6 133次: T10/(2)P3/(2)P5-5/(2)P5+11/(1)P3/(2)P2/(1)P3		Ⅱ-1古中	A期		(5.12.2)×3(7.4)	桁行 2.44	東西	N4° W	南画像出間(2.4 m)
SR186	34	(1)P3/(1)P4/(1)P2/(1)P4/(0)P1/(0)P32		Ⅱ-2	B期		(3.5.4)×2(3.6)	桁行 1.8	南北	N3° W	SR187より新
SR186	34-133	34次: (0)P4/(0)P1-7 133次: T11/(4)P2/(5)P2/(4)P4-5+6-7/(4)P6-7-21		Ⅱ-1中~	B期		(3.5.0)×2(3.8)	桁行 1.93	東西	N2° W	
SR185	34-53-15	53-15次: (0)P1-4/(0)P1-4/(0)P3/(0)P3		Ⅱ-35+	C期~0期		(4.0.5)×2(4.6)	桁行 2.4	東西	E2° N	
SR186	34	(0)P5-6/(0)P7/(0)P5/(0)P1-2		Ⅱ-4	D期		(3.5.7)×2(3.8)	桁行 1.9	南北	E3° N	SR187より新
SR187	34	(0)P4/(0)P3-6/(0)P6		Ⅱ-1新~2	B期		(3.0.1)×2(3.2)	桁行 2.7	南北	E3° N	34次で西四隅門とす
SR189	34	(0)P1/(0)P3-5/(0)P3-5/(0)P5/(0)P3-4/(0)P3		Ⅱ-1~2	B期		(3.6.0)×2(3.6)	桁行 2.0	東西	E2° N	SR186より新
SR170	34-133	34次: (0)P2/(0)P4/(0)P2-6+8 133次: T11/(5)P3/(0)P4/(0)P4+10/(0)P5P2		Ⅱ-1~	A期		(5.12.2)×2(4.9)	桁行 2.44	東西	N3° W	SR182より古
SR171	34	(0)P3-6/(0)P1-2+6/(0)P1/(0)P2+4		Ⅱ-1~3	C期5+		(3.5.4)×2(3.8)	桁行 1.8	南北	N2° W	SR170より新
SR172	34-133	34次: (0)P1+4/(0)P1 133次: T11/(5)P1/(0)P1/(0)P3/(0)P6-9/(0)P1-18/(0)P5-6+12		Ⅱ-1~3	C期5+		(5.08.3)×2(3.4)	桁行 1.7	東西	90°	SR182より新
SR171	53-15- 58-1	53-15次: (A4)P3/(0)P6-7/(C4)P7 58-12次: (0)P1-4+10/(C3)P10-11+13		Ⅱ-2~	B期		(3.6.3)×2(4.5)	桁行 2.1	南北	N3° W	
SR172	53-15- 58-1	53-15次: (0)P1-5/(C4)P1/(0)P7 58-12次: (0)P5-8/(C3)P5-9		Ⅱ-3	C期		(3.6.0)×2(4.4)	桁行 2.2	南北	N3° W	

第5表 西加南南区画遺構一覧(獨立柱建物1)



遺構番号	調査回数	ビット番号		時期	西加座南 側面	規模 間(a)×間(b)	柱間寸法 (a)×(b)	主軸 方位 N基準	備考
		( )はブリード番号							
SR5853	83	(7)P8/(7)P4-6/(7)P4		Ⅱ-2~3	Ⅷ期~C期	3(5.7)×(-)	行方 —	南北	N4° W
SR5876	84-1	(4)C1+2+5/(4)P2-6/P5廊下+P6柱 礎		Ⅲ-1~	E期	3(5.4)×2(3.8)	行方 1.8 東行 1.95	東西	E2° S
SR5877	84-1	(3)P3/(3)P1+2/(4)P4柱礎/(4)P1+5/(5)P1/(5)P1-2		Ⅲ-4~	E期	5(9.7)×2(3.9)	行方 2.0 東行 1.95	東西	E5° S
SR5900	84-1	(3)P7-8/(3)P6+11/(4)P9-9+14-15/(4)P4+5-9/(5)P3-4/(3)P1-13		Ⅲ-4~ Ⅲ-1	E期	6(11.4)×2(3.9)	行方 1.9 東行 1.95	東西	E5° S
SR5901	84-1	(4)P18-20-31+35-36/(4)P13-27-28/(5)P-5+4+5+10+11+12		Ⅲ-3	D期	(3) (-)×2(3.8)	行方 1.9 東行 1.9	南北	N6° W
SR5902	84-1	(3)P4+15/(3)P2/(4)P2+35/(3)P6/(5)P14		Ⅲ-2~	E期	(5) (-)×2(3.6)	行方 1.8 東行 1.8	東西	E6° S
SR5903	84-1	(3)P1+66/(3)P14/(4)P27/(4)P26		Ⅲ-1~2	F期	(3) (-)×2(3.4)	行方 2.1 東行 2.7	東西	E2° W
SR5920	84-2	(4)C2+3+P2柱礎/(4)P15/(3)P2-3+5+6+7/(5)P3+19		Ⅲ-1~	Ⅷ期	5(12.0)×2(4.8)	行方 2.4 東行 2.4	東西	E1° N
SR5924	84-2-96	84-2次: (3)P2-4/(4)C15/(3)C8+14+19 96次: (3)P6-7/(3)P7-7柱礎/(3)P7+12		Ⅲ-2	Ⅷ期	(4) (-)×2(2.8)	行方 2.4 東行 2.4	東西	E1° N
SR5925	84-2	(3)C3+P3柱礎/(3)P1/(4)C16/(4)P7+10/(5)P15/(5)P1+24+34		Ⅲ-2~	C期	(5) (-)×2(5.0)	行方 2.4 東行 2.5	東西	E3° S
SR5926	84-2	(4)C2+3+P2柱礎/(4)P15/(3)P2-3+5+6+7/(5)P4+19		Ⅲ-3~	D期	(4) (-)×2(4.0)	行方 1.9 東行 2.0	東西	E3° S
SR5930	84-2	(5)C8/(3)P2+9-23/(3)P3/(3)P3		Ⅲ-2&	F期	(2) (-)×2(4.2)	行方 2.1 東行 2.0	東西小	E0°
SR5931	84-2	(3)P11+14+15/(5)P2		Ⅲ-2&	F期	(2) (-)×2(4.0)	行方 2.0 東行 2.0	東西小	E0°
SR6000	86	(7)P3柱礎/(3)P9/(3)P1/(3)P8+9		Ⅲ-1~	A期	4(9.6)×2(3.2)	行方 2.4 東行 2.6	東西	E4° N
SR6010	86	(3)P1/(3)P2+4+5+P3柱礎/(3)P2/(3)P5+6+P5柱礎/(3)P1+P1柱礎		Ⅲ-3占中	D期	(5) (-)×2(4.6)	行方 2.3 東行 2.3	東西	E4° N
SR6016	86	(3)P6/(3)P9-12+14/(3)P2/(17)P8+9柱礎		Ⅲ-1新~2	A期~移転期	3(5.7)×2(3.9)	行方 1.9 東行 1.85	東西	E3° N
SR6019	86	(15)P1/(16)P2-6/(15)P2/(16)P3-20		Ⅲ-3占中	C期	3(5.7)×2(-)	行方 1.9 東行 1.9	南北	N2° W
SR6020	86	(3)P2/(3)P6-7/(3)P1+1柱礎/(3)P4+10+P10柱礎/(3)P1+3/(14)P4+7+11+P2柱礎/(15)P2/(16)P4		Ⅲ-2~3	D期	5(12.0)×2(4.8)	行方 2.4 東行 2.4	東西	E4° N
SR6021	86	(14)P5+10+P5柱礎/(15)P10柱礎/(15)P3/(17)P5/(14)P3+7/(15)P4+P4柱礎/(3)P6/(17)P1		Ⅲ-2	D期	5(12.0)×2(4.8)	行方 2.5 東行 2.4	東西	E4° N
SR6022	86	(13)P1柱礎/(19)P2柱礎/(3)P4+5/(19)P5柱礎		Ⅲ-3~	D期	(2) (-)×2(3.6)	行方 1.7 東行 1.85	東西	E2° N
SR6023	86	(3)P13柱礎+P15柱礎/(3)P11柱礎/(3)P16		Ⅲ-3新~	C期	(2) (-)×2(4.8)	行方 2.4 東行 2.4	東西	E3° N
SR6024	86	(3)P1+P11柱礎/(3)P3+P3柱礎+P7柱礎/(3)P3+4		Ⅲ-3~	C期	(3) (-)×2(3.7)	行方 1.8 東行 1.85	東西	E2° N
SR6025	86	(3)P2/(3)P1+P5柱礎		Ⅲ-3新~	D期	(1) (-)×2(4.0)	行方 — 東行 2.0	東西	E2° N
SR6026	86	(3)P13+17+18/(3)P6+8+11+P9柱礎/(3)P4+5+P4柱礎+P5柱礎		Ⅲ-4~	D期	3(5.4)×2(3.4)	行方 1.8 東行 1.7	—	90°
SR6028	86	(15)P5/(16)P4+17+19+21+P4柱礎/(15)P3/(16)P1+13		Ⅲ-新~	A期~移転期	(3) (-)×2(3.8)	行方 1.9 東行 2.0	東西	E3° N
SR6029	86	(3)P3+5-9+14+17/(17)P7+8-9		Ⅲ-4	D期	3(6.0)×2(3.4)	行方 2.0 東行 1.5~1.9	南北	N3° W
SR6036	86	(1)P3/(3)P1+4+5+8+P15柱礎/(3)P4+5		Ⅲ-4	C期	(3) (-)×2(3.8)	行方 2.0 東行 1.9	東西	E3° N
SR6037	86	(3)P3+4/(3)P4+5+P6柱礎/(3)P3+7/(3)P3+4		Ⅲ-1~2	D期	(3) (-)×2(4.8)	行方 2.5 東行 2.4	東西	E4° N
SR6038	86	(7)P5/(3)P6-7		Ⅲ-4~ Ⅲ-1	D期	3(4.5)×2(3.5)	行方 1.5 東行 —	東西	E1° N
SR6040	86	(3)P3/(3)P5+10+P10柱礎/(3)P9		Ⅲ-1&	A期	4(9.6)×2(5.2)	行方 2.4 東行 2.6	東西	E4° N
SR6051	86	(3)P3/(3)P4		Ⅲ-1新~2	C期	(4) (-)×2(4.6)	行方 2.2 東行 2.3	—	E0°
SR6052	86	(3)P12/(3)P8		Ⅲ-2~3	C期	(4) (-)×2(4.8)	行方 2.0 東行 1.9	—	E0°
SR6055	86	(3)P2/(3)P2/(3)P2/(3)P2+5/(3)P4+5/(3)P2+10		Ⅲ-1~2	A期	(4) (-)×3(4.8)	行方 2.2 東行 2.4	東西	E3° N
SR6057	86	(3)P1+4/(3)P1+7+P1柱礎/(3)P1+14+P1柱礎/(3)P1+12+P1柱礎		Ⅲ-4	D期	3(6.0)×2(3.9)	行方 2.0 東行 1.95	東西	E2° S
SR6059	86	(3)P9+10/(3)P3+13		Ⅲ-3新~4	D期	(2) (-)×2(3.8)	行方 2.4 東行 1.9	東西	E7° S
SR6063	86	(3)P4/(3)P6/(3)P1/(12)P6/(13)P5		Ⅲ-2	A期~移転期	3(6.4)×2(3.8)	行方 2.2 東行 1.9	東西	E6° N

第7表 西加座南区画遺構一覧(掘立柱建物3)



遺構番号	調査回数	ビット番号 ※(1)2デジット番号	時期	西加座南 西側	規模 間(a)×間(b)	柱間寸法 (a)	方位 N基準	備考
SB667	86	(J2)P4	Ⅱ-4	D期	1(-)×2(3.6)	桁行 1.8	—	E0'
SB668	86	(J2)P2/(J3)P7-9	Ⅱ-2	D期	(2(-)×2(3.8)	桁行 1.9	東西	E2' N
SB669	86	(J2)P3/(J3)P8/(K2)P7/(K3)P10- 24-25-P10柱版	Ⅱ-4	D期	(2(-)×2(3.6)	桁行 1.8	東西	E3' S
SB674	86	(K3)P11/(K2)P4	Ⅱ-3	C期	(4(-)×2(4.4)	桁行 2.4	—	E4' N
SB675	86	(K2)P1-P1柱版/(K3)P6	Ⅱ-3前~4	D期	(2(-)×1(1(-)	桁行 2.0	—	E3' S
SB676	86	(K3)P13/(K4)P18-21	Ⅱ-3	C期	(1(-)×2(3.8)	桁行 1.9	南北	N3' E
SB677	86	(K4)P1/(L3)P1	Ⅱ-4	D期	(1(-)×2(3.8)	桁行 1.9	南北	N2' E
SB679	86	(J3)P3-P3柱版/(J6)P12-13-14-15- P14柱版/(K3)P1/(K6)P3-10-P3柱版	Ⅱ-3前~4	C期	3(6.0)×2(-)	桁行 2.0	—	90'
SB680	86	(J6)P4	Ⅱ-3前	C期	(3(-)×2(4.4)	桁行 2.4	東西	E2' N
SB789	120	(K5)P2-6/(K6)P3/(K7)P8/(K8)P11/ (L6)P6-7/(J7)P9-12/(L3)P6	Ⅱ-3中	C期	5(9.5)×2(3.9)	桁行 1.9	東西	E0' W
SB791	120	(L5)P1-2/(L6)P1-2+4-5-14/(L7) P5-14/(K6)P9-12-13/(K6)P2-3-11/ (K7)P3-15-17	Ⅱ-4	D期	3(5.7)×2(4.4)	桁行 1.9	南北	90' S
SB792	120	(M5)P2-7/(M6)P5-6-30	Ⅱ-3中前	D期	(2(-)×2(4.2)	桁行 2.1	南北	90' S
SB793	120	(M6)P20-31	Ⅱ-3中	C期	(2(-)×2(4.2)	桁行 1.9	南北	N5' E
SB794	120	(M6)P10-16	Ⅱ-3中	C期	(2(-)×2(4.2)	桁行 2.0	南北	N3' E
SB795	120	(L7)P1-2+3-18/(L8)P1-2+4+5-11/ (K7)P5-12/(M6)P1+24-25	Ⅱ-2~3古	D期	3(5.7)×2(3.8)	桁行 1.9	東西	E2' S
SB796	120	(J7)P1-2/(J8)P1/(K7)P4+7-10/ (K8)P2-9	Ⅱ-2~3古	D期	2(4.2)×2(3.6)	桁行 1.1	東西	E0' W
SB797	120	(M6)P4-5+24-29/(M7)P1-2+4+5-19/ (M8)P4-8	Ⅱ-4	C期	(2(-)×2(4.2)	桁行 2.1	南北	N2' W
SB798	120	(K6)P7/(K6)P7-9-10/(K8)P1-12/ (L6)P4-5+8-10-11/(L10)P3-7+11	Ⅱ-1新~2	D期	3(5.7)×2(4.2)	桁行 1.9	南北	90' W
SB799	120	(J10)P1/(J11)P2-3/(K10)P3-4+6/ (L11)P2-3+4-6	Ⅱ-2	B期	(2(-)×2(4.2)	桁行 2.1	東西	E2' N
SB800	120	(L10)P7/(L9)P10-12-13/(L10)P8/ (L11)P1-8/(M6)P9-9-11/(M10)P8/ (M11)P3-4	Ⅱ-1新~2	A期	5(12.0)×2(4.8)	桁行 2.4	東西	E2' N
SB801	120	(M6)P7/(L9)P7-14-18	Ⅱ-4	C期	3(6.0)×2(3.6)	桁行 1.8	東西	E5' N
SB802	120	(L8)P8-9-13/(L9)P16-17-20/(M6) P3-4-15-17-28/(M6)P2-5/(M10)P2- 3+9-10	Ⅱ-4	D期	5(9.0)×2(3.8)	桁行 1.8	東西	E0' W
SB803	120	(L10)P12/(M6)P20/(M10)P5-6	Ⅱ-2	B期	3(5.7)×2(4.2)	桁行 1.9	東西	E2' N
SB843	133	(I22)P4/(I23)P1/(g22)P3-6/ (g23)P9-12/(g22)P3-4+6/(g23)P7	Ⅲ-1新~2中	F期	5(9.9)×2(4.1)	桁行 1.78	東西	E4' S
SB842	133	(I23)P14/(g22)P8-14/(g23)P8-15- 24/(g22)P5-8/(g23)P1-5/(I22)P 2+6/(I23)P2	Ⅲ-1~2	F期	5(10.0)×2(4.2)	桁行 2.0	東西	E4' S
SB843	133	(I22)P13/(I23)P7/(g22)P12-13/ (g23)P14-21/(g22)P6-8/(g23)P3- 6+8	Ⅲ-2	E期	5(9.2)×2(3.9)	桁行 1.84	東西	E1' N
SB844	133	(I1)P2/(g4)P2-3/(g2)P5-9	Ⅲ-2~3	D期	3(6.7)×2(4.1)	桁行 2.23	南北	90'
SB845	34-133	(I4)P3/(g4)P2-2	Ⅲ-1	E期	5(9.4)×2(4.1)	桁行 1.88	東西	E3' N
SB846	133	(g4)P1+4-11/(g4)P3+7-10	Ⅲ-1	E期	3(5.4)×2(3.7)	桁行 1.8	南北	N1' W
SB847	133	(I4)P1/(g4)P8-15/(g5)P12-14+17/ I4)P5-13/(g5)P6-19/(I4)P1-3/ (I5)P6 (SB848: (g4)P12/(g5) P18/(g4)P2-9-14/(g5)P1-5+8 (I5)P8-60/(g4)P14/(g5)P14-19+20/ I4)P18/(g5)P13/(I5)P9	Ⅲ-2	F期	【主期】(11.0× 3(A.8)	桁行 1.97	東西	E3' S
SB849	133	(g4)P14/(g5)P4-19+20/(g4)P18/ I5)P12/(I5)P9	Ⅲ-4 Ⅲ-1	D期	3(6.3)×2(3.6)	桁行 1.8	東西	E2' N
SB841	133	(I5)P2-5+12/(I6)P15/(I3)P1+8+7- 10/(I6)P3-4	Ⅲ-1新~2	A期~移転期	3(5.2)×2(3.6)	桁行 1.8	東西	E4' N
SB842	133	(g6)P3/(g5)P5-7/(g6)P1+4/(I5) P3-7-10/(I6)P1+5	Ⅲ-1新~2	A期	3(6.7)×2(4.6)	桁行 2.23	東西	E5' N
SB843	133	(h7)P1/(h8)P1/(I7)P1/(J7)P4/ (J8)P1	Ⅲ-2	B期	3(7.6)×2(5.2)	桁行 2.53	南北	90' W
SB845	133	(h2)P2-3/(h2)P1-2/(I22)P1	Ⅲ	F期	3(5.6)×2(3.8)	桁行 1.87	南北	N4' E

第8表 西加座南区画遺構一覧(掘立柱建物4)

遺構番号	調査回数	ビット番号		時期	西加座南 側期	規模 間(m)×間(m)	柱間寸法 (m)	方位 N基準	備考
		番( )はアソビ番号							
SB846	133	(f22)P12		Ⅲ-2	E期	3(5.9)×2(3.9)	桁行 1.97 梁行 1.95	南北	N0°
SB847	133	(f22)P2/(f23)P5/(g22)P9-16/ (g23)P6-10-26		Ⅲ	F期	4(7.9)×2(4.1)	桁行 1.975 梁行 2.05	東西	E4° S
SB856	136	(s8)P11/(s9)P27/(s0)P5-9/(s0) P1-13/(s0)P6/(s0)P10-13/(s0) P10-12		Ⅲ-3	B期	5(12.0)×2(4.6)	桁行 2.42 梁行 2.3	東西	E1° N
SB857	136	(s0)P12/(s0)P4-8/(s0)P2-3/(s0) P5-6/(s0)P9-8/(s0)P10-9/(s0)P2-5		Ⅲ-3	C期	5(11.2)×2(4.5)	桁行 2.24 梁行 2.25	東西	E3° N
SB858	136	(s9)P7-24/(s0)P7/(s0)P4/(s0) P10-14		Ⅲ-3	B期	5(10.5)×2(4.4)	桁行 2.1 梁行 2.2	東西	E2° N
SB859	136	(s0)P33/(s10)P19/(s10)P15/(s0) P6/(s0)P4-12-14/(s10)P26/(s0) P2-7/(s0)P9		Ⅲ-1	A期	6(16.2)×2(3.8)	桁行 2.7 梁行 1.9	東西	E6° N
SB850	136	(s0)P28-30/(s10)P14-17-20/(s0) P5-7/(s0)P7-13/(s10)P14-18- 19/(s0)P4-6/(s10)P1-11		Ⅲ-3	C期	5(12.3)×3(7.7)	桁行 2.46 梁行 2.4	東西	N0°
SB851	136	(s0)P6/(s0)P7/(s10)P1-11/(s0) P1-6/(s10)P6-27/(s0)P12/(s10)P17		Ⅲ-3	C期	4(9.8)×2(4.8)	桁行 2.45 梁行 2.4	東西	N0°
SB852	136	(s10)P2-9/(s0)P9-10/(s10)P9-10- 13/(s0)P4-8-14/(s10)P12		Ⅲ-4	B期	5(9.8)×2(4.0)	桁行 1.8 梁行 2.0	東西	N0°
SB853	136	(s0)P14-27/(s10)P8-11-22/(s0) P3/(s10)P5/(s0)P9-10/(s10)P11/ (s0)P5/(s10)P6-7		Ⅲ-1	A期	5(12.0)×2(4.8)	桁行 2.4 梁行 2.4	東西	E4° N
SB854	120	-		Ⅲ-1a	A期	5(12.1)×2(4.9)	桁行 2.42 梁行 2.45	東西	E4° N
SBS45	136	(s10)P5/(s10)P12/(s10)P9-16/ (s10)P10		Ⅲ-4	D期	5(12.3)	桁行 2.46 梁行	東西	E1° N
SB855	140	(s11)P1+2/(s12)P2/(s12)P9/(s13) P3-4		Ⅲ-1	A期	5(10.7)×(-)(-)	桁行 2.14 梁行	南北	N1° W
SB854	140	(s12)P2/(s13)P3/(s14)P5-8/(s12) P1-5/(s14)P3-7		Ⅲ-1	A期	4(10.4)×2(3.9)	桁行 2.6 梁行 2.95	南北	N0°
SB855	140	(s13)P6-9/(s13)P7/(s14)P2-3/ (s13)P1-5/(s14)P7-10/(s12)P3-4/ (s13)P2/(s14)P4-6		Ⅲ-3	B期	5(12.1)×2(3.0)	桁行 2.42 梁行 2.5	東西	E3° N
SB856	140	(s15)P1/(s15)P2-6-7/(s16)P4-7-8		Ⅲ-2	F期	3(5.6)×2(3.7)	桁行 1.87 梁行 1.85	南北	N1° W
SB857	140	(s16)P9/(s16)P3/(s16)P1-2-6/ (s16)P2-11/(s16)P3-7/(s17)P10		Ⅲ	D期a	5(11.8)×3(7.8)	桁行 2.36 梁行 2.6	東西	E4° N
SB858	140	(s16)P1-4/(s16)P6/(s17)P6/(s17) P5/(s16)P8-9		Ⅲ-3	C期	3(8.6)×2(4.5)	桁行 2.87 梁行 2.25	南北	N1° W
SB859	140	(s17)P6-7-10/(s16)P2-4/(s17)P1- 7/(s16)P5-7/(s17)P2-4		Ⅲ-1	A期	5(10.7)×2(3.0)	桁行 2.14 梁行 2.5	東西	E3° N
SB860	140	(s16)P5/(s17)P2-4/(s17)P4/(s17) P1-11		Ⅲ-1	A期	5(10.8)×2(4.4)	桁行 2.16 梁行 2.3	東西	E3° N
SB861	140	(s18)P1-6-13/(s19)P1-3/(s18)P2- 5/(s19)P2/(s19)P1-7-11/(s19)P4- 6		Ⅲ-3~4	D期	5(11.2)×2(4.0)	桁行 2.24 梁行 2.0	東西	E3° N
SB862	140	(s18)P5-8-9/(s19)P9-14/(s18)P1/ (s19)P8/(s18)P2-6/(s19)P2-5		Ⅲ-3	B期	5(11.0)×2(3.0)	桁行 2.2 梁行 2.5	東西	E4° N
SB863	140	(s19)P3/(s19)P2-6-7/(s19)P1-7		Ⅲ	E期a	5(10.0)×(-)(-)	桁行 2.0 梁行	東西	E3° N

第9表 西加座南面遺構一覧(掘立柱建物5)

遺構名	調査回数	調査時番号	出土土器の時期	西加座 側期	出土遺物	備考
SBS45	140	(S10)X11,y11	Ⅲ-1古・中	A期	土師器:杯A・杯c・皿A・壺A・餅c・甕・異形筒 形土器/須恵器:台付蓋・磁石/土師	SB856より新
S1901	148	(S11)q0土坑11	Ⅲ-1	A期	土師器:皿A/須恵器:台付蓋	
S1905	148	(S11)q0土坑15	Ⅲ-1	A期	土師器:皿A/須恵器:蓋	

第10表 西加座南面遺構一覧(竪穴建物)



遺構番号	種別	調査次数	調査時番号	時期	西加座南西側	出土遺物	備考
SK2809	土坑	47 (46AF-E)-34	47次: (4)SK10	Ⅱ-1	A期	土師器: 杯A・杯G・皿A・高杯・甕A・甕片/須恵器: 皿/土師	
SK2801	土坑	47 (46AF-E)-34	47次: (4)SK8	Ⅱ-1~2	A期	土師器: 小片・皿E/須恵器: 甕片	
SK2802	土坑	47 (46AF-E)-34	47次: (4)SK7	Ⅱ-2	B期	土師器: 碗A・碗B・皿A・高杯・甕A・甕片/平片/須恵器: 杯B・高杯・甕片	溝か
SK2805	土坑	47 (46AF-E)-34	47次: (5)PA/(6)SK1	Ⅱ-1~2	A期	土師器: 杯A・碗A・皿A・甕A/黒色土器: A類小片/須恵器: 杯A・付付蓋	
SD2806	溝	47 (46AF-E)-133	47次: (3)SD6/(6)SD8	Ⅱ-1~	A期	土師器: 杯G・碗A・皿A・高杯・甕/須恵器: 杯A・皿・甕・短須恵	区東東辺道路西側
SK4257	土坑	58-1	(6)1SK2	Ⅱ-2新	C期	土師器: 杯A・高杯・甕/須恵器: 甕/灰釉陶器: 碗・甕	
SK4258	土坑	58-1	(6)1SK3	Ⅱ-3	C期	土師器: 杯A・皿A・甕A・調子・甕/須恵器: 小片/灰釉陶器: 碗	
SK4259	土坑	58-1	(C)1SK1	Ⅱ-3古中	C期	土師器: 杯A・碗A・皿A・高杯・甕A・甕/須恵器: 甕/灰釉陶器: 碗・皿・緑釉陶器: 小片	
SK4262	土坑	58-1	(6)3SK1	Ⅱ-3古	B期	土師器: 杯A・皿A・皿A・高杯・甕A・調子/須恵器: 甕・甕/灰釉陶器: 皿/志摩式製瓦土器	
SK4263	土坑	58-1	(6)2SK1	Ⅲ	F期	土師器: 杯B・付付杯・甕/須恵器: 甕	
SK5762	土坑	83	(3A)SK1	Ⅱ-1~2古	A期	土師器: 杯A・皿A・皿A・高杯・甕A・甕A・甕A・黒色土器: A類杯/須恵器: 杯B・皿・口口・甕/志摩式製瓦土器/替瓦土器/平/襷瓦土器/「X」	
SK5763	土坑	83	(3A)SK4/(3B)SK3	Ⅱ	B~C期小	土師器: 杯A・皿A・甕A・黒色土器: 調子碗	
SK5764	土坑	83	(3B)SD6	Ⅱ-2~3	B期	土師器: 杯A・皿A・甕A・甕/須恵器: 小片	
SK5766	土坑	83	(4A)SD6	Ⅱ-3	C期	土師器: 杯A・皿A・甕A/灰釉陶器: 碗	
SK5769	土坑	83	(7B)SK2-U/(7C)SK1-S/(8B)SK2-包含層/(8C)SK1-4	Ⅱ-3古中		土師器: 杯A・皿A・甕A・付付蓋・平底鉢・付付杯・甕A・甕A・甕A・甕A・甕A・高杯・甕A・皿A・高杯・甕A・口口・皿・細須恵・口口・甕A・甕C/灰釉陶器: 碗・皿・甕・三足甕・緑釉陶器: 緑釉陶器: 碗・皿・甕・鉢・口口付付文陶器/少量製品: 釘/軟守/志摩式製瓦土器/小型模造品: 甕・把手/襷瓦土器/炭化材	
SK5791	土坑	83	(8A)SK1	Ⅱ-3~	C期	土師器: 杯A・碗A・碗A・皿A・皿A・高杯・甕A・甕A・黒色土器: A類杯・短須恵/須恵器: 杯・口口・皿・細須恵・甕・小型碗/灰釉陶器: 碗・小碗・皿・耳皿・皿・緑釉陶器: 碗・皿・陶器: 陶器: 小型杯/小型模造品: 甕/替瓦土器: 「口」/新製品: 釘/炭化材	
SD5792	溝	83	-	Ⅱか	A期	なし	SK5780西面の溝
SD5793	溝	83	(5B)SD8	Ⅱ	A期	土師器: 小片	SK5780西面の溝
SD5794	溝	83	(8A)SD1/(8B)SD1	Ⅱ-3.5	A期	土師器: 杯A・碗A・皿A・甕/須恵器: 甕/灰釉陶器: 碗	SK5780東面の溝
SD5795	溝	83	(8B)SD2	Ⅱ-3.5	C期	土師器: 碗A・皿A・甕A/須恵器: 甕/灰釉陶器: 碗・甕	
SD5798	溝	83	(8A)SK2	Ⅱ-2~3	B期	土師器: 甕A小片	
SK5801	土坑	83	(10A)SK1	Ⅱ-3~	C期	土師器: 甕A・甕/須恵器: 甕/陶磁器: 小片	古書陶磁器あり
SK5803	溝	83	(9C)SD7/(10A)SD3/(10C)SD5	Ⅱ-3.5	C期	土師器: 杯A・皿A・甕A小片	
SK5804	土坑	83	(9B)SK13	Ⅱ-4~Ⅲ-1	D期	土師器: 杯A・碗A/須恵器: 甕・京都赤鉢/灰釉陶器: 小片/緑釉陶器: 甕	
SK5805	土坑	83	(9B)SK12	Ⅱ-3.5	C期	土師器: 杯A・小片/輪郭口	
SK5811	土坑	83	(7C)SK2-3+P16	Ⅱ-3~4	D期	土師器: 杯A・碗A・碗A・皿A・付付杯・甕A・甕A/須恵器: 杯B・甕・甕/灰釉陶器: 碗・皿・甕/緑釉陶器: 小片	
SD5819	溝	83	(9A)SD1/(9B)SD2/(9C)SD1	Ⅱ-3	C期	土師器: 杯A・杯A・碗A・高杯/須恵器: 甕・小片	
SD5821	溝	83	(5D)SD1/(6B)SD3	Ⅲ-2~4	F期	土師器: 皿A・甕A/土師器: 小皿/須恵器: 小片	
SD5822	溝	83	-	Ⅱ-1.5	A期	なし	SK5820の相落ち溝
SD5823	溝	83	-	Ⅱ-1.5	A期	なし	SK5820の相落ち溝
SD5824	溝	83	(3B)SD4	Ⅱ-1.5	A期	なし	SK5820の相落ち溝か
SD5825	溝	83	(2E)SD2/(3E)SD2/(5D)SD2/(6F)SD1-2/(7F)SD1/(8F)SD1-2/(10F)SD1/(20)SK1-P16-5+6-7+10-11-15/(20)SK1	Ⅲ-2~4	F期	土師器: 杯A・杯B・皿A・皿A・高杯・甕A・甕A/土師器: 大型杯・碗A・小片/須恵器: 杯B・甕A・甕A/灰釉陶器: 碗/緑釉陶器: 小片/陶器: 鉢(山茶碗)・鉢	
SK5826	土坑	83	(20)SK1-P16-5+6-7+10-11-15/(20)SK1	Ⅲ-2~3	B期	土師器: 杯A・碗A・皿A・高杯・甕A・甕A/須恵器: 甕・甕・甕・甕A・甕A・甕A/緑釉陶器: 小片/蓋文土器	
SK5831	土坑	83	(3F)SK5	Ⅱ-4新~Ⅲ-1	D期	土師器: 杯A・杯B・付付小皿・甕A・甕A・甕A/土師器: 杯/須恵器: 杯B・甕A/灰釉陶器: 碗/緑釉陶器: 小片	
SD5832	溝	21-1-83-84-1-84-2	21-4次: (1)SD2/(3)SD7 83次: (20)SD3/(30)SD13/(40)SD2/(50)SD2/(60)SD2/(70)SD1/(80)SD13 84-2次: (2C)SD7/(2J)SD2/(30)SD1/(3J)SD12/(8C)SD9/(5C)SD13+22	Ⅱ-1	A期	土師器: 杯A・皿A・甕A・甕A/土師器: 小皿/須恵器: 碗A・甕A/小型模造品: 甕	
SK5834	土坑	83	(7G)SK1	Ⅱ-1中~	A期	土師器: 杯A・碗A・皿A・皿A・甕A・平底鉢・陶器/黒色土器: A類杯/須恵器: 杯B・小皿・甕A・黒色土器: A類細片/土師器: 小皿/須恵器: 杯A・甕A/灰釉陶器: 碗/陶器: 付付杯(山茶碗)・付付蓋(山茶碗)	
SD5837	溝	83	(20)SD10/(30)SD7/(31)SD1/(40)SD1/(50)SD1/(60)SD1	Ⅲ-1~2	F期	土師器: 杯B・皿A・甕A/陶器: 付付鉢/緑釉陶器: 小片	
SK5839	土坑	83	(41)SK10	Ⅲ-3~4	F期	土師器: 杯B・皿A・甕A/陶器: 付付鉢/緑釉陶器: 小片	
SD5843	溝	83	(7G)SD1	Ⅱ-3	B期	土師器: 碗A・甕A・甕A/須恵器: 甕・口口/灰釉陶器: 甕	

第12表 西加座南区遺構一覧(土坑・溝・井戸2)





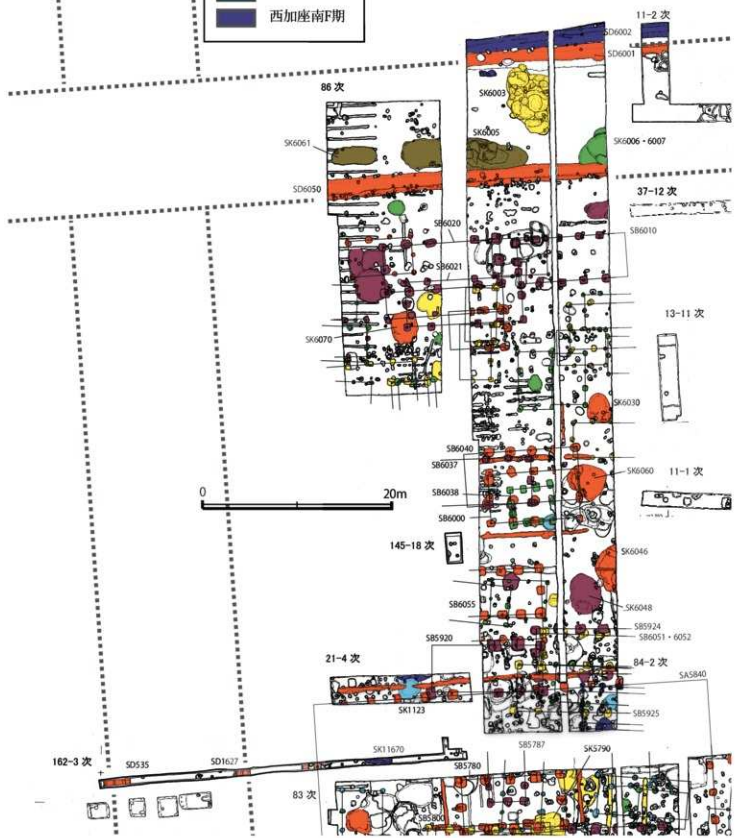
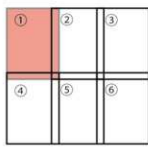
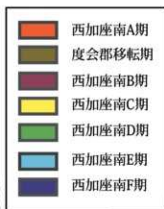




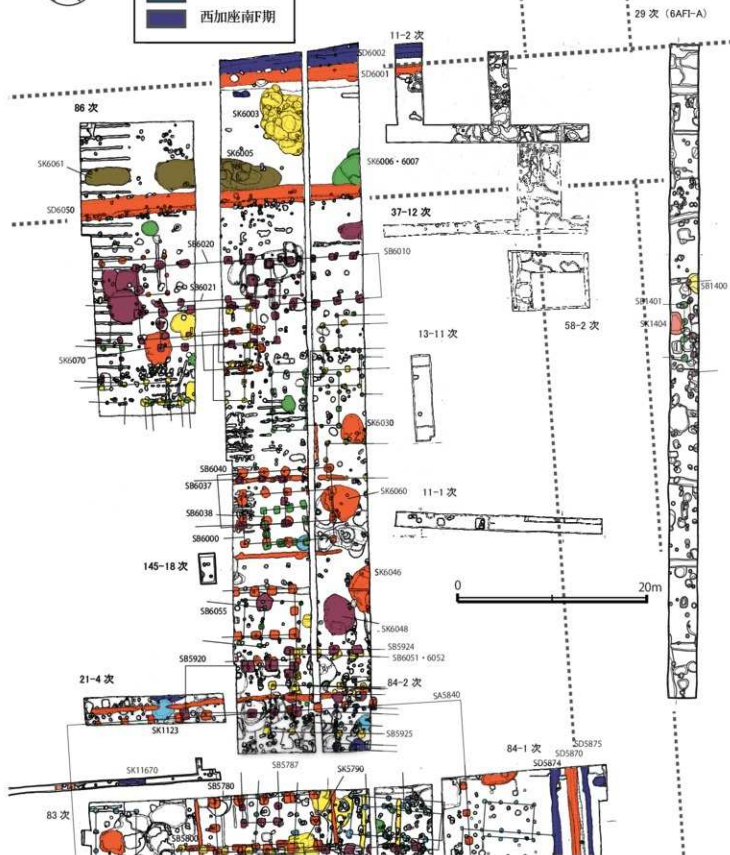
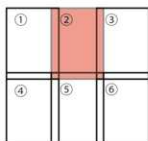
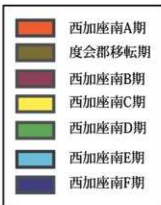


遺構番号	種別	調査次数	調査円番号	時期	西加屋敷 遺跡	出土遺物	備考
SD9514	溝	148	(S1):q7溝24	Ⅲ-1~2	E期	土師器:杯A・皿A・台付小皿・皿D・雙C・瓶C/土師器:底部穿孔小皿・柱状高台小皿/須恵器:雙C/灰釉陶器:皿・段皿	
SD9515	溝	148	(S1):q7溝25	Ⅲ-1~2	F期	土師器:杯A・小片/土師器:小皿/須恵器:小片	
SK1647	土坑	13-8-9	(M)土坑	I-3新~Ⅱ-1中	A期	土師器:杯A・杯G・皿B・皿A・皿B・蓋・小型高杯・把手持柄製鉢・小型雙A・雙A・鉢B・穿孔土器/須恵器:杯A・杯B・皿A・皿B・高杯・蓋・葉巻蓋・雙C・玉縁鉢/陶器:台付碗(山茶碗)/小段製造品:高杯・ワリ・鍍金器	
SK1648	土坑	13-8-9	(A)土坑/(M)P1	I-3新~Ⅱ-1	A期	土師器:杯A・杯G・皿A・高杯・雙A・雙C・瓶C/須恵器:杯B・碗・壺C	
SK1649	土坑	13-8-9	(A)土坑	I-3新~Ⅱ-1中	A期	土師器:杯A・杯C・碗A・皿A・高杯・雙C・把持土器/須恵器:杯A・杯B・蓋・台付盤・高杯・壺・雙C/灰釉陶器:碗	
SK1650	土坑	13-8-9	(M)土坑	Ⅱ-1中~	A期	土師器:杯A・碗A・雙A・鉢B/須恵器:小片	
SK1652	土坑	13-8-9	(C)土坑	Ⅲ-3	F期	土師器:杯A・皿A・台付杯・京都系小皿・雙A・雙C・穿孔土器/ワリ土師器:台付杯C/須恵器:小型高杯・蓋・把手持柄(平縁?)・雙C/灰釉陶器:碗/緑釉陶器:碗/陶器:杯・碗・碗(山茶碗)	I-3新~Ⅱ-1の土器も多数混入する
SK1653	土坑	13-8-9	(C)土坑	Ⅱ-3新~4	D期	土師器:杯A・皿A・ワリ土師器:杯/須恵器:杯B・雙C/陶器:碗	
SD1654	溝	13-8-9	(B)東西溝	I-3新~Ⅱ-1D	A期	土師器:杯A/須恵器:蓋・雙/不明土製品(土器?)	
SD1655	溝	13-8-9	(C)溝/(C)溝	Ⅱ~Ⅲ	E期	土師器:小片/ワリ土師器:碗/須恵器:杯A・雙C/灰釉陶器:皿・陶器:碗(山茶碗)	
SK1656	土坑	13-8-9	(C)P1	I-3新~Ⅱ-1中	A期	土師器:杯A・皿A・小型雙A/須恵器:杯B・皿B・蓋・台付鉢	
SK1657	土坑	13-8-9	(A)P1	Ⅱ-4~	D期	土師器:杯A・碗・台付鉢	
SK1658	土坑	13-8-9	(B)P1	Ⅲ-2~	F期	土師器:皿D・京都系小皿/須恵器:雙	
SK1659	土坑	17-3	(A)土坑	Ⅱ-3中新	C期	土師器:杯A・碗A・皿A・雙C/須恵器:蓋・雙/灰釉陶器:皿・壺	
SK1660	土坑	34	(B)P1・P2	Ⅱ-3	C期	土師器:杯A・雙・小片/須恵器:雙	
SK1662	土坑	34	(C)P1	Ⅲ-2~3	F期	土師器:杯D・皿C・皿D・台付杯・高杯・台付皿・台付鉢・鉢・雙A・雙C/黒色土器:A型碗/須恵器:広口蓋/灰釉陶器:碗/陶器:碗(山茶碗)/不明土製品	
SK1664	土坑	34	(B)P1・P5	Ⅱ-2	D期	土師器:杯A・杯B・碗A・皿A・高杯・雙A・鉢B・瓶C/須恵器:杯A・杯B・皿A・蓋・壺	
SK1665	土坑	34	(L)土坑D	Ⅲ-1	E期	土師器:杯A・杯D・皿A・皿D・碗C・台付鉢/黒色土器:A型碗/須恵器:皿/灰釉陶器:碗/陶器:碗/炭化材	
SK1666	土坑	34	(M)土坑A/(M)土坑5	I-3新~Ⅱ-1	A期	土師器:杯A・雙・瓶・鉢B・眞形蓋	
SD1667	溝	34	(N)溝15	Ⅱ-3~4	D期	土師器:小片/灰釉陶器:碗	
SK1668	土坑	83	(4)SK4-SK5	Ⅲ-2~4	F期	土師器:杯D・皿D・雙C/ワリ土師器:杯・小皿/灰釉陶器:小片/陶器:蓋/白磁:小片	
SK1669	土坑	53-15	(B)SK10	Ⅱ-1~2	A期小	土師器:杯・鉢・壺C	
SK1670	土坑	162-3	土坑1・2	Ⅲ-2	F期	土師器:杯・皿・台付杯/ワリ土師器:杯・皿・小皿・台付杯・台付小皿/灰釉陶器:小碗	

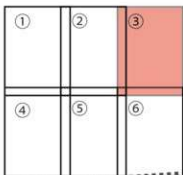
第17表 西加座南区面遺構一覧(土坑・溝・井戸7)



第12图 西加座南区面主要遺構配置图①(1:400)

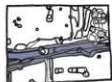


第13图 西加座南区面主要遺構配置图②(1:400)

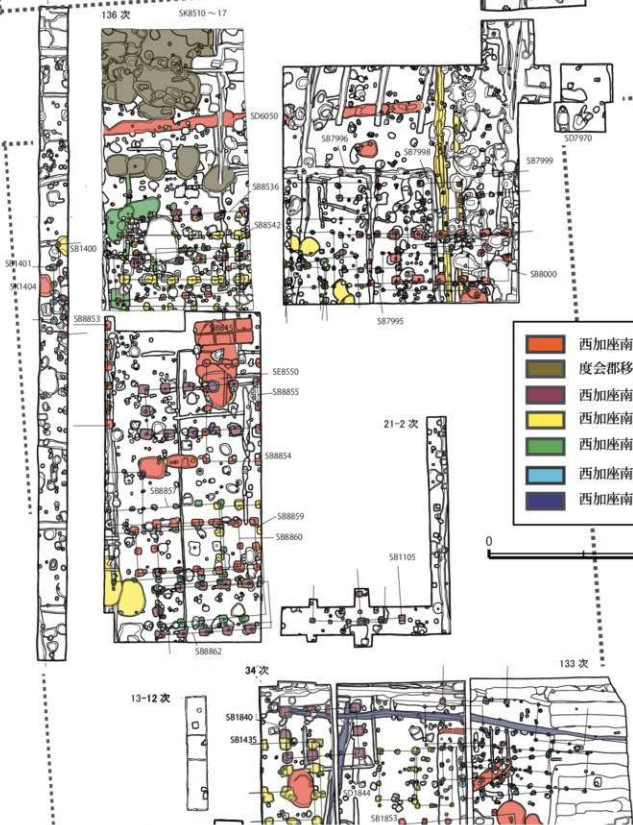


29次 (6AF1-A)

120次

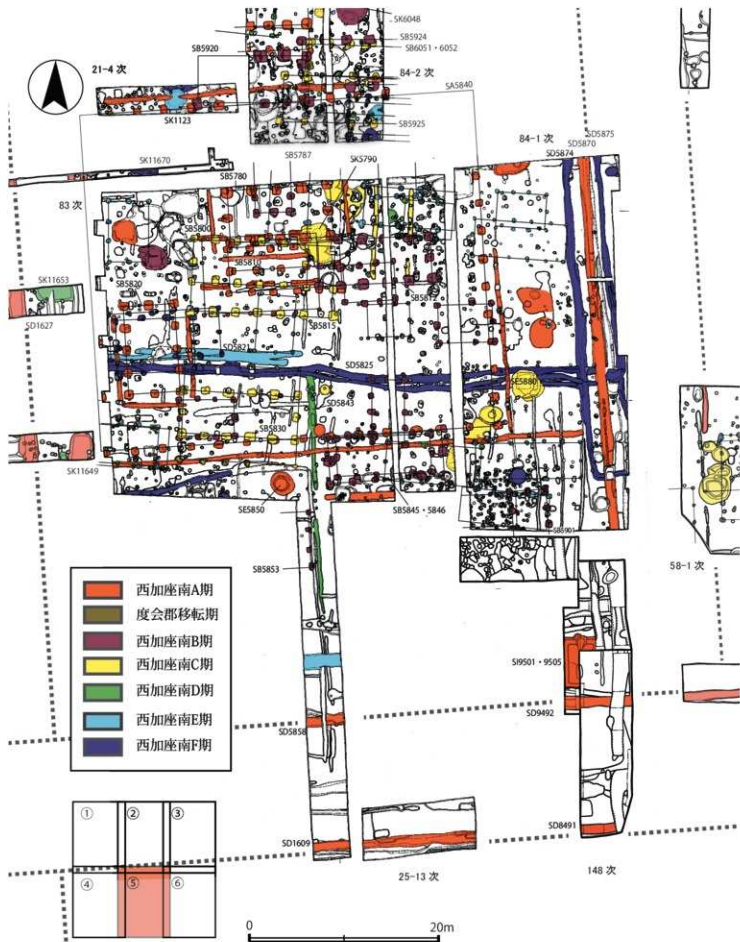


506002



第14图 西加座南区面主要造構配置图③(1:400)





第16图 西加座南区面主要遺構配置图⑤(1:400)





第17图 西加座南区面主要遺構配置图⑥(1:400)

## 第5章 西加座南区画の遺構の変遷

### 第1節 西加座南A期（第18図）

ここでは、これまでみてきた西加座南区画の遺構について、区画全体の変遷を整理してみたい。区画全体の掘立建物を中心とする主な遺構の時期や建て替え関係、並立関係に基づく変遷過程は第18表に整理した。

西加座南区画のA期は、区画の南西部に、東西14間、南北12間の掘立柱塼SA5840による方形区画（以後「方形区画」という）が形成され、区画内の他の地点とは隔絶した様相を示す段階である。この区画は以前から齋宮における祭祀ないしは儀礼の空間と想定されてきた。また、西加座南の区画の東西中心軸を通る区画内道路を境に東と西でも建物配置が大きく異なる。

**SA5840と内部の建物** 「方形区画」が存在する段階でも、その内部の建物は大きく三段階の変遷がある。これまで最も古く位置づけられてきたのは、4間×2間の東西棟SB5780を正殿とし、その南面西寄りに脇殿として4間×2間の南北棟SB5820とで形成するL字形の建物配置であった。しかし、今回建物の柱穴出土の遺物を精査したところ、5間×2間の東西棟SB5810の柱穴からI-3期新の土器類が多数出土しており、一方SB5780の柱穴からはII-3期のものは位置的に重複するSK5790などからの混入としても、II-1期中-2期のものが多く、全般的にSB5810より新しい要素が多い。遺構の重複関係の上でも、概ね段階ではSB5780→5800→5810と示されていたが、調査当時の略測図では、SB5780とSB5810の前後関係を決定的に示せるものではなかった。そこで次に、SA5840との関係をみるために、SA5840の柱穴にあわせたグリッド図を作り、これらの建物と合わせてみた（第19図）。これによるとSB5780もSB5810もいずれも東西中心軸をSA5840区画の東西中心軸に合わせているように見える。また、SB5780と対になるSB6020もこの計画線によく合っている。しかしSB5810をみると、東西軸だけでなく南北中心軸もSA5840と整合していることが確認できる。SB5810から出土するI-3期新の土器は、方形区画の西側の第13-8・9次調査からまともに出て出土していることが、今回確認されており、SB5810との時期的位置関係が想起される。このことから、断定には至らないかもしれないが、SB5810→5780→5800の前後関係も考えられる。なお、SB5800は略測図から見ても、この3棟で最も新しいと判断できる。次にその具体的な時期だが、これまでこの「方形区画」の出現期については奈良時代後期あるいは末期といった表現がなされてきた。2019年の土器編年試案では、おおむね齋宮I-3期新の段階を光仁朝に相当する時期、桓武朝の長岡京期に相当するのはII-1期古の段階、平安京遷都以降はII-1期中の段階以後と、おおよそ捉えている。SB5810を最も古とすれば、出土遺物からみても8世紀後葉の光仁朝期まで遡り得る。SB5780への建て替えは、SB5780の柱穴にII-1~2期の土器を含むことから、齋宮の方格街区の整備が進む9世紀初頭ということになるだろうか。SB5800は、天長元（824）年の齋宮の度会郡移転以前の短い期間である可能性がある。

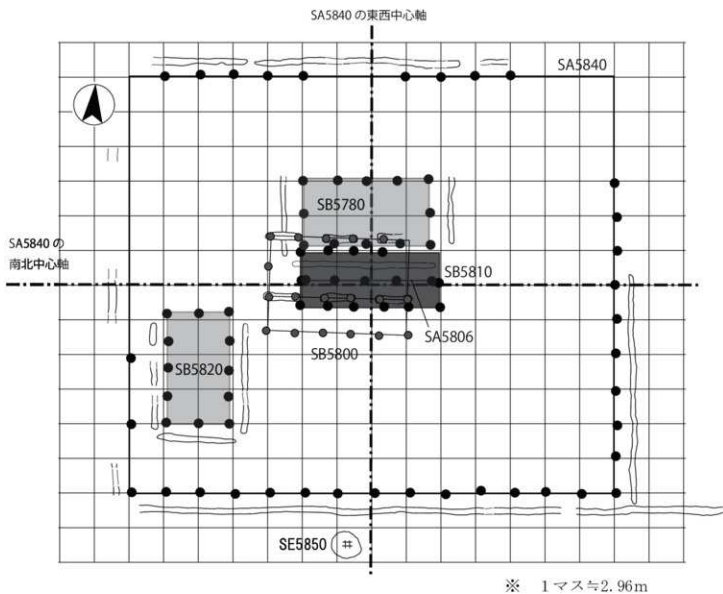
**SE5850** SA5840の南前面の井戸SE5850は、概ね段階では平安時代前II期、現在の時期区分でII-3期頃の遺構に区別されていた。この井戸は、第19図でも、「方形区画」の東西中軸からわずかにずれた位置にあることが分かる。しかし、西加座南区画内でA期にかかる井戸は、現在のところ第140次調査区のSE8550のみで、この井戸はA期の極めて早い段階に埋没している。もちろん調査率60%強の西加座南区画の未調査部分に未発見の井戸がある可能性はあるが、「方形区画」の祭祀・儀礼の空間にも清浄な水は必要であり、具体的な位置は不明だが、SA5840の南面に棟門あるいは冠木門程度の出入り口があれば、SE5850はこの祭祀・儀礼空間と親和性の高いものと考えられ、井戸の掘削自体はA期にまで遡らせるべきと考える。ちなみに、微地形的に東西方向の浅い谷が入るSA5840の南側にはA期以降もまともな建物はほとんど建てられていない。このことからSE5850は西加座南区画の祭祀空間のための井戸とみるべきだろう。

**建物外周の溝** この時期の建物群の特徴のひとつに、建物の外周に掘られる溝がある。第83次調査区のSB5780・









第19図 SA5840と主要建物(SB5810・5780・5820・5800)

5820、第86次調査区S B 6000に伴うとみられる溝である。これまで建物の外周の溝は雨落ち溝と評価されることが多かった。しかし、第86次調査の概報でも、これらの溝は壁が垂直に立つものもあり、短期間に埋没した様子があることから、堀ないしは垣という意見が出され、また近年の史路西部での飛鳥・奈良時代の齋宮推定中核域の発掘調査でも、建物に沿った細く深い溝が見つかり、やはり堀ないしは垣と評価されている。このような溝を持つ建物は「内院」に比定される鍛冶山西区画でも見ついている。ただし、これを建物の外周の垣とすると、S B 5780の場合、その南面に桁行と同じ4間の掘立柱塼S A 5806があり、同時併存だと堀の内側に垣ないしは堀を二重に持つことになるため、前後関係を想定するしかない。

**区画西北部の土坑** 第86次調査では、A期の比較的大型の土坑が多数掘られる。S K 6030・6046・6060などである。これらには多量の土器類が投棄されるが、土師器杯・碗・皿類に混じって志摩式製塩土器や線刻土器・土馬とともに多量の炭化材を伴っている。土師器杯・皿の中にも被熱痕を持つものがあり、西加座南区画西半の祭祀や儀礼に伴って使用された器物が埋められたものと考えられる。

**区画東部の建物配置** 第136次調査区のS B 8539や、第140次調査区のS I 8845・S E 8845といったA期でも初期の遺構もあるが、区画の南西部の「方形区画」方形区画の外周を囲む溝と対称的な位置に、区画東部にも溝が続くことが確認されている。S B 1860はこの溝に併行して建てられた南面崩を持つ大型建物だが、周囲の建物との独立性も高く、西の「方形区画」に対する何らかの機能を付与されていた可能性もある。

その後、区画の東半では、5間×2間の東西棟が南北に並ぶ建物配置が現れる。現在S B 1870・1853・3874・8543・8544・8860の6棟が確認されている。第17・3次・21・2次調査の地点にも想定できるが、調査区が狭小であったためか、この部分では建物は確認されていない。あるいは配置計画はあってもすべては完成していなかった可能性もある。これらの建物は南北には約20m、東西には約15mの間隔をあけ規則的な配置となり、同様の建物配置は、北側の西加座北区画や北西の下園東区画でも確認され、齋宮寮の「寮庫」と評価している。西加座南区画も同様のものと考えられることが、西加座南区画のこれらの建物は柱穴の規模でみればかなりのバラつきがあり、一律に倉庫建物とみることができるかどうかは躊躇する。またこれらの建物の間に、齋宮跡土器編年のⅡ-1期新の基準資料としているS K 1445や、その北側のS K 1443など、多量の土器を包含する土坑もある。西加座南区画の並列する建物群の性格は、出土遺物や他の区画との広い視点からの検討が必要だろう。

**区画縁辺部の竪穴建物** 西加座南区画では、A期の早い段階で3棟の竪穴建物が確認されている。第140次調査区のS I 8845と第148次調査区のS I 9501・9505である。いずれも規模は大きくなく、S I 8845は長方形を呈するなど、いずれも調査時から居住用の建物ではない可能性が指摘されている。微地形的にも高燥とはいかない立地である。出土遺物に大きな特徴はないものの、光仁〜桓武朝期にかけて、齋宮中核部の造営に関連する工房的な性格が考えられる。

## 第2節 齋宮の度会都移転期（第20図）

天長元（824）年から承和六（839）年にかけて、齋宮が度会都離宮院に移転した時期で、齋宮跡の土器編年による時期区分ではⅡ-2期の中ほどにあたる。明確にこの時期にあたる建物は確認されておらず、A期の区画の外縁部の建物、例えば第86次調査区のS B 6016・6028・6063や第133次調査区のS B 8461などが引き続き残っていた可能性を指摘できるととまどる。

一方、区画の東・西・南辺の区画道路では未確認だが、北辺道路の路面上に、土器類などを投棄する土坑が多数掘削されるようになる。第86次調査区のS K 6005・6061、第136次調査区のS K 8510～17がそれで、路面上での多数の土坑の掘削は、道路機能の低下につながるものであり、この齋宮の移転が、多気部の齋宮を放棄し、完全な移転を目指したものであったことの証左と考えられる<sup>11</sup>。ただし、大部分の地点で道路幅溝の埋没にまで至っておらず、時期にも道路の形状は維持されていたと考えられる。



第20図 齋宮度会郡移転期の主要遺構配置(1:1,000)

## 注

- ① 大川勝宏「斎宮跡方格地割に関する二・三の試論」『斎宮歴史博物館研究紀要十七』2008

### 第3節 西加座南B期（第21図）

承和六（839）年に度会郡の斎宮が火災に遭い、再び多気郡のこの地で斎宮が再建される段階である。斎宮跡土器編年による時期区分ではⅡ-2期新～Ⅱ-3期古の頃で、9世紀第2四半期から第3四半期の頃と想定される。この時期には、A期でみられたような、区画南西部の隔絶性はなくなり、区画全体が比較的均等な空間となる大きな変化がある。

**区画西半の建物の並列** B期の早い段階で、区画の西半でA期に区画東半で見られたような建物の規則的な配置が生まれる。第84-2・86次調査区のS B 5920・6021・6037の3棟がそれで、5間×2間の東西棟が南北に約15mの間隔をあけて並ぶ。これらは方格街区の基準方向であるE 4° Nにおおむね合っており、度会郡移転期の後でも街区の地割は機能していたことが分かる。

A期には大型の建物もみられた区画南西部は、建物密度が薄くなり、3間×2間程度の小型建物が散在する。第86次調査区のS K 6048のような大型で多量の土器類と志摩式製塩土器や炭化材を包含する土坑もある。

**区画内道路を越えた建物配置** 先に見たS B 5920などの並列する建物のあと、区画西半では東に位置をずらして同様の並列した建物群が建てられる。第83・84-2・86次調査区のS B 5812・5845・5924・6010がそれで、いずれも5間×2間の東西棟である。S B 5924とS B 6010の間には確認されていないが、柱穴の規模等により未検出なのか、そもそも建てられなかったのかは分からないが、建物配置の規則性からみて、この位置にも建物は想定されていたと見るべきだろう。これらはお互いに約15mの等間隔で配置されており、A期の東半や、西加座北区画や下園東区画の配置のように南北4棟ではなく、5棟の規格で配置されていることは注目すべきであろう。

この区画西半の建物配置は、南北区画内道路を越えて東半にも表れる。第34・53-15・136・140次調査区のS B 1440・8536・8855・8862がそれで、やはり5間×2間の東西棟が5棟分の南北に並列している。また、これらは区画内道路を挟んで、区画西半の並列建物群とそれぞれ緊密に対応した位置関係にあることが分かる。西加座南区画内ではA期の「方形区画」以外は区画の内側を画する塀や垣は確認されておらず、それは近隣の柳原区画・西加座北区画・下園東区画・東加座南①区画でも同様である。東半でもS B 1440の北側の1棟は確認されていないが、これはこの部分の第13-12・17-3次調査区の狭小さによる可能性がある。

**小規模な建物の配列** 5間×2間の東西棟による大きな建物配置以外にも、区画東半の北東部と南東部には3間×2間の東西棟・南北棟による建物群が造られ、これらもある程度規則的な建物配置を意図しているとみられる。第120次調査区では南面廂を持つS B 7999に対し、同じ棟方向で3間×2間の建物が配置されるし、第34・133次調査区ではS B 1843・1848・1854・1864やS B 1438・1840がそれぞれおおよそ等間隔を保ちながら南北に配置されていることが窺われる。

このように西加座南B期は、区画全体の均等性と、規則的配置を志向する建物群に特徴づけられる。

### 第4節 西加座南C期（第22図）

B期でみられた、区画内の均等性が崩れ、廂を持つ大型の建物が区画内に建てられるようになる段階である。斎宮跡の土器編年による時期区分ではⅡ-3期中新からⅡ-4期にかかる頃に想定され、9世紀第3四半期の途中から10世紀初頭にかかる頃と想定される。

**区画南西部の大型建物** 第83次調査区でS B 5815・5830が建てられる。いずれも5間×2間の身舎に2方向の廂がつくものである。またそれぞれ棟方向がE 3° Sと、方格街区の軸線と大きく異なる棟方向を持つことに大きな特徴がある。またこの北側の第84-2次調査区にも5間×2間とみられるS B 5925も同様の棟方向を取る。S B 5815・



第21図 西加座南日期の主要遺構配置(1:1,000)



第22図 西加産南C期の主要遺構配置(1:1,000)





5830は、前後関係にあることも考えられるが、身舎の柱筋がおおむね揃っており、同時に併存していた可能性もある。この2棟の東側は建物が建たず、「ニワ」的な空間が広がっていたことも分かる。またこの位置に井戸S E 5880がこのころには削ぎされ、S E 5850はその機能を終えているとみられることも、区画の空間利用で大きな変更であったことを示す。

西加座南区画では、この3棟以外は方格街区と大きく方向を違える建物は見られないが、西隣の柳原区画では同様の建物方向への変化があったことが分かる。西加座南区画と柳原区画をつなげて主要遺構の配置状況みると第23図のようになる。柳原区画では、9世紀後半頃の柳原D期になると、区画全体の正殿である四面廂付建物のSB9766を中心に、掘立柱礎に囲まれた区画南西部の一群を除き、E3°S前後の棟方向を取るようになる。西加座南区画南西部の大型建物は、柳原区画の建物の動向と連動しているように見える。大型の廂付建物の変化からみると、柳原区画のB～D期にかけて、「寮庁」柳原区画の要応等の機能を果たしたとみられる西脇殿SB1080が徐々に小型化し、この段階で廂の付かない側柱建物に変化している。その時期に西加座南区画では廂付の大型建物が出現しており、あるいは柳原区画の機能の一部を西加座南区画の南西部で担うようになったようにも見える。この変化は、齋宮全体の何らかの事情に原因があるとみべきだが、「日本三代実録」にみえる貞観九(867)年の齋宮寮が火災により十二宇が延焼した記事や、元慶五(881)年の齋宮寮雑舎修理の記事などの関連が考えられるが、特定には至らない。

**区画南東部の建物群** 一方区画の東側にはE3°Sに近い棟方向を取る建物はなく、この段階には再び区画の東西での違いが現れてくる。区画南東部には第34次調査区に二面以上の廂と縁を持つとみられるSB1435が現れ、この一画の中心的な建物になるとみられる。SB1435の東には、おおむね棟方向を揃えてSB1846などがあって、これら是一群をなすと考えられる。また、その南にはB期のSB1440を同一場所で建て替えたSB1411・1442があり、これにL字形の配置になるSB3872があって異なる一群を作る。

**区画北東部の建物群** 区画の北東部をみると、柱穴の規模は大きくないものの、第136次調査区の5間×2間の身舎に南に1間の廂がつくSB8540が目立つ。SB8540と、区画南東部の廂付建物SB1445の間には、第140次調査区の5間×2間の南北棟SB8858はあるものの、建物の密度が薄い部分がある。このように、C期の区画東半は北と南に分かれてそれぞれ建物の小群を作ることが窺われる。

**区画北西部の建物群** 一方、区画の北西部は、第86次調査区の北半に3間×2間の小型の建物による一群が作られるようだが、他所で見られるような群の中心的な役割を持つとみられる建物は明らかではない。この一群と区画南西部の大型建物群との間にも空間部があるようである。区画北辺の道路上には新たに複数の土坑を集中的に掘削したとみられるSK6003があり、この頃から徐々に北辺区画道路は幅員を減じ、緩やかに屈曲する姿に変わっていったものとみられる。

## 第5節 西加座南D期(第24図)

C期には区画内の複数個所に置かれていた大型建物が姿を消す段階である。齋宮跡の土器編年による時期区分ではⅡ-4期からⅢ-1期にかかる頃に想定され、10世紀初頭から第3四半期にかかる頃に想定される。

**区画南西部の棟方向** 建物は小規模化するものの、区画南西部では前代につづきE3°Sに近似する棟方向の建物が継続する。第83次調査区のSB5802・5828・5847、第84-2次調査区のSB5926、第86次調査区SB6057・6959も含められる。しかし、いずれも建物の規模は縮小し、建物の密度も薄くなる。5間×2間の規模を持つものでも柱穴の掘形は0.3～0.4mの円形ないし不整形の規模になる。遺構が重複するため、全容はわからないが、第83次調査区のSD5943も東西方向の部分は、これらの建物に近い向きを取る。

**区画北西部の建物** 一方、区画北西部では、建物の小型化進むものの、区画南西部より建物の数は多いが、中心的な建物を核に建物群としてまとまるような様相は窺えない。その中でSB6038は小型の建物ながら東梁と西梁で間数が異なり、南桁行の中央の2本の柱が溝持ちの掘形となるなど、特殊な構造を持っている。第86次調査区の北端で



第24図 西加座南D期の主要遺構配置(1:1,000)

はC期からのSK 6003に加えて、SK 6006・6007も北辺道路上で掘削されており、区画道路の縮小が進むとみられる。  
**区画東部の様相** 全般に建物の小規模化が窺われるのは区画西部と同様である。ただ東部全体を見ると北部・中部・南部の三か所に建物の集中がみられる。北部では第120次調査区のSB 8002と第136次調査区のSB 8542が5間×2間の規模を持ち、その周辺に3間×2間の南北棟が並ぶ。SB 8542の南面にはSA 8545があって、同時に併存するものならば、SB 8542はこの一画でやや卓越した性格もうかがえる。

東半中部では、第21-2次調査区のSB 1104や、第140次調査区のSB 8861・8863の東西棟が見られるが、北部や南部の建物群とは約30mの間隔をあけている。

東半南部には、3間×2間の規模のものしか見られず、一部棟方向を揃えているようにも見えるが、全体に小規模な建物が散在している状況がうかがえる。

**斎宮中樞部の変化** D期には区画内で建物の小規模化や分散する様子を見たが、この頃、南側の「内院」鍛冶山西区画においても、土器編年による時期区分でⅡ-4期を最後に鍛冶山西区画では建物が建てられなくなり、区画内を細分していた溝SD 6750やSD 8066・8067やそれに並走して連結する土坑SK 8066・8071・8073など区画中心にも近い遺構に大量のⅡ-4期新からⅢ-1期にかけての土器類が土師器を中心に遺構を埋め尽くすように埋められている。これ以後、鍛冶山西区画には全く遺構がみられなくなり、「内院」の機能は西接する牛葉東区画に集約されていくと考えられている。ほぼ同じ段階の柳原区画ではE-2期には正殿たる四面廂付建物のSB 9751はあるものの周辺の建物は少なく、区画の南に区画溝や堀によって区切られた別院のような構造が生まれるといった変化がある。西加座南区画の変化は、斎宮中樞部のこうした動きと連動している。

## 第6節 西加座南E期（第25図）

E期はD期の建物の状況を継承しているが、区画北西部では建物が建てられなくなる段階である。斎宮跡の土器編年による時期区分ではⅢ-1期からⅢ-2期にかかる頃に想定され、10世紀第3四半期から11世紀第1四半期にかかる頃と想定される。

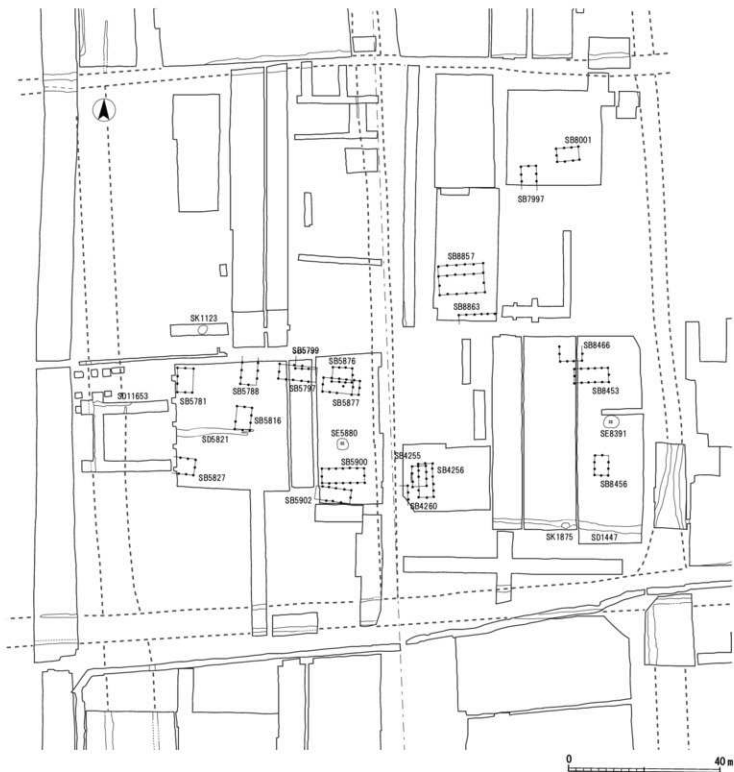
**区画西部の建物配置** この時期には区画北西部の建物はなくなり、南西部にのみ分布する。D期に引き続き第83・84-1次調査区には東で南に振る方向の建物が主体的に建てられている。これらの中には、SB 5788・5816のように、南北棟が桁行柱筋を揃えているものや、SB 5797とSB 5877、SB 5799とSB 5876のように規模がよく似た建物が建て替える関係を示すように並んでいる。区画南西部の中で第84-1次調査のSB 5900はほぼ正方位に近いが、これは東半の第58-1次調査区の建物と親和性が感じられる。

第84-1次調査区の井戸SE 5880はⅢ-1期の初め頃までは機能し、以後SD 5825が重複することからE期の中で埋没していったと考えられる。

**区画北東部の建物** 第140次調査区のSB 8857は柱穴の規模は大きくないが、5間×2間の身舎の北側に1間分の廂を付ける建物で、E期の西加座南区画で最も大きな建物である。これ以外では、部分的に検出したSB 8863や、第120次調査区で小規模な建物がL字形の配置で見られるのみで、建物の密度は薄い。

**区画南東部の建物** 区画南東部の中央には建物がなく空白地となる。西辺の第58-1次調査区内と東辺の第133次調査区内に建物が見られるが、柳原区画や下園東区画の平安時代後期の建物配置に見られたように、その段階で機能している道路に近い位置に建物が建てられる傾向にあると考えられる。E期までには区画西辺と南辺を除き、東辺と北辺は区画道路の幅員が大幅に減り、道路の法線も緩やかに蛇行するものとなっている。また、区画の東西中心軸を通る区画内南北道路もやや東に移動しつつも存続しているとみられる。

先述の通り、E期には区画西部の井戸SE 5880が埋没していくのに対し、この頃までには区画東部の第133次調査区の井戸SE 8391がD期～E期にかけての間に機能するようになっていたとみられる。



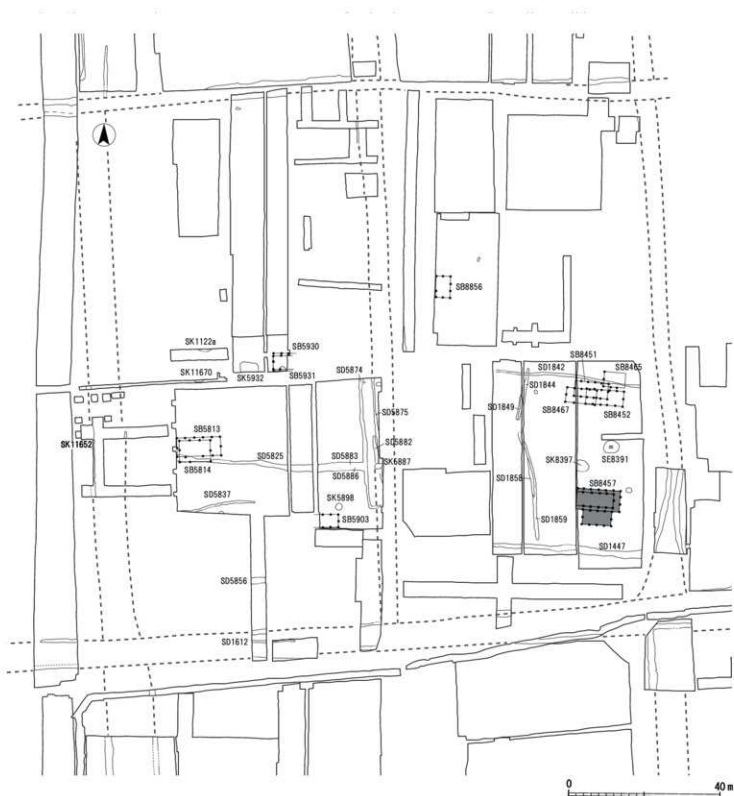
第25図 西加座南E期の主要遺構配置(1:1,000)

## 第7節 西加座南F期 (第26図)

F期はさらに区画北等部でも建物が建てられなくなっていく段階である。その一方で南東部では顕著な建物もみられる。斎宮跡の土器編年による時期区分ではⅢ-1期新からⅢ-2期に想定され、11世紀第1四半期から11世紀内と想定される。

**区画南西部の遺構** F期に至って東で南に振る棟方向の建物が建てられなくなり、いずれも正方位に近い東西棟になる。S E 5880の位置には西から東へ流下するS D 5825・5883・5886が区画内南北道路まで貫通している。西部では、この時期の遺物が良好に出土する遺構はほとんどないが、第162-3次調査区のS K 11670は小規模土坑ながらⅢ-2期の比較的まとまった資料が出土している。

**区画東部の遺構** 区画内南北道路の東側でも、北半にはほとんど遺構がみられなくなる。第140次調査区の南北棟S B 8856が唯一の建物である。この時期の建物の分布は、第34・133次調査区内のやや湾曲する溝S D 1447・1842・1844・1858に囲まれた範囲にみられ、いずれも区画南東部ではこれまで見られなかったE 4° Sのように東で南に振る棟方向の建物群を構成する。最も特徴的な建物はS B 8457で、第133次調査の概報段階では3つの遺構番号が付されていたが、本報告では一体の建物として扱っている。柱穴の規模は小さいものの、5間×2間の身舎に北・東・南の三方に1間分の崩出を持ち、さらに南側に4間×2間の張り出し状の部分を持つ。具体的な上部構造はわからないが、2棟を連結したような構造か、三面崩付建物にさらに広縁状の張り出しが付くのではないかと考えられる。建物性格も官衙の施設というより居宅的な性格もうかがわれる。他の建物も5間×2間の東西棟が多く、Ⅲ-2期にはこの一画にある井戸S E 8391に大量の土器が投棄されていることから考えれば、F期のこの溝に囲まれた一画が、これまでとは異なった性格を持っていたと考えられる。あるいはこの時期の斎宮に在地化を進める大中臣氏の関与が強まることとの関係も考えられる。



第26図 西加座南F期の主要遺構配置(1:1,000)

## 第6章 遺構編小結

本報告書で扱ってきた西加座南区画は、平成元年度の第83・84次調査で確認した掘立柱塼S A 5840による東西41.4m、南北35.5mの方形区画と、その内部にL字形に配置されたS B 5780・5820に対して、平成11年度の齋宮歴史博物館の展示リニューアルの頃から「神殿」と推定されるようになり、現在もこの見解が定着している。確かに西加座南A期の段階の掘立柱塼に圍繞された空間は、齋宮全体でも「内院」の他、短期間に方格街区南西隅の木葉山西区画の八脚門を伴う区画が知られているのみであり、齋宮における特殊性は際立っている。本書ではこの最初期の状況だけでなく、周辺の区画の状況も見ながら、西加座南区画の全体像を俯瞰できた事に大きな意義があると考えている。

実際、区画の変遷を追ってみると、複雑な状況も認められる。まず、西加座南A・B期において、区画内に規則的に配置される5間×2間の東西棟群の存在がある。こうした建物配置は、これまで西加座北区画を代表として、齋宮を運営・維持するための物資を貯蔵する「寮庫」とされてきた。西加座北区画の「寮庫」は8世紀末～9世紀初頭頃のものと考えられており、西加座南区画の東半の最大で8棟とみられる建物群も西加座南A期（8世紀末～9世紀初頭）の中で考えられる。その後、下園東区画には、齋宮が度会郡離宮院へ移転する直前の下園東B期（9世紀初頭～前葉）に16棟と推定される建物群が、齋宮が多気郡に遷った直後の西加座南区画に西加座南B期（9世紀中葉）の建物群が、区画中央の南北道路を挟んで最大で10棟整然と配置されている。この西加座南区画に見られる5間×2間の建物群も単純には「寮庫」の一部とは考え難い。現在整理中だが、西加座南区画からは膨大な量の出土遺物があり、小型模造品、刻書・線刻土器、墨書土器や、内面に被熱痕のある土器器杯・皿や土器器高杯のような祭祀性が考えられる遺物や、平底鉢や盤、甑、甕が他の区画と比較して卓越する状況が少なくとも9世紀から10世紀前半頃までは窺える。遺構面ではA期の「神殿」状のものは見られなくなるが、出土遺物の性格には一定の連続性がかがえるのである。こうした点からも、西加座南A・B期の並列建物群は安易に齋宮寮の倉庫とは考えられないのである。さらに西加座南C期には、区画南西部を中心に、棟方向が大幅に変わる廂付建物の一群があり、「療行」柳原区画と連動した建物構成となる可能性を指摘している。これは下園東区画の南端が柳原C・D期（9世紀後半）に包摂されるのとはほぼ同時期であり、齋宮の構造が大きく変容していることが分かる。西加座南C期の大型の廂付建物が、第5章でも触れた通り、「療行」柳原区画の西臨殿の機能を継続しているならば、齋宮における新嘗祭の解斎などにも使用される、主神司が関与する施設であった可能性がある。これが変容していくのが西加座南E期（10世紀後半）頃からで、まず区画北半の建物が激減し、区画北西部には全く見られなくなっている。「内院」鍛冶山西区画や、方格街区東半の区画が10世紀後半～11世紀にかけて衰退するのと同じ動きと考えられ、齋宮全体に及ぶ構造上の変革があったことは疑いない。さらに西加座南E～F期には、それまで区画の中核的な機能を担ってこなかった区画南東部に建物、井戸が顕著になる。第5章でも居宅的な性格への変化を示したが、11世紀における在地化した大中臣氏の関与の可能性や、「祭主補任」にみられるような齋宮や離宮院への成功に関する記事の増加から看取される齋宮財政の弱体化を示すものではないだろうか。このように西加座南区画は、その全存続期間において、齋宮の中で重要な機能を果たしてきたと言えるのではないかと。

しかしながら、遺構の再検討で浮かび上がった課題、特に西加座南区画の各期の実態・機能については、出土遺物を含めて総合的な検討されるべきであり、今後刊行していく予定の遺物編を踏まえて全体的な総括を試みていきたい。



## 報告書抄録

ふりがな	さいくうあとはつくつちょうさほうこく よん							
書名	斎宮跡発掘調査報告IV							
副書名	西加座南区画の調査 遺構編							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	大川勝宏							
編集機関	斎宮歴史博物館							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL.0596-52-7027							
発行年月日	西暦 2024年 3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ′	° / ′	m <sup>2</sup>		
斎宮跡	多気郡明和町 斎宮・竹川	24442	210	34° 31′ 55″ ～ 34° 32′ 30″	136° 36′ 16″ ～ 136° 37′ 37″	19750702 ～ 20090911 (西加座 南区画)	約9,730m <sup>2</sup> (西加座 南区画)	学術調査ほか
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
斎宮跡 西加座南区画	官衙	奈良～平安	掘立柱建物 堀 土坑 溝 井戸 竪穴建物 道路跡	土師器 須恵器 緑釉陶器 灰釉陶器 貿易陶磁 製塩土器 瓦 金属製品		奈良時代末～ 平安時代の方 格街区の西加 座南区画の検 出遺構の総括		
要約	<ul style="list-style-type: none"> <li>・奈良時代末期～平安時代初期にかけて史跡斎宮跡の東部に造営された方格街区の西加座南区画の遺構を再整理し総括した。</li> <li>・区画内の建物の変遷の在り様から、斎宮の度会部移転期を含め、A～F期の7期の画期を整理した。</li> <li>・A期には区画南西部にS A5840（東西14間×南北12間）による方形区画が造られ、その内部にA期中でも3段階の建物変遷がある。方形区画に南接するS E5850もこのころまで遡ると考えられ、祭祀的な遺物と相まって斎宮の祭祀的な施設であると考えられる。</li> <li>・A期の区画東半には、5間×2間の東西棟が8棟並立する建物配置が見られる。</li> <li>・斎宮が度会部へ移転している9世紀前半には建物遺構がみられなくなり、区画道路上に大型の土坑が掘削されるようになる。</li> <li>・9世紀中葉のB期には、西加座南区画全体で5間×2間の東西棟が10棟程度並列する状況となる。</li> <li>・9世紀後半のC期には、区画南西部を中心にこれまでと大きく建物の棟方向をたがえる建物群が出現し、これは西隣の柳原区画と一体の建物配置となり、寮庁の機能の一部を移している可能性がある。</li> <li>・10世紀から11世紀の初頃ころにあたるD・E期には建物が減少し、区画内の中心的な建物も明確でなくなり、特にE期には区画の北西部には建物が皆無になる。</li> <li>・11世紀代に入るF期には区画南東部に建物が集中し、土器類を大量に投棄する井戸もみられる。これ以降、西加座南区画では建物もその他の遺構も見られなくなり、半葉東区画や柳原区画・下園東区画などに比べて早く廃絶していく。</li> </ul>							

# 齋宮跡発掘調査報告Ⅳ

西加座南区画の調査  
遺構編

2024年3月25日

編集・発行 齋宮歴史博物館

印刷 株式会社アイブレーション



